

サヴァンの碁 — 塔矢家のヒカル

松村順

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

紅梅と白梅の花の咲く小さな公園。佐為はそこで知的障害を負った少女ヒカルに出会い、彼女に宿ることになる。翌日には塔矢アキラと対局し、やがて塔矢家の人びとに迎え入れられる。こうして、佐為を宿したために碁の天才となった少女ヒカルと塔矢家の人びとが織りなす物語が始まります。

時系列的にはほぼ原作のとおり、そして原作の時間を越えて進行しますが、原作の進藤ヒカルに相当するキャラクターは登場しません。知的障害を持つ少女ヒカルと佐為としてアキラとのかかわりがストーリーの中心になります。恋愛要素は、異性愛であれBLであれGLであれ、ほぼ皆無です。

目次

1 : 二つの出会い	1
2 : 塔矢家にて	18
3 : 春休み	35
4 : 胎動	51
5 : 天然天才少女	67
6 : 変わるもの、変わらぬもの	85
7 : 兆 (きざし)	101
8 : 迷いの中から	118
9 : 別れと永遠	133

1：二つの出会い

1—1 佐為視点

「満開の梅が散り始めた頃ですね。よかった、5〜6日遅れたら、散り終えていたかもしれない」

佐為は心の中でつぶやく……

虎次郎が34歳の若さで亡くなってからずっと碁盤に取り宿っている我が身であるけれど、神の計らいで年に1日だけ外に出してもらえる。今年で何回目だろう、100回は越えたと思うけれど、もはや数え切れない。さほど遠くまでは行けないけれども、毎年この時季、梅が咲きほこる頃に出歩く。華やかな桜より清楚な梅の方が好きだった。今もその好みは変わらない。何年か前に見つけた小さな公園。紅梅と白梅が1本ずつ植えてある。満開の梅の花びらがかすかな風に散る。そして、我が身をすり抜けて落ちていく。我が身をすり抜けて……。それは一抹の悲しみを感じさせる。花の散る悲しみと、実体を持たぬ者の悲しみ。

そんな思いから我に返ると、目の前に幼い女の子がわたしを見上げている。

「この子、わたしが見えるのか？」

まさか、そんなことかと思うけれど、この子は確かにわたしを見ている。あどけない表情で。試みに声を掛ける。

《わたしが見えるのですか？》

その子は、こくんとうなづく。

《わたしの声が聞こえるのですね？》

その子は、またこくんとうなづく。

「神よ、感謝いたします。わたしはもう一度人の世に戻り、碁を打てるのですね。神の一手を探求できるのですね」

こんな感慨にふけっているわたしに、その子が声をかけた。

「女の人？ 男の人？」

《ああ、わたしは男ですよ》

「男の人なんだ……。おにいさん、きれいだね」

「おにいさん・・・まあ確かに、この子よりずっと年上ではあるけど・・・」

《お嬢さん、わたしは藤原佐為ともうします》

「フジワラノサイ？」

《はい。長すぎるなら佐為と呼んでくださってもいいですよ》

「サイ、でいいの？」

わたしはうなずく。その子は笑顔をたたえてわたしを見上げる。「美しい」わけではないけれど、ふっくらした何とも愛らしい笑顔、そして無垢な眼差し。わたしは思わずその子の頭を撫でた。撫でたからとて、感触はないのだろうが、その子は笑顔のままわたしを見上げている。我が身があれば、梅の花を手折って髪に挿してあげたい。そんな思いが通じたのか、その子は背伸びして手の届く枝から紅梅を1輪手折って自分の髪に挿した。

《ああ、きれいですよ。梅の花の紅が黒髪に映えますね》

そう言ってわたしはまたその子の頭を撫で、その子はわたしに笑みを見せる。そして、その場にしゃがみ込んだ。

「サイ、見て」

その子は梅の根元の周りに生えている雑草を指さす。

「ここにも花が咲いてるよ」

確かに、その子の指さす先に小指の爪よりも小さい可憐な花がいくつか咲いている。

《ほんとう、きれいな花ですね。なんという名前なのですか？》

「知らない」

《そう、名も知らぬ花なんです。でも、名前を知らなくても、その美しさを愛でることはできますね》

その時、すぐそばから声がした。

「ヒカルちゃん、何してるの？」

声を聞いて、その子は立ち上がった。

「あつ、あかりちゃん。見て！とてもきれいなおにいさん。サイって名前なんだって」

あかりちゃんと呼びかけられた女の子は、その子を不思議そうに見

ている。無理もない。わたしはこの子にしか見えないのだ。ヒカルという名前なのだろう。この子にしかわたしの姿は見えず、わたしの声は聞こえない。あかりと呼ばれる、ヒカルより頭一つくらい背の高い女の子には、さぞかし不思議なことだろう。

「ヒカルちゃん。サイって、どこにいるの?」

「ここにいますよ」

そう言って、ヒカルはわたしの体を手で触ろうとする。手はわたしの体をすり抜ける。ヒカルは不思議そうにわたしを見上げる。

《ヒカルちゃん、わたしはヒカルちゃんにしか見えないんです。わたしの声はヒカルちゃんにしか聞こえないんです。わたしの体は触れることができないんです》

「どうして?」

ヒカルは素直にそう問いかける。わたしは、答えるのにためらう。だけど、言わずに済ますことはできないでしょう。

《わたしは幽霊だからです》

「うそ!・・・幽霊はこんなきれいじゃないよ。こんなに優しくないよ」

「ヒカルちゃん、どうしたの?」

あかりはヒカルの両肩を揺する。無理もない。

「だって、いるんだよ。ここにちゃんといるんだよ。とてもきれいな人なんだよ。優しい人なんだよ」

《ヒカルちゃん、よく聴いてください。ヒカルちゃんにはとても不思議に思えるでしょう。でも、あかりちゃんの言っていることも正しいんです。あかりちゃんにはわたしが見えないんです。あかりちゃんにはわたしの声が聞こえないんです。だから、あかりちゃんには、今ヒカルちゃんが独り言を言っているようにしか見えないんです》

ヒカルは不思議そうにわたしを見る。その表情に悲しみも混じっているかも。こんな善良そうな子を悲しませるのは、わたしも辛い。だけど、いかんともしたい。

《ヒカルちゃん、いつかきちんと説明します。とりあえず、今は、わたしはヒカルちゃんにしか見えないんだということだけ、分かってくだ

さい。それと、ヒカルちゃんは声を出さなくても、わたしと話ができません。わたしに話そうと思ったことは、ヒカルちゃんが声に出さなくてもわたしには分かります。だから、わたしと話す時は声を出さなくていいんですよ。不思議なことと思うでしょうね。でも、ほんとうにそうなんですよ。試しに、わたしに何か話そうと思って、思うだけで、声に出さないでみてください」

ヒカルはまた不思議そうにわたしを見る。そして
《よく分からない》

と声に出さずにわたしに語りかけた。

《ヒカルちゃん、今ヒカルちゃんは「よく分からない」と言おうとしましたね》

《うん》

《そう、ヒカルちゃんとわたしはこんなふうにお話ができます。声を出さなくてもいいんですよ》

《うん。分かった》

「ヒカルちゃん、だいじょうぶ？」

あかりは、どこか遠くを見ているようなヒカルの顔を見つめる。

1—2

あかりはヒカルの手を引いて家に戻る。

「ヒカルちゃん、どうしたんだろう。ガス中毒の後遺症が今頃になつて出るのかな。また具合が悪くならないといいけど」

ヒカルはうつむいて歩いている。佐為はその後ろからついて行く。ヒカルが怪しまれるような振る舞いをしないよう、声は掛けないでいた。

家に戻ってからは、ヒカルの言動に特に異常なことはなかった。

その夜、佐為はヒカルの夢に現れた。

《ヒカルちゃん、お昼はびっくりさせましたね。怖かった？》

《ううん、怖くなんかないよ。サイは優しい人だもん》

《ありがとうございます。わたしはこれからずっとヒカルちゃんと一緒にいます》

《わあ、うれしい》

《わたしもうれしいです……ヒカルちゃん、碁というものを知つて
ますか?》

《知らない》

《碁、囲碁とも言います……》

そう言つて夢の中の佐為はさつと手を振る。すると碁盤が現れた。

《これは碁盤というものです》

《ゴバン?》

《そうです。この上に黒石と白石を交互に並べるんですよ。こんなふう
うに》

佐為が手を振ると、碁盤の上に黒石と白石が交互に並べられ、黒白
模様が作られていく。ヒカルはそれを眺めている。

《きれい……》

《きれいでしょう。じゃあ、もう一つ》

佐為が手を振ると碁盤の石は一瞬にして消え去り、新たに黒石と白
石が並べられ、新たな黒白模様が作られる。こうやって、夢の中で佐
為は数え切れないほどの黒白模様をヒカルに作つて見せた。ヒカル
はうつとりして眺めている。

《ヒカルちゃん、明日の朝起きたら、あかりちゃんに『碁を打ちたい』
とお願ひしてみてください。夢の中で碁を打つのがとても楽しかつ
たと》

《うん》

明けて日曜日、遅めの朝食を摂っている時、ヒカルはあかりに話し
かけた。

「あかりちゃん、わたし、碁をしたいんだ」

「ゴ?」

あかりは突然「ゴ」という言葉を聞かされて、なんのことだか分か
らない。

「うん。夢の中で碁を見てたの。楽しかったよ。黒い石と白い石が並
んでいくの。きれいだよ」

それをはたで聞いていた父が

「ああ、囲碁のことか。ヒカルちゃん、おもしろい夢を見たね。囲碁な

んて」

あかりも「黒い石、白い石」という言葉と「イゴ」という音を聞いて「囲碁」という言葉が思い浮かんだ。

「確か、駅前に碁会所があるはずだ。あかり、特に用事がないのなら、お昼頃からでもヒカルちゃんを連れて行ってあげなさい」

1—3 あかり視点

わたしはヒカルちゃんを碁会所に連れて行く。迷子にならないよう手をつないで、学校とは反対方向、駅の方に10分くらい歩くと、「碁会所」という看板のあるビルが見えた。

エレベーターで5階に上がると、すぐ前に入り口がある。中に入ると、若い女の人が受付に立っている。

「あの一、碁を打ちたいんですけど」

「あら、女の子二人連れって、珍しいわね」

と声をかけられた。確かに、まだ時間が早いせいとお客は少ないけど、そのほとんどは中高年の男。子供は一人もいない、と思つて店内を見渡したら、入り口の脇のへこんだような区画にある席におかつぱ頭の子がいる。あの子に相手になつてもらえるといいな……。

「ここは、初めて?」

「あつ、はい……あの、わたしはこの子を連れてきただけです。この子が打つんです」

ヒカルちゃんは受付の人を見てにっこり笑う。

「ああ、あなたは見ているだけね。それなら子供一人分、500円です」

「えつ、お金が要るの?」

「……それは、まあ、碁会所ですから……」

わたしは財布を出す。

「あかりちゃん。お金が要るのなら、いいよ。あかりちゃんのお小遣いを使わせるのは、よくないよ。わたし、帰る」

「いいのよ。そんなこと気にしないで。ヒカルちゃんがとても楽しそうに碁を打ちたいって言つてたんだから。せつかくここまで来たんだから、碁を打ちましょう」

「いいの?・・・ごめんね」

こんな話をしていたら、背後から声がした。

「市河さん、子供なんだし、初回なんだし、碁会所に入るのも初めてみただから、今日はサービスしてあげてよ」

振り返ると、さっきのおかっぱの子。こちらに向かって歩いている。

「あら・・・アキラさん・・・アキラさんがそう言うのなら」

受付の人はちよつとドギマギしている。わたしもちよつとびっくりにしたが、ヒカルちゃんは平気でおかっぱの子に話しかける。

「おねえさん、ありがとう」

ヒカルちゃんはうれしそうに笑顔を見せる。その子もつられたように笑顔を見せた。

「ボクはね、男の子なんだよ」

「そうなの! すごくきれい!」

ヒカルちゃんは、こういうところ「天然」なんだよなあ。その子も、笑っている。

「ボクは塔矢アキラ」

「わたしは進藤ヒカル」

「ヒカルちゃんだね」

「うん。わたしと打ってくれるの?」

「えっ・・・アキラさんは・・・」

受付の人が横から口を挟む。

「いいんだよ。こんな小さな女の子、おじさんに相手させるのは、かわいそうでしょう。ボクが相手してあげるよ」

ヒカルちゃんはうれしそうに頭を振ってうなずいている。受付の人は、「仕方ないわねえ・・・」というような顔をしている。

「じゃあ、こっちに」

と言って、アキラくんはヒカルちゃんを連れて奥の席に行く。わたしもついていく。二人は、碁盤を挟んだ椅子に座る。わたしは、その脇にある席に座らせてもらった。

アキラは目の前に座っている小柄な女の子に尋ねる。

「ヒカルちゃん、棋力はどれくらい?」

「キリヨク?」

ヒカルは思わず左隣にいる佐為の方を向く。

《棋力というのは、碁の強さのことです。そうですね「かなり強い」と答えてください》

「かなり強いよ」

「そう?」

アキラは不思議そうな顔をする。それを見て、佐為はほほえむ。

「そうですね。こんな女の子から「かなり強い」と言われると、不思議ですよ。でも、この子が打つんじゃないんです。わたしが打つんです。藤原佐為すなわち本因坊秀策が打つんですよ」

「それじゃあ、置石は5子くらいにしようか」

「「かなり強い」と言う相手に5子の置石をさせるとは、このアキラという少年、よほど強いのか、それとも「かなり強い」というヒカルの言葉を信用していないのか……まあ、どちらでもいい。ここは一気に粉碎して、わたしの棋力を理解させ、2局目を互先で申し込むのが一番でしょう」

《では、ヒカルちゃん、これからわたしが扇で示す場所に黒石を置いてください。分かりましたか?》

《うん。分かった》

《ヒカルちゃん、一々わたしの方を向かない方がいいですよ。怪しまれますから》

《うん。分かった》

《じゃあ、いきますよ!》

佐為は碁盤の位置を扇で示す。ヒカルはそこに黒石を置いていく。中指と人差し指と親指の3本の指で石をつまむヒカルをアキラはあきれたように見ている。

「まるで初心者の持ち方だな……だけど、置く場所はきちんと理にかなっている……それにしても、横に誰かいるように時々左に顔を向けるのは、どうしてなんだろう?」

そんな疑問を明らかにする間もなく、アキラは10分くらい打つうちに相手の棋力を認識した。

「これは、とても置石させる相手ではない。互先でも勝てるかどうか……」

アキラは率直に自分の不明を認めた。

「ヒカルちゃん、ごめん。キミの棋力を見誤っていた。キミはとても置石させる相手ではないことが分かったよ。対局の常識に反することだけど、この対局はここで打ち切って、あらためて初めから互先で打ってくれないか?」

「タガイセン?」

《互先というのは、置石をしないふつうの碁のことです。アキラさんに「いいですよ」と答えてください》

「うん、いいよ」

その返事を聞いて、アキラは石を片付け始める。横で見えていたあたりは驚いた。碁のことはよく分からないけど、ともかくたった10分で、ヒカルは実力を相手に認めさせたのだ。

「ヒカルちゃん、いつの間に碁を覚えたの?」

そんな疑問を抱くあたり。アキラは、石を碁笥に戻し終わり、ヒカルに話しかける。

「ヒカルちゃんが黒石だから、握って」

ヒカルは「握る」と言われても、何のことだか分からない。

《ヒカルちゃん、碁石を適当に、そうですね10個くらい、握ってください》

ヒカルは言われたとおりにする。アキラは白石を2個、碁盤に置く。

《ヒカルちゃん、じゃあ、握った黒石を碁盤においてください》

アキラは黒石を数える。

「10個だね。じゃあボクが先攻だ。碁笥を取替えよう」

ヒカルは言われるままに碁笥を取替える。

「コミは5目半でいいね?」

《コミって、なに?》

《わたしも分かりません。アキラさんに聞いてください》

「コミって、なに？」

「えっ、キミ、コミを知らないの？」

ヒカルは悲しげにうつむく。

「ごめんなさい」

「いや、別に謝らなくてもいいんだよ……コミというのはね、黒石を持つ側は先攻で有利だから、それを補うために白石の側、つまりこれからの対局だとヒカルちゃんの側に初めから5目半をあげるんだ。分かる？」

《サイ、分かる？》

《はい、分かりました。そうなんですか、今はそういう規則になったんですね……大丈夫です。さつきと同じようにわたしの扇が示す場所に白石を置いていってくださいね》

《うん》

「ヒカルちゃん、じゃあ、始めるよ。いいね？」

「うん、いいよ」

「お願いします」

とアキラは礼をする。それをまねてヒカルも

「お願いします」

と頭を下げた。

10手、20手と局面が進めば、相手の棋力は見えてくる。100年以上を隔てて初めての対局である佐為にとって、アキラの打ち手に戸惑うこともあるが、棋力は明らかに自分がまさっているかと判断できる。ただし、アキラの棋力も相当なものということも分かる。秀策の時代ならば初段くらいか。全力を出して圧倒的な差で勝つか、それとも2目か3目くらいの差をつける指導碁にするか……佐為は初回は実力をしっかり見せることにする。

……アキラは、目の前にいるヒカルという女の子、おぼつかない手つきで石をつまむ子供の棋力にめまいを感じている。

「自分で「かなり強い」と言うだけのことはある。ボクを遥かに上回る棋力だ。ただ、なぜか手筋が古くさい」

ヒカルは佐為に言われるままに石を置きながら、碁盤に黒と白の模様ができしていくのを楽しそうに眺めている。その眼差しは、おもしろい遊戯をしているように楽しげにきらめいている。そして時おり自分の左に座っている佐為の方にその楽しげな眼差しを向ける。

中盤から終盤に進む頃、アキラは自分の負けを認めた。

「ありません」

「……?」

ヒカルはなんのことだか分からず、きよとんとしている。

《ヒカルちゃん、アキラさんが負けを認めたんです》

《わたし、勝ったの?》

《そうですよ》

「わーっ」

ヒカルは歓声をあげてあかりに話しかける。

「あかりちゃん、わたし、勝ったんだって」

あかりはびっくりした。

「ヒカル、えらい?」

「……うっ、うん。えらい。ヒカルちゃんはえらいよ」

そう言われて、ヒカルはうれしそうな笑顔になったが、向かいのアキラがうつむいて黙っているのを見て、笑顔が消えた。

「アキラちゃん、悲しいの? 負けたのが悲しいの? わたし、悪いこととした? ごめんね」

アキラは顔を上げる。心配そうに自分を見るヒカルの目。

「……いや、そんなことはないんだよ。キミは何も悪いことなんかしていないよ。強い方が勝つ。当たり前のことなんだ」

ヒカルはなお、心配そうな顔をしている。アキラはさきほど耳に挟んだヒカルとあかりの会話を思い出した。

「ヒカルちゃん、ボクに勝つなんて、えらいね」

それを聞いてヒカルの表情が明るくなった。

「あかりちゃん、アキラちゃんがわたしのこと『えらい』ってほめてくれたよ」

「そう、よかったね」

そう言つて、あかりは立ち上がった。

「アキラさん、今日はどうもありがとうございました」

「えっ、もう帰るの？ もう1局お願いしたかったんだけど」

「わたし、このあと用事があるので」

「そうですか・・・それじゃ、明日は？ 明日、学校の後に来れませんか？ もう授業は午前で終わるでしょう？」

「明日も、わたしはほかに用事があるから・・・ヒカルちゃんは一人じゃ来れないんです。迷子になるから」

「それじゃ、ボクが迎えにあがります」

「えっ？」

あかりはアキラの強引さにあきれたような顔をするけど、アキラは気づかない。佐為は、明日も対局できるかもしれないと知つてよろこんだ。

《ヒカルちゃんは、明日は用事がないの？》

《うん。なにもないよ》

《じゃあ、アキラさんに明日も来れると答えてくれませんか？》

「アキラちゃん、わたしは明日来れるよ」

「ヒカルちゃん！」

あかりはびつくりしてヒカルに話しかける。

「だって、碁を打ちたがつてるんだもん」

アキラは、明日も来れるというヒカルの言葉によるこびながら、「打ちたがつてる」という言い回しに違和感を覚える。「何だか、自分じゃなくてほかの誰かのことを話してるような言い方・・・」

「まあ、ヒカルちゃんがいいって言うのなら、いいけど・・・でも、アキラさん、わたしたちのうちを知らないでしょう」

「じゃあ、これからおうちまで送っていきます」

「えっ・・・」

あかりはここでもアキラの強引さに驚いたが、悪い人ではないようだし、ヒカルも碁を打ちたがつているのなら、むしろありがたいことかも、と思うことにした。あかりがそんなことを考えているうちに、アキラは立ち上がる。背後でお客たちが、「アキラくんが負けたのか

？」とぎわついているのが聞こえるが、気にする様子もない。

「市河さん、これからボクはこの子たちを送っていきます」

そう声をかけ、碁会所を出た。エレベーターを待つ間、エレベーターの中、そして外を歩きながら、アキラはヒカルに話しかける。

「ヒカルちゃん、ほんとうに強いね。できれば毎日でも対局してほしい。もう学校は午前で終わりだし、もうすぐ春休みだよ。ほかに用事がない日は、毎日来てくれない？」

「うん。わたしはいいよ」

佐為はこの会話を聞いて飛び上がりばかりによるこぶ。「すばらしい。これから毎日この子と碁を打てる……」

ヒカルは、両側を歩いているあかりとアキラに

「手をつないで」

と両手を伸べる。あかりはいつものことなので慣れたように手をつなぐ。アキラは一瞬戸惑ってから手をつないだ。ヒカルは二人を交互に見ながらニコニコしている。そんなヒカルを見て、あかりはアキラに話しかける。

「これからしょっちゅう碁を打ってもらうなら、ヒカルちゃんのこと、説明しておきます。ヒカルちゃんの事情を知っておいてもらう方がいいと思うから」

アキラはあかりを見る。確かに、ヒカルはちよつと変な子だ。1度対局しただけでも、それは分かる。どんな事情があるのか、できれば知っておきたいと思っていた。

佐為も同じことを考えている。昨日、ヒカルに宿つて、何となく普通とは違う子供だと思つているが、きちんと事情を説明してもらつてはいない。

「ヒカルちゃんはわたしのいとこです。年下に見られるけど、同じ年です。3年前、いや、もう4年前になるのかな、ヒカルちゃんのうちが火事になり、ご両親は逃げ遅れて死んだんです。ヒカルちゃんも煙に巻かれて倒れているところを間一髪で救助されました。ただ、ガス中毒で脳に障害が残ってしまったんです」

アキラは「ああ、そういうことか」と納得した。

「知的障害なんですけど、それまで習ってたことを忘れただけじゃないくて、文章を理解するのがほとんどできなくなっただけです」

「話は理解できるの？」

「普通の会話ならだいじょうぶなんですけど、難しい話になると……」
「そう……」

「それと、体の成長もほとんど止まったみたいで。今ではどう見てもわたしの妹にしか見えないんです。顔立ちも幼いままだし」

「今、何歳なの？」

「こんど中学生になります。わたしは地元の中學に通うんだけど、ヒカルちゃんは養護学校に行くことになってます」

「そうなんだ……一緒に住んでるの？」

「はい。火事の直後は施設に入れられる話もあつたんですけど、うちの親が『それはかわいそうだ』ということで引き取つたんです。ただ……」

あかりは話しくそうだったが、

「うちもそんなに裕福じゃないから、ヒカルちゃんにあまりお小遣いをあげられないんです。だからさつき、碁会所の……」

「ああ、それはいいんだよ。さつきも話したとおり、お金は要らないから」

それからアキラはふと思ひ直した。

「でも、そんな事情なら、碁会所よりもうちに来てくれる方がいいかも」

「アキラさんのうち？」

「うん。ボクの父はプロの棋士なんだ。自慢じゃないけどタイトルホルダーだよ。碁会所より、うちの方がいろいろ世話してあげられると思う。母も、そういうこと嫌いな人じゃないから」

佐為も事情を理解した。

「なんと不憫な子。そういうことならわたしも力になってあげたいけれど、幽霊の身では……いや、わたしの棋力で手助けできるかもしれない。それに、この塔矢アキラという少年。父も棋士だのと。きつとヒカルを手助けしてくれる」

ヒカルは、自分のことを話している二人をおもしろそうに交互に眺めている。どちらも、自分のことを心配してくれていることはなんとなく分かる。そんなヒカルにアキラが話しかける。

「ヒカルちゃん、明日、学校が終わってボクが迎えに来るから、ボクのうちで碁を打とう。それでいい?」

「うん、いいよ」

こんな話をしているうちに、あかりとヒカルの住む家に着いた。

「ボク、一応お母様とお父様にご挨拶しておこうと思うのだけど」

「父は出かけていると思うわ。母はいると思うけど」

「じゃあ、お母様だけにでも」

あかりは玄関を開ける。

「ただいま。おかあさん、いる?」

「うん、いるわよ」

「おかあさんに挨拶したいって人がいるんだけど」

と言いながらあかりはヒカルと一緒に靴を脱いで玄関を上がる。

「えっ、わたしに挨拶?」

とげげんな顔で出てきた母は、目の前に立っている整った顔立ちの子を見てびっくりする。その子はていねいにお辞儀して挨拶の言葉を述べる。

「塔矢アキラともうします。駅前の碁会所を運営している塔矢行洋の息子です。今日、ヒカルさんに対局していただきました。そして、ヒカルさんの強さに感嘆して、これからも、時間がある限り対局していただきたいとお願いしました。明日もよろしいとのことなので、ボクがお迎えに上がります。明後日からも、ヒカルさんの事情が許す限り我が家に来ていただいて対局していただきたいと思っております。よろしくお願いします」

アキラはもう一度ていねいにお辞儀する。母親は自分の娘と同じくらいの年頃と思える子供があまりに礼儀正しい挨拶をするので、驚いてしまい、

「いちいち、そ、よろしくお願いします」

と答えるのがやっとだった。アキラの挨拶を一緒に聞いていたあ

かりは

「今日はいろいろとありがとうございました」

とお辞儀する。

「いえ。たいしたことではありません・・・じゃあ、ヒカルちゃん、明日、お迎えに来るからね」

「うん」

その返事を聞いて引き返しかけたアキラは

「あつ、そうだ」

というあかりの声に、足を止めた。

「大事なことを言うのを忘れてた。ヒカルちゃんは『こんなことも知らないの』とか『こんなこともできないの』と言われるとすごく悲しみます。反対に、『えらいね』とか『よくできたね』と言われると、とてもよろこびます。なるべくそうしてあげてください。ほんとうに、いい子なんです」

アキラは、対局中にコミについて尋ねられて「コミを知らないの?」と聞き返した時のヒカルの悲しそうな顔を思い出した。そして対局を終えてあかりから「えらい」と言われた時のうれしそうな顔も。

「分かりました。ヒカルちゃんを傷つけるようなことはぜったい言いませんから」

こう約束して、アキラは碁会所に引き返す。その途中、一番大きな謎が残っていることに気づいた。

「まだ小学生で、しかも知的障害のある子供が、どうしてあんな棋力を持っているんだ?・・・まあ、明日から毎日うちで碁を打つんだ。尋ねる機会はあるだろう」

碁会所に戻ると、お客たちの視線がアキラに向く。先ほどの対局について尋ねたいのはやまやまだが、面と向かって尋ねるのも気が引ける、そんな雰囲気伝わってくる。アキラは敢えて無視する。あの子のことは、ここでは話したくない、話さない方がいいだろう、あの子のためにも・・・。

父と母と夕食を囲むテーブルで、アキラは今日の不思議な体験を語った。対局の内容から、ヒカルの不思議な挙動、そしてヒカルの事

情に至るまで。

2：塔矢家にて

2—1

翌日、アキラは放課後、ヒカルたちの家に向かった。「早すぎたかな」と思つてドアホンを鳴らすと、ドタドタと階段を駆け降りる足音がして、ドアが開いた。

「アキラちゃん！」

「ああ、ヒカルちゃん。ひとり？」

「ううん。あかりちゃんは、上にいるよ」

とヒカルが言い終わる間もなく、あかりが部屋を出て階段の上に現れた。

「アキラさん、早いですね」

「うん。でもキミたちも」

「だって、卒業式の予行演習しかないんだもん」

「それはボクも同じなんだ」

「こんな会話を交わして、アキラはまたヒカルに声を掛ける。

「これからすぐ行ける？」

「うん」

出かけようとするヒカルをあかりが呼び止める。

「ヒカルちゃん、お昼ご飯は？」

「あ、お昼はうちで用意してます」

とアキラが返事をする。

「あつそうだ。晩ご飯もうちで出すことになると思います。ご両親にそう伝えておいてくれますか？」

「はい。分かりました……じゃあ、ヒカルちゃん、いってらっしゃい」

「いってきまーす」

と元気に外に出たヒカルは、歩き出すとごく自然にアキラの手を握った。アキラは一瞬戸惑ったけれど、昨日も手をつないで碁会所から家まで歩いたんだなど自分を納得させる。駅まで来て、碁会所には行かず、地下鉄への階段を降りる。

「電車に乗るの？」

「うん。2つ先だよ」

「わたし、お金を……」

「心配しないでいいよ。ボクが二人分もってるから」

2 駅目で降りて10分ほど歩く。それまで黙っていたヒカルが、どうしても聞きたいというふうに話しかけてきた。

「お昼ご飯、何かなあ……」

「そうだねえ、何かなあ……ヒカルちゃんは何が好きなの？」

「ハンバーグ！」

ヒカルは元気よく答える。

「それじゃあ、晩ご飯はハンバーグを作ってもらおうかな」

「ほんとう？ うれしい……」

こんな他愛もない会話をしているうちに、塔矢邸に着いた。扉で囲まれ門構えのある立派な邸宅。ヒカルの目にはお屋敷に思えた。

「わー、大きなおうち」

ヒカルは思わず横にいる佐為を見る。

《……》

佐為はなんと声を掛けてよいのか、戸惑った。そんなヒカルのしぐさをアキラは見逃さない。

「また、隣に誰かいるようなしぐさだな……まあ、今は気にしないでおう」

門をくぐり、引き戸を開け、アキラが「ただいま」と声を掛けると、奥から「テーブルにかけて待ってて」と女の人の声がした。

二人がダイニングルームのテーブルにつくと、すぐに明子が顔を出した。

「ヒカルちゃんね。初めまして。アキラの母の明子です」

こんなきちんとしたあいさつに慣れていないヒカルは固まってしまった。そんな子供っぽい様子を見てアキラと明子は微笑む。

「ヒカルちゃん、そんなに緊張しなくていいのよ。アキラから話聞いてます。今日はよく来てくださいました」

「おかあさん、ヒカルちゃんはお昼ご飯がなんなのか、気になるみた

い」

「女の子のお客様だから、パスタを用意してます……ヒカルちゃん、パスタは嫌いじゃないのよね？」

「はい、好きです」

思わず「よそ行き言葉」で答えるヒカルだが、パスタが出され、食事が進むうちに緊張もほぐれてきた。

食事を終え、アキラが

「じゃあ、ヒカルちゃん、そろそろ対局、いいかな？」

と声を掛ける。

「うん」

「じゃあ、こっち」

アキラはヒカルを碁盤のある居間に案内しようとして、明子に声を掛けた。

「そうだ。ヒカルちゃんはハンバーグが好きなんだそうです」

「じゃあ晩ご飯はハンバーグにしましょう」

「わあ、うれしい」

……対局は中盤にさしかかっている。アキラは軽い驚きを覚えていた。昨日対局して、強さとは別に手筋の古さを感じた。それは今日も同じなのだが、昨日の対局で自分が打った手から学んだと思われる新しい手を時おり打ってくる。

「昨日の1局だけで学習できるとは、すごい能力だ」

形勢は明らかにアキラが不利。もう巻き返しは不可能と思われるが、今日は最後まで打ち切りたい。

「ヒカルちゃん、ボクの負けはもう見えてるんだけど、最後まで打ち切りたいんだ。ボクの勉強のために」

ヒカルはきよとんとしている。それからちよつと間を置いて、

「うん、いいよ」

と答えた。

「この反応の遅さは何なんだろう。碁の応手はあきれるほど早いのに」

アキラがこんなことを考えている時、障子の向こうから

「アキラ、ヒカルさん、入ってもいいかな」と声がした。

「どうぞ」

とアキラが返事をする、障子が開いて、和装の男が入ってきた。ヒカルは思わず見つめる。その人が醸し出す威厳はヒカルにも感じられる。そして、佐為にも。

「この者、お城碁で首席を争う者のような威厳と気迫を身にまとっている」

「父の行洋です」

「コーヨー……さん？」

ヒカルは緊張した表情で問い返す。行洋は黙ってうなずき、碁盤の脇に座って盤面の状況を見る。

「ボクの負けは分かっているのですが、最後まで打ち切ってもらっています」

「それがいい。その方がアキラの勉強になるだろう」

この会話を聞きながら佐為は思う。

「わたしも勉強になります。秀策が死んでからおそらく100年を超える歳月が過ぎ、碁の打ち方は進歩したはず。昨日の対局でもいくつか窺われました。今日のアキラの打ち手からも学ぶものがあります」

《ヒカルちゃん、行洋殿のことが気になるかもしれませんが、盤面に集中しましょう。さあ、続けますよ》

《うん》

結果は、アキラの15目半負け。

「ヒカルちゃん、今日は時間があるから、検討しよう」

「ケントー?」

「検討も知らないの?」と言おうとして、アキラは言葉を飲み込んだ。昨日、あかりから言われたことを思い出したのだ。

「検討というのはね、前に戻って、『ここで、こう打たずに、こんなふうに打っていけば、良かったんじゃないか』とか、いろいろ考えるところか反省することなんだよ」

「ふーん」

ヒカルはちらりと左に座っている佐為を見る。佐為はうなずいている。

「うん。じゃあ、ケントーしよう」

「わたしも加わらせてもらおうよ」

と行洋が言う。

アキラと行洋が提案する別手に対して佐為はそれへの応手を扇で示し、ヒカルがそこを指で示す。こうして、アキラの失着がいくつか明らかになったが、ヒカルは佐為の側にも、現代の碁の打ち方からすると不適切な手があることも明らかになった。ただし、この検討の間、ヒカルはきちんと石を打つ場所を示すのに、それについての説明は一言も発しない。それは、アキラにも行洋にも奇妙に思えた。

「では、次はわたしと対局してもらおうよ。ヒカルさん」

そう言って行洋はヒカルの向かいに座る。佐為は先ほどにもまして気迫を感じる。その眼差しから、並々ならぬ棋力が窺われる。

「この世に立ち戻ってすぐ、あなたのような人と対局できるとは、幸せです」

佐為は、アキラとの時のような早差しはせず、じっくり考えて打っていく。行洋も同じ。ヒカルは碁盤に少しずつ出来上がっていく黒白模様を眺めている。

攻防も終盤にさしかかる頃、障子の向こうから声がかかった。

「そろそろ晩ご飯の時間ですよ。ヒカルちゃん、お昼からずっと、お疲れでしょう。ちよつとお休みを入れなさいと」

行洋は現実引き戻されたような顔で時計を見る。

「ああ、もうこんな時間だ。確かに、ヒカルさん疲れただろう……だが、あとおそらく1時間くらいで終わるのだが……」

《ヒカルちゃん、あと1時間くらいがんばれますか？》

《うん、だいじょうぶだよ》

《それでは、行洋殿にそう言ってください。このまま最後まで続けましょうと》

「だいじょうぶだよ。あと1時間くらいがんばれるよ。最後まで続けよう」

「そうか、ありがとう……明子、今のヒカルさんの声、聞こえたかな」

「はい、聞こえました。ではもうちょっとお待ちしています」

……勝負は最後までもつれたが、最終的に行洋が1目半差で勝った。

《サイ、負けたの?》

《はい。わたしが負けました。でもヒカルちゃん、がっかりしないでください。行洋殿はとても強い。この人に負けるのは少しも恥ずかしいことではないですよ》

《ふーん、そうなんだ》

《そうなのですよ》

「検討は夕食後でいいだろう。ヒカルさんも疲れただろう、まず夕食にしよう」

と行洋が立ち上がり、ヒカルとアキラも立ち上がってダイニングルームに向かう。ダイニングルームには明子が待っている。入ってきた3人を見て、ヒカルに声を掛ける。

「リクエストにお答えして、ハンバーグですよ」

「わー、うれしい! おばさん、大好き」

そう言ってヒカルは明子に駆け寄り、抱きついた。行洋とアキラはあつげにとられたように眺めているが、明子は「あら、ヒカルちゃん、わたしに慣れてくれている」とむしろ喜んでいる様子。

「さあ、腰掛けて」

2—2

ヒカルは明子を作ったハンバーグをおいしそうに食べている。

「これ、ほんもののハンバーグだね。レストランで食べるみたいな高級なハンバーグだね」

目を輝かせてうれしそうに語りながら、あつという間に食べてしまった。

「おかわり」

「えっ、ヒカルちゃん、もう1個食べるの?……おいしいって言うってくれるのはうれしいんだけど、そんなに食べるとお腹をこわすわ

よ」

そう明子にさとされて、ヒカルは残念そうにうつむく。その子供っぽい反応が塔矢親子の微笑みを誘う。

「確かに、先ほど見せた練達した棋力と、この子供っぽい所作の対比は不思議だ」

と行洋は思う。

「じゃあ、ヒカルちゃん、デザートにしましょう。アイスクリームでいい？」

明子にそう言われて、ヒカルはさきほどの残念そうな表情から一転してうれしそうな表情になった。デザート皿に乗った1カップのアイスクリームをうれしそうに食べている。ヒカルがアイスクリームも食べ終えた頃、行洋とアキラは食事を終えた。食後の寛いだ雰囲気の中で行洋が語る。

「ヒカルさんの棋力は素晴らしい。ただ、時おり古い手筋が見える。古いから悪いとは限らないのだが、やはり一般的に言えば、日々新しい手筋が考案されている中、古い手筋にこだわっているのは勝ちを逃すだろう」

父の言葉にアキラが続ける。

「ボクは、ヒカルちゃんの打ち方、なんとなく秀策を思わせるなどという気がするんです」

行洋は先ほどの対局を思い起こし、なるほどとうなずく。

「ヒカルちゃん、秀策を詳しく勉強したの？」

「シユウサク？」

ヒカルは何のことか分からず、聞き返す。その時、佐為が

《まさにそのとおり。わたしは本因坊秀策その人だったので》

と思わず返事をした。佐為はともうれしそうな表情でそう語る。それを見てヒカルも思わず、

「サイはホンインボーシユウサクだったんだって」

と言葉にした。その瞬間、3人の視線がヒカルに集まる。ヒカルは事態を理解していない。ただ、それまでの和やかな雰囲気が変わったことを感じている。佐為は自分の軽はずみな発言を悔いた。しかし、

ちよつと考えて、覚悟を決めた。

《ヒカルちゃん、この方々にはこれから永くお世話になるでしょう。この方々には、わたしのことを話しておく方がいいと思います……ヒカルちゃん、これからわたしの言うことをそのまま声に出して、この3人に話してください》

《うん》

《難しい言葉もまじるかもしれませんが、がんばってね》

《うん、がんばるよ》

《それではまず、「これから佐為の言葉をそのまま伝えます。『わたし』というのは佐為のことです」と言ってください》

「これからサイの言葉をそのまま伝えます。『わたし』というのはサイのことです」

3人はさらに食い入るようにヒカルを見つめる。その3人にヒカルは抑揚のない口調で語り始める。

「わたしは藤原佐為ともうします。昔、都で帝の碁の指南をしておりました。しかし、御前対局で罨に落ち、都を追い出されて、入水自殺いたしました。恨みと未練を残したわたしの霊は、成仏することなく、それから何百年も、碁盤に潜んでおりました。わたしは碁盤に近づくと人に呼びかけるのですが、わたしの声は誰にも聞こえません。そんな虚しい数百年が過ぎたある日、虎次郎という幼い子供が、わたしの声を聞いてくれたのです。その子供は碁を学んでおりました。そして、わたしの願いを聞き届け、それからわたしに碁を打たせてくれました。……ああ、わたしには体がありません。虎次郎だけは、わたしの声を聞くことも、姿を見ることもできるのですが、わたしは自分では、碁石はおろか塵一つ動かすことさえできません。ですから、わたしが碁を打つためには、虎次郎がわたしの声を聞き、わたしの言うとおりに、碁盤に碁石を置いてくれないといけないのです。それは、傍目には、虎次郎の碁にしか見えません。

わたしの棋力を宿した虎次郎の碁の有名になり、お城碁を打つようになり、ついには本因坊家の跡継ぎに迎えられるました。本因坊秀策その人です。秀策の体を借りて、わたしは碁の最善の一手、神の一手を

目指しました。ですが虎次郎は、流行病で、34歳の若さで死んでしまいました。わたしは願いを遂げられぬまま、また碁盤に潜んで、時を過ごすことになったのです。

その碁盤は縁あって、本因坊家の墓のある本妙寺にほど近い、家の蔵にしまわれていました。そして、神の計らいで年に1日だけ、外を出歩くことを、許されていました。わたしは毎年梅の花の咲く頃に、出歩いておりました。今年も2日前のことです。そしてそこで、満開の梅の木の前で、ヒカルに出会いました。ヒカルは、ヒカルだけは、わたしの姿を見ることができ、わたしの声を聞くことができます。わたしは、ヒカルにお願いしました。わたしに代わって碁を打ってくれるようにと。そうしたら、昨日、あの碁会所に連れて行ってくれて、塔矢アキラさんと対局したのです。ヒカルの打つ碁はわたしの碁です。わたしが扇で示す位置に、ヒカルが石を置いていくのです」

ヒカルは語り終えた。

《ヒカルちゃん、お疲れ様。よくがんばってくれました》
《うん》

《ヒカルちゃん、えらいね》

ヒカルは佐為の方を向いて明るい笑顔を見せる。

3人は黙ってヒカルを見ている。今、ヒカルが語ったこと、ヒカルの口を通して佐為という人物が語ったことは、信じがたい。荒唐無稽とさえ言える。しかし、実際に対局し、ヒカルの碁力を実感した者にとっては、そして恐るべき碁力を備えながら、知的障害を抱えた子供っぽいヒカルの振る舞いを見ている者にとっては、説得力がある。この子に宿っている幽霊が碁を打っている、碁を打たせている……

数分間の沈黙を破って行洋が口を開いた。

「話は分かった。いや、簡単に受け入れがたい話であるが、ヒカルさんの碁力を実感した者として、納得できる部分はある」

ここで一息ついて、話を続ける。

「ところで、佐為そしてヒカルさんにお尋ねしたい。今日この場で話してくれたことは、この3人だけに打ち明けた秘密なのか、それともほかの人にも話しているのか、今後話すつもりはあるのか」

「誰にも話してないよ……あかりちゃんには幽霊がいることを話したけど、信じてもらえなかった。ほかには誰にも話してない」
《これからも、誰にも話すつもりはありません、と伝えてください。ヒカル》

「これからも、誰にも話すつもりはありません」

行洋はうなづく。

「その方がいいと思う。……この話についてはとりあえず、これで打ち切りにしましょう。夕食前の対局の検討がまだだ。まず、それを終わらせよう。そして、ヒカルさんをおうちに帰してあげないと」

検討は30分ほどで終わり、明子がヒカルを車で親元に送っていった。

明子は地図と住所、そしてアキラがした説明を頼りに車を運転する。この辺かなと思うあたりを徐行していると、ヒカルが

「あつ、あの家だよ」

と指さしたので、その家の前で車を止め、念のため表札を確認したが、「進藤」ではなく「藤崎」となっている。

「ヒカルちゃん、ここは藤崎さんの家よ。ヒカルちゃんの家じゃないでしょう?」

ヒカルは首を振る。

「ううん。ここだよ。わたしはここに住んでるの。あかりちゃんたちは藤崎なの。わたしだけ進藤なの」

その声はちよつと寂しそうだった。明子は事情を理解した。

明子がヒカルを送っている間、行洋とアキラはヒカルのこれからのことについて語り合っていた。

「ヒカルさんに宿っている佐為という幽霊のことは、確かに、ほかに話さない方がいいだろう。ただ、先ほどの話からすると、ヒカルさんというか佐為はわたしたち二人だけでなく、ほかの多くの棋士とも打ちたいのだろう。佐為のことを話さないとしたら、ヒカルさんが碁を打っているということになるのだが、ヒカルさんの驚異的な棋力をどうやって説明すればいいのだろう」

そう問われて、アキラも答えが見つからない。

「こういうことはおかあさんに相談したらどうでしょう。碁バカのボクたちより、おかあさんの方がこういうことなら知恵があるかも」

「それはそうだな」

行洋は苦笑した。

明子は30分ほどして戻った。行洋はさきほどのアキラとの話を明子にした。明子もちよつと考え込んだが、名案が浮かんだようだった。

「山下清みたいなものだ、と説明すればいいんじゃない?」

「山下清?」

「まあ、二人とも山下清を知らないの?」

と明子はいささかあきれたが、碁バカの二人に説明した。

「知的障害だけど天才的な絵を描いた人。有名よ。そういう、知的障害を抱えながら一芸に秀でた人はほかにもいるらしいわ・・・そういう分野のことに詳しい友人がいるから、明日にでも相談というか知恵を借りに行くわ」

2-3 明子視点

翌日、わたしはさつそく心理学を専門にしている友人に相談しに行った。友人は「サヴァン症候群」という、うってつけの症例を教えにくれた。その友人いわく、

「知的障害がありながら、特殊な能力を備えた人たちのこと。たとえば、内容を理解していないのに本を最初から最後まで丸暗記できるとか、すごい桁数の暗算ができるとか、ちらつと見ただけの景色や映画の場面を記憶して絵に描けるとか」

「それなら、たとえばちらつと見ただけの棋譜を丸暗記できるとかも、あり?」

「まあ、そういうことがあっても、おかしくない・・・さすが碁の名人の奥さんね。すぐに棋譜を思い浮かべるなんて」

それ、ヒカルちゃんにぴったり。わたしはうれしくなった。

帰宅したら、もうアキラがヒカルちゃんと対局している。

「まったく、親子揃って碁バカなんだから。それにしても、相手させられるヒカルちゃんの身にもなつて少しは遠慮しなさい」

対局中は声を掛けないのというのが我が家の基本ルールだけど、この場合は破らせてもらおうわ。わたしは居間の障子を開け、声を掛ける。

「アキラさん、少しはヒカルちゃんのこと考えてあげなさい。あなたは朝から晩まで碁を打って平気な人だけど、ヒカルちゃんはまだ小学生の女の子なのよ。疲れさせちゃだめよ」

「お婆さん、だいじょうぶ。わたしも碁を打つの好きなの。黒石と白石がならんできれいな模様ができるのを見てるの、楽しい」

「あら、そうなの」

そう言ってくれるのはうれしい。だけど、もう1つ気になることがある。

「アキラさん、ヒカルちゃんにお昼ご飯は出したの？」

「うん。パン焼いて、目玉焼き作って、あと、適当に野菜をのつけて」

「そんな粗末な……」

「お婆さん、おいしかったよ。アキラちゃん、お兄ちゃんみたい、優しいの」

「あらあら、すっかりアキラになついちやって」

わたしまで気持ちが悪くなる。

「まあ、ヒカルちゃんがそう言うんなら、いいけど……おやつ用意しておくから、その対局が終わったらこつちにおいで」

「はい」

アキラの代わりにヒカルちゃんが返事する。

「まだ2日目なのに、ヒカルちゃん、すっかりうちになじんでくれた」
おかしきような、うれしいような気持ち。

「あんな素直で可愛い女の子がうちにいれば」と思った、これが最初かもしれない。

お皿にクッキーを並べ、いつでもミルクティーを作れる用意をしておく。30分くらいしたら二人がやってきた。

「わー、おいしそうなクッキー」

「あつ、ヒカルちゃん、いまミルクティーをいれるから、ちよつとだけ待ってて」

「うん」

ヒカルちゃんは素直に返事する。いい子だ。

ミルクティーができあがり、二人の前に置く。

「おばさん、もうクッキー食べていいの？」

「いいわよ」

さつそく食べ始めたヒカルちゃん、「わあ、おいしい」と歓声をあげる。

クッキーがなくなる頃、ヒカルちゃんはアキラに質問した。

「アキラちゃん、ホンインボーシユウサクって、何年くらい前の人なの？ サイが知りたがってるの」

「えっ、それは詳しくは知らないけど……佐為、だっけ、その頃のこと記憶に残っている大きな出来事って、何かない？」

ヒカルちゃんは左隣にいる誰かの声を聞くようなしぐさをしている。きつとそこに佐為という幽霊がいるんでしょうね。

「ペリーという人が黒船に乗って……」

「ああ、それなら、だいたい150年くらい前だね……昨日、父も話していたけど、佐為の棋力は素晴らしいけど、秀策が死んだ後も碁は発展してるんだ。新しい打ち方もいろいろ考案されている。それを勉強すると、もっと強くなるよ。今でも、これまで5局くらいしか打っていないのに、佐為はそれからすっかり勉強しているけどね。それはすごいと思う」

ヒカルちゃんは自分が褒められたようにうれしそう。佐為のことを自分のことのように思っているのね。

「ボクも、意識的に新しい打ち方を見せるよう心掛けているんだ。ボクが教えるなんておこがましいけど、新しい手を覚えて、もっと強くなってほしいんだ」

「サイが、ありがとうございますって」

わたしはヒカルちゃんに寄り添っている佐為という幽霊のことをもっと知りたくなった。

「ヒカルちゃん、佐為はいつもヒカルちゃんの左にいるの？」

「うん。たいてい左にいる。碁を打つ時は扇で石を置く場所を指して

くれるの」

なるほど、右手に持った扇で碁盤の場所を示すには、ヒカルちゃんの左に座る方が都合がいい。

「どんな人？ 若い人？ お年寄り？ どんな服を着てるの？」

「アキラちゃんよりは年上だけど、若い人。初めて見た時、『おにいさん』って呼んだの。すごくきれいな人だよ。碁を打つ時は真剣な顔になるけど、横から時々見てるの。碁を打つ時の顔も好きだよ……服は昔の服。なんていうのかな……」

ヒカルちゃんは左を見上げています。きつと佐為が説明してるのでしよう。

「カリギヌっていうんだって」

「かりぎぬ、どんな字を書くの」

ヒカルちゃんはまた左を見上げ、それからテーブルの上に、隣の人を書く文字をなぞるように指で字を書く。わたしは紙と鉛筆を渡した。ヒカルちゃんはその上に子供っぽい字で「狩衣」と書いた。

「サイはとても優しいんだよ。初めて会った時、わたしの髪に梅の花をさしてくれた」

「えっ、体のない幽霊さんが？」

「あっ、そうじゃない。わたしが自分で花をさしたんだけど、なんだかサイがさしてくれたような気がしたの」

そう言いながら、ヒカルちゃんは左にいるらしい人の肩や腕をなでるような仕草をする。わたしは、面と向かって褒められて恥じらう美青年の姿を想像する……だめ、だめ、変な妄想はしないこと。

「おかあさん！ おかあさんこそ、ヒカルちゃんを質問攻めにして疲れさせているじゃないですか」

アキラさんが怒ったふりをして会話に割って入るけど、目は笑っている。そして

「じゃあ、再開しようか」

とヒカルちゃんを促した。

「うん……あっ、サイは闘志満々」

と言って、「キヤツ」と声を出した。

「サイに頭はたかれた」

二人はそれからさらに2局打ち、夕食を終えて、昨日と同じようにわたしが車でヒカルちゃんをおうちまで送ってあげた。昨日とおなじように、ヒカルちゃんのおばさんからていねいにお礼を言われた。こちらこそ、お礼を言いたいくらいだわ。アキラさんの碁の勉強になるだけじゃなくて、何というのかしら、ヒカルちゃんが来てからうちの雰囲気が和やかになった。これからも毎日来てほしい。春休みになったら、泊まりがけでも……。

家に戻って、しばらくして行洋さんも帰ってきたから、さつそく「ヴァン症候群」について説明した。友人の話の受け売りだけど。わたしの話を聞いてアキラさんが

「じゃあ、たとえば、ちらつと見ただけの棋譜を暗記できるとかもあるのかな」

「わたしも同じこと考えたわ。友人の言葉では、それも有り得るって」
こんな会話を聞きながら行洋さんもうなずいている。

「では、こんどの金曜日の研究会でヒカルさんをお披露目するか」
「金曜日というと、卒業式の日ですね」

2-4

金曜日、研究会に集まった10人ほどの門弟たちを前に、行洋はヒカルを紹介した。

「わたしの隣におられるのは進藤ヒカルさん。今日、小学校を卒業なさった。詳しい事情はおいおい話されると思うが、4年ほど前に事故に遭い、その後遺症のために体と知能の成長が障害されている。ただ、ヴァン症候群というらしいが、そんな知的障害を負っていないから一芸に秀でておられる。画家の山下清をイメージしてもらおうかいだろう。ヒカルさんの場合、その一芸というのが碁なのだ。とにかく、強い。わたしも今週の月曜日に対局させてもらったが、かろうじて1目半差で勝った」

ここで、門弟たちの間からどよめきが起きた。

「しかもそれは、彼女が古い定石しか知らなかったからだ。その後、アキラが現代の新しい定石を教え、彼女は驚くべき速さでそれを吸収し

ている。今日対局したらわたしが負けるかもしれない」

「ここでまた、どよめきが起きた。」

「まあ、そんな、いうなれば天才少女だ。今日から研究会に参加してくれる。せいぜい鍛えてもらってくれ」

どよめきが続く中、白いスーツを着込んだ30歳くらいと見える男が

「できることなら、今日これから対局をお願いしたいのですが」

と申し出た。ヒカルはその男をニコニコしながら見ている。

「ヒカルちゃん、この人は緒方さんといって、ここでは父の次に強い人だよ」

その言葉を聞いて、佐為は大喜び。

《ヒカル、ぜひ打ちましよう》

「じゃあ、打ちましよう」

というヒカルの返事で、塔矢親子と門弟たちが周りを囲んで見守る中、対局が始まった。緒方はヒカルの眼差しが変わったのに気づいた。とはいえ、それは勝負師の鋭い視線でも、気迫を感じさせる視線でもない。もつと明るく、キラキラした、まるでこれからとても楽しいことが始まるのを期待するような、心ときめく遊びを始める時の子供のような眼差し。気迫がこもっていないことに、緒方はかえってたじろいだ。

アキラの「父の次に強い」という言葉どおり、緒方は強い。それでも佐為はヒカルにはかなわない。終盤の小ヨセに入って、

「わたしの負けは見えているのだが、門弟たちの勉強のために、もちろんわたしの勉強のためにも、最後まで打たせてくれませんか」

「うん、いいよ」

ヒカルは軽い口調で答える。この口調の子供っぽさと、目の当たりにする桁外れの棋力のギャップに誰もが戸惑っている。

結果は、緒方の2目半負け。小学校を卒業したと紹介されたが、見た目には10歳以下にしか見えない小さな女の子が、九段の実力を持つ緒方を打ち負かした。あらかじめ「強い」と紹介されていたにしても、その衝撃は大きい。

「では、検討を始めよう」

と行洋が声を掛けた。検討の会話を聞き逃すまいと門弟たちがさらに碁盤に近寄った時、

「ここはだめ」

とヒカルの厳しい声が響いた。すぐ左に座ろうとした門弟の一人を手で追い払うような仕草。門弟はびっくりしたが、「わたしに近づきすぎないで」という意味に理解して、一步下がった。

この夜、ヒカルはまた佐為の夢を見た。

夢の中で、ヒカルは佐為と碁盤をはさんで向かい合っている。そばに満開の紅梅と白梅の木がある。時おり梅の花びらが舞い落ちる中、ヒカルと佐為は明るい笑い声を響かせあいながら、笑顔を見せあいながら石を置き、碁盤に黒白模様が作られていく。だけど不思議なことに、ここに石を打てば、あちらの石が消え、あちらに石を置けば、こちらの石が消え、碁盤にはいつまでも余地があり、二人の碁はいつまでも勝ち負けが着かないまま続く。まるで永遠の祝祭のように。笑い声と笑顔は終わることがない。

3：春休み

3—1 明子視点

卒業式の翌日から、ヒカルちゃんは朝から我が家に入り浸るようになった。泊まり込むこともある。家の人たちにはちゃんと話してあるから心配しなくてもいいのだけど、それでも、十代の女の子が春休みに碁を打ってばかりでいいのかしらと、気にかかる。それで、

「ヒカルちゃん、碁を打つばかりじゃなくて、ほかのお友達と遊びたいとは思わないの？」

と尋ねたら、ヒカルちゃんはうつむいて、ちよつと寂しそうな声で「お友達はいないの。あかりちゃんだけ。あかりちゃんだけはわたしと遊んでくれるけど……ここにるのが楽しいの。ここにるのが一番楽しいの」

と答えた。わたしはヒカルちゃんの境遇を思いやって胸が痛んだ。おじさん、お婆さんの家で邪険に扱われてはいないにしても、外では仲間はずれにされていたとは。ひよつとしていじめられたこともあるのかしら……。確かに、ここなら、みんながヒカルの相手をする。もちろん、対局が目的ではあるけど、それでも仲間はずれにされるよりずつとうれしいことだろう。

最近になって、佐為という優しい幽霊さんがいつも一緒に、寂しさがまぎれるとは思うけど、その幽霊さんがほかの誰より碁が好きなら、そして佐為が碁を打つのを見ているのがヒカルちゃんも好きのなら、なおさらうちが一番楽しい場所なのかもしれない。

そして、本心を言えば、わたしも毎日ヒカルちゃんが来てほしい。あの子がいるだけで、我が家の雰囲気や和むから。

「いっそ、うちの子になればいいのに」

と思うようになったのは、1週間くらいしてからかな。最初は、否定した。そんなこと考えるべきじゃない。ちゃんとしたおじさん、お婆さんがいて、もう4年近く一緒に暮らしているのに……。きつと、おじさん、お婆さんだつて情が移っている。もちろん、あかりちゃんは誰よりヒカルちゃんのことを思っているだろう。それを引き離す

なんて……。

そう思う一方で、おじさんもおばさんも仕事があつて、ヒカルちゃんにそうそうかまっていられないだろうし、あかりちゃんだって、ヒカルちゃんの世話だけじゃなくて自分のこともしたいだろうし……今の境遇は不幸とは言わないけど、うちの子になる方がヒカルちゃんはもつと幸せじゃないかと、自分に都合の良い方に考えてしまう。

結局、行洋さんに相談した。彼も、それは考えたことがあるようだった。

「もちろん、わたしたちの気持ちよりも先に、親代わりになっているおじさん、おばさんの気持ちが大切だということは、分かっていますけど」

と語るわたしに、彼は腕組みして

「それよりも先に、ヒカルさんの気持ちだろう」

わたしは虚を突かれる思いだった。確かに、肝心の本人のことを隅に追いやっていた。知的障害を負っていても、自分の気持ち、自分の希望はあるはずだし、ヒカルちゃんの気持ちが一番優先のはず。

その日、行洋さんは朝から手合に出かけ、アキラはどうしても断れない用事で外出し、門弟たちはまだ来ていない時間帯、ヒカルちゃんは書斎に入つて本を読んでいる。もちろん、ヒカルちゃんが読んでいるのではなく、佐為が見ているのだろう。棋譜や碁の解説書。わたしは声をかけた。

「ヒカルちゃん、ちょっとお話ししたいんだけど、いい?」

「うん、いいよ」

わたしは、余計な言葉をまじえず単純明快に問いかけた。

「ヒカルちゃん、うちの子にならない?」

「うちの子?」

ヒカルちゃんは意味が分からないような表情を浮かべる。隣にいるはずの佐為は理解したのだろうか。

「つまり、これからずっと、うちに泊まるようにしない? 藤崎さんのおうちのヒカルちゃんの部屋にあるものを全部こっちにもつて来て」「わたしのお部屋はないの。あかりちゃんのお部屋に二段ベッド置い

て寝てるの。わたしが下なんだ。落ちると危ないからって
「えっ?」

話が脱線しかけているけど、おかげでヒカルちゃんが自分の部屋を
持っていないことが分かった。

「そうなの。じゃあ、ここのおうちなら、ヒカルちゃんだけの部屋も用
意してあげられる」

わたしは、ずるいことをしている。個室でヒカルちゃんを釣ろうと
している。そんな疚やましさを感じながら、

「わたしのお部屋があるの? それはいいなあ……」

という言葉聞いて、喜ぶわたしがいる。

「そうよ。こここの家にヒカルちゃんのお部屋を作ってあげる。そこで
これからずっと寝泊まりするといいわ」

「でも……」

ヒカルちゃんはちよつと考え込む。

「そしたら、もうあかりちゃんと会えなくなる」

「そんなことはないのよ。ヒカルちゃんが会いたいと思えば、いつで
も会いに行けるし、会いに来てもらうこともできるのよ」

「それなら、ヒカルはいいよ」

あまりにあっけない返事に、わたしの方があわてた。

「ほんとうに、いいの?」

「うん、いいよ」

ヒカルちゃんは事の重大さを分かっていない。そう思いながら、ふ
と別のことも思いつく。よく考えてみると、これはそんなに重大なこ
となのか? 火事で両親を失ったヒカルちゃんにとって、藤崎の家で
養われるのと、塔矢の家で養われるのと、さほどの違いはないのかも。
わたしが勝手に重大な事と思いついでいるのかも……いや、これ
こそ、自分に都合の良い考えだろう……。わたしの思いは乱れた。
ともあれ、この日の夜、わたしは行洋さんにヒカルちゃんの話をつ
えた。

その週の土曜日の夜、いつものようにヒカルちゃんを送り届ける車
に、行洋さんも乗っている。藤崎のおじさん、おばさんと話をするた

めに。その3日前、「ヒカルちゃんのことと相談したいことがあるので時間をいただきたい」と電話し、この日の夜を指定された。ひよつとしたら、先方も話の内容を予想しているかもしれない。

車は15分ほどで着く。玄関で形ばかりの挨拶をし、すぐにダイニング・リヴィングルームに通された。

テーブルの向かいにはおじさんとおばさん、それにあかりちゃんもいる。こちらには、行洋さんとわたし、そしてヒカルちゃん。3人ずつだからこんなふうに着いたのだけど、まるでもうヒカルちゃんが塔矢の人間になつていているかのようにも見える。着席して間を置かず行洋が口を開いた。

「単刀直入に申し上げます。ヒカルさんを当家の養女にお迎えしたい」

これだけ言つて、深々と頭を下げた。わたしも一緒に。つられてヒカルちゃんも頭を下げたのが、ほほえましいというか、藤崎の人たちの気持ちを考えると、痛ましいというか。しばしの沈黙の後、意外なことに、まずあかりちゃんが口を開いた。

「ヒカルちゃんが、それでいいと言うのなら、それでいいんじゃない」
ご両親とわたしたちの視線が彼女に注がれる。ヒカルちゃんももちろん彼女を見ている。でも、彼女はそれからもう一言も発しない。その表情に悲しみはないけど、もちろん喜んでもいない。怒り？ それもない。ただ、何かに耐えているように唇を引き締めている。それからまたしばしの沈黙。そして、おじさんが口を開いた。

「この場でお答えしないといけませんか？」

「いえ、とんでもございません」

わたしはすぐに返事する。

「重大な事でございます。ゆつくりお考えください」

「じゃあ、しばらく時間をいただきます」

そして、おばさんがそつと尋ねた。

「それで、今夜は、ヒカルちゃんはどっちに泊まるの？」

ヒカルちゃんは藤崎のおじさん、おばさんとわたしを交互に見る。そして、

「塔矢さんち」

と無邪気に答えた。この言葉で、それまでの緊張が崩れた。……そう、緊張が「ほぐれた」のではない。緊張が「崩れた」。藤崎の人たちの、落胆とも諦めともつかない気持ちが伝わる。

ヒカルちゃんが席を立つ。それにつられて、ほかの5人も席を立った。

「それでは、お返事をお待ちしています」

と挨拶して帰ろうとするところ、おばさんが呼び止めた。

「これからまた何日か泊まるのなら、着替えが要るでしょう。ちよつとお待ちください」

おばさんはあかりちゃんとヒカルちゃんの部屋のある2階に駆け上がり、10分ほどして手提げ袋を持って戻ってきた。

「どうぞ、お持ちください」

「ありがとうございます」

わたしはお礼を言つて、藤崎の家を出た。

3—2 あかり視点

わたしは、二段ベッドを見ている。もう、ヒカルちゃんと一緒に寝ることはないかもしれない二段ベッド。塔矢のお父さんが「ヒカルさんを当家の養女にお迎えしたい」と言った時、わたしは瞬間的に「やった！これからはまた自分の部屋を一人で使える」と思った。次の瞬間、そんなことを考えた自分に腹が立った。それから、次から次といろんなことが思い浮かんだ。ヒカルちゃんと過ごした楽しい思い出。そして、ヒカルちゃんを世話するために諦めないといけなかったこと。友達との外出。一人で本を読む時間……。

ヒカルちゃんはとてもいい子。アキラくんと言ったことはウソじゃない。本心からそう思っている。素直で、無邪気で、他愛もないことに喜んで……かわいい妹。でも……でも、世話の焼ける妹なんだ。一人ではどこにも行けない。ヒカルちゃんが出かける時は必ずわたしがついていないといけない。わたしだって一人の女の子、ヒカルちゃんに付きまとわれずにやりたいこともあるんだ……ヒカルちゃんが突然、囲碁に興味を持って塔矢さんのところに入り浸

るようになって、わたしは正直ほつとした。別に、ヒカルちゃんが憎いわけじゃない。ヒカルちゃんが嫌いなわけじゃない。ただ、ヒカルちゃんに束縛されないのでうれしかっただけ……ううん、それだけじゃない。ヒカルちゃんのためにもうれしかった。ガス中毒の後、ヒカルちゃんがこんなに生き生きすることはなかったから。なんで碁に夢中になったのか、理由は分からないけど、碁を打つようになったヒカルちゃんは明るくなった。いや、以前から明るかったけど、明るさの中身が違う。ほんとうに、自分の好きなことを見つけたような明るさ。塔矢アキラくんには感謝だわ。

でも、そうは言っても、おかあさんが「ヒカルちゃんはどつちに泊まるの？」と聞いて、ヒカルちゃんが「塔矢さんち」と答えた時、わたしは悲しかった。裏切られたような気分？

おかあさんとおとうさんは、なんて返事をするんだろう……決まってる。きつとOKする。今日のあのヒカルちゃんのを答えを聞けば、「これからもずっとうちで育てます」なんて言えるはずはない。それに、その方が我が家も助かるはずなんだ。裕福な家ではないんだから。

……今でもよく覚えている。3年生の秋、ヒカルちゃんたちが住んでいたアパートが焼けて、両親は死んで、ヒカルちゃんは病院に運ばれた。何日も意識がなくて、目が覚めた時、何も分かっていないようにボーッとした顔をしていた。一時的なショックなんだろうと思っていたけど、そうじゃなかった。ヒカルちゃんは変わってしまった。明るくて、元気で、頭も良くて、同級生のわたしの宿題をいつも手伝ってくれていたヒカルちゃん……。退院する時、ガス中毒の後遺症で知的障害が残ると言われた。わたしは、これからヒカルちゃんのためにできるだけのことをしようと思った。ウソじゃない。本心からそう思ったんだ。両親だって同じだったはず。施設に入れられるのはかわいそうだといってうちに引き取った。その時は本心からヒカルちゃんに同情していたはず。でも、知的障害の子を世話するのはたいへんなんだ。ヒカルちゃんはまだ障害が軽い方だけど、それでもふつうの妹よりは手がかかる。うちは両親とも働かないといけ

ないし……。塔矢さんちのおかあさんは専業主婦みたいだから、うちにいるよりはヒカルちゃんもていねいに世話してもらえ。結局、塔矢さんちに引き取られるのが、みんなにとってハッピーエンドのかな……。でも、そしたら、そのうちヒカルちゃんはわたしのこと忘れてしまうのかな……。

3—3

自分をめぐる塔矢家と藤崎家のやりとりは、ヒカルの頭の上を通り過ぎ、心に波風を立てなかつた。事情を理解するのは、ヒカルにとって難しすぎる。あの土曜日の夜以来、ヒカルはずっと塔矢家で過ごしている。そうしているうちに、それがヒカルにとって当たり前前になつていく。

佐為も、あまり気に留めていない。平安時代と江戸時代を生きた佐為にとつて養子縁組はごくありふれたことだつた。秀策自身、桑原の家から本因坊家の養子となり、世嗣となつたのだ。まして両親に死なれた孤児が他家の養子になることは、ごくありふれたことで、むしろ当然そうなるべきこととさえ思っている。それに、佐為と出会つた2日後からヒカルは塔矢の家に入り浸るようになったから、佐為にとつて藤崎の家より塔矢の家の方がずっと親しみが深い。

塔矢の家に居着くことになつたヒカルは、自分の居場所についての藤崎の家の人たちの思いも、塔矢の家の人たちの思いも理解できないまま、春休みの楽しい日々を過ごした。

ヒカルが塔矢の家に泊まる日に使っていた書庫のような部屋がそのままヒカルの部屋になつた。片側の壁は作り付けの本棚になつていて、囲碁関係の本が並んでいる。2つある一間の押し入れにも箱に詰められた本がある。押し入れの本はよそに移し、片方の押し入れは寝具を入れ、もう片方の押し入れはクローゼットにリフォームされた。作り付けの本棚は、仕方ないからそのままになっている。

「たまに、本を取りにヒカルちゃんのリビングに入るけど、がまんしてね」とアキラが申し訳なきさそうに言う。ヒカルはぜんぜん気にしていない。そして佐為にとつては、この部屋はまさに天国だつた。本棚を占める囲碁関係の書籍。とりわけ塔矢行洋が監修した『現代囲碁定石

『集成解説』という分厚い本はその名の通り現代の定石を集め、詳しく解説したもので、佐為にとって宝の山と思え、暇があれば読みふける。もちろん、ヒカルにページを開いてもらうのだが。ヒカルは、文章が読めないけれど、黒石と白石が並んだ棋譜が主で、そのあいまに解説文がはさまっているこの本は見えていて楽しかった。

佐為は学んだ新しい打ち方をすぐに対局で実践する。ほとんど毎日対局しているアキラは、一日ごとに佐為が強くなるのを実感した。「ほんとうに、佐為は日ごとに強くなるね」

《アキラさんも、日ごとに強くなっていますよ。こうやって対局していて、よく分かります》

「アキラちゃんも強くなってるって、サイが言ってるよ」

「ありがとう。でもそれじゃあ、佐為とボクの差は縮まらないね。ボクだって、いつかは佐為に追いつき、追い越したいと願っているんだ。今のボクの実力でこんなことを言うのは冗談にもならないけど、自分より圧倒的に強い相手にいつかは追いつき、追い越したいと願うのは、碁打ちにとつて当然の気持ちだろう？」

疑問形で語るけど、アキラは答えを期待してはいない。アキラの声は佐為に聞こえるけど、佐為の声はアキラに聞こえない。この状態に慣れて、アキラは自然に佐為相手に一人語りするようになった。でもそれは、壁に向かつて話しているのとは違う。ヒカルの左に座っている佐為。その存在は感じられる。その存在が自分の言葉をちゃんと受け止めてくれていることも感じる。時には、その存在がアキラの言葉を肯定するようにうなづく雰囲気を感じることもある。この時もそうだ。

「それにしても、佐為はいつたいどこまで強くなるんだろう。これなら、ほんとうに、いづれ父を負かすかもしれない。いや、ひよつとしたら今でも……本因坊秀策が現代の定石を身に着けたとしたら、少しも不思議じゃない」

ただ、そうなるとなおさら、ヒカルの石の持ち方の拙つたなさが目につく。アキラはヒカルに碁石の持ち方を教えることにした。

「ヒカルちゃんは3本の指を使って碁石をつまむけど、こうやって人

差し指と中指の2本だけでつまむ方が、かつこいいと思わない？」

「うん、思う」

「じゃあ、ヒカルちゃんもこうやって持てるよう練習しよう」

「ヒカルはできないよ」

そう言つてヒカルはうつむく。そして小さな声で

「バカだから・・・」

「そんなことないよ」

アキラは思わず大声を出した。「しまった、こんな大声、ヒカルちゃんは怯おびえてしまう」そして優しい声で言い直す。

「そんなことないよ。ヒカルちゃんだって、練習すればできるようになる。誰だって、最初できないんだから。ね、やってごらん」

そう言われてヒカルは2本の指で碁石を持つとうとするが、碁石はすり落ちてしまう。そんなヒカルの様子をアキラは根気強く見守る。

「焦らなくていいよ。何回も何回も練習していくうちに、できるようになるんだ」

そんなアキラとヒカルを佐為は黙つて見守っている。アキラの親切心と忍耐には頭が下がる。

そうやって何回も何十回も練習しているうち、ついにヒカルは2本の指で碁石を落とさずにつまんでいることができた。

「ヒカルちゃん、できたじゃない。じゃあ、そのまま碁盤の上に持つていって・・・」

だけど、ヒカルが2本指ではさんだ碁石は碁笥と碁盤の間で落ちてしまった。また、悲しそうにうつむくヒカル。

「ヒカルちゃん、すごいよ。こんなに早く、碁石を2本の指でつまめるようになったんだ」

ヒカルはアキラを見る。

「ほんとうっ？」

「ほんとうだよ。ヒカルちゃん、筋がいい。ほかの人より早くできるようになった。もうちよつとがんばってみよう」

そう言われてまた何度か試して、ついに2本指で碁石を碁笥から碁盤まで落とさず持つていくことができた。

「ヒカルちゃん、できたじゃない」

ヒカルも喜んでいる。

「ヒカル、えらい？」

「うん、ヒカルちゃん、えらいよ」

ヒカルはにっこり笑う。

それから何日かするうちに、ヒカルの石の打ち方もさまになってきた。

同じ頃、緒方はネット碁を教えた。ヒカルに直接教えるのではなく、明子に教える。

「先生はタイトルホルダーとしてお忙しいし、アキラくんも碁会所に出向くこともあっていつも相手してあげられないし、弟子たちも毎日来るわけではない。そういう時、ネットで対局できるといいでしょう」

明子もそれは名案と思われるので、さっそくレビューングに置いてあるパソコンで緒方に教えてもらったWorldGoというサイトにアクセスし、アカウントを作成した。アカウント名はsai、パスワードはhikaruchan。ヒカルには対局するために必要最小限の操作を教えた。チャットとかメッセージなどの機能は使われない。ただ、相手を見つけて対局するだけ。ていねいに説明したら、何とか分かってくれた。さっそく対局している。佐為は「こんな箱でどこの誰とも分からぬ相手と対局できる」ことを不思議がっているらしい。かといって、明子にしても、パソコンの仕組みやインターネットの仕組みをきちんと説明できるわけではない。

「とにかく、できるものは、できるの」

という説明で終わってしまう。佐為もそれ以上の説明は求めなかった。こうして、「不敗無敵のネット棋士sai」の伝説が始まることになる。

石の持ち方を教わり、ネット碁に馴染み始めた頃、ヒカルは突然、「あかりちゃんに会いたい」と言い出した。いや、ヒカルにとっては「突然」ではない。あかりちゃんのことはいつも考えていた。ただ、藤崎の家に戻ることもなく塔矢家に寝泊まりする日々が1週間あまり続

いたこの頃、その思いを口にしただけのこと。思い立つたらすぐに電話したけど、誰も出ない。

「ご両親はお仕事でしょう。あかりちゃんも出かけてるんですよ。またしばらくしてかけ直しましょう」

そう明子に言われ、ヒカルは1時間おきくらいにかけ直す。3回目であかりが出た。

「あつ、あかりちゃん。ヒカルだよ。あかりちゃんに会いたいの。こっちに遊びに来てもいいし、わたしが遊びに行ってもいいけど……」

結局、2日後の午後にヒカルがあかりのうちに çık かけることになった。夕食時にその話をきいたアキラは

「じゃあ、ボクが送っていくよ。ボクはそのまま碁会所に顔を出す。このところご無沙汰みだから、たまには顔を出さないとね」

3-4 あかり視点

「そろそろヒカルちゃんが来る頃だな」

わたしはそう思つて、2階の自分の部屋の窓から外を見る。アキラくんが送つてくるというから駅から歩いてくるのだろう。だとしたらこの方向、と思う方を見ていると、それらしい二人連れが曲がり角を曲がつて視野に入った。ヒカルちゃんはアキラくんと手をつなぎ、うきうきした様子。

「なんだか、アキラくんになついているなあ」

と思ひながら、わたしは二人を出迎えるために階下に降りた。ドアホンがなり、ドアを開けると、ヒカルちゃんが飛び込むように抱きついた。

「あかりちゃん！」

ヒカルちゃんはわたしの肩に額を押しつける。

「ヒカルちゃんはずんぜん変わつていない」

わたしはうれいような、ほつとしたような気持ちになつた。

「それじゃあ、ボクはこれから駅前の碁会所に行きます。帰りは、うちに電話してくれれば、母が迎えに来ます」

と言つてアキラくんは戻つていった。わたしはヒカルちゃんを連

れて2階の部屋に戻る。二段ベッドがそのままになっている部屋で、ヒカルちゃんも他愛もないおしゃべりをしている。

「何も変わっていない。何も変わらないんだ。余計なことに悩むことはなかったんだ。ヒカルちゃんと会えば、以前と同じ気持ちが戻ってくる。ふだんは塔矢さんちにいる。たまに遊びに来る。わたしが遊びにいったもいい。それでいいんだ。そうすれば、わたしはいつも優しい気持ちでヒカルちゃんの相手ができる」

「塔矢さんちでは毎日碁を打ってるの？」

「うん、アキラちゃん、毎日相手してくれるの。コーヨーさんも時々相手してくれるし、コーヨーさんのお弟子さんたちも相手してくれる。楽しいよ」

「そう、よかったね・・・それにしても不思議ね。なんでヒカルちゃん、急に碁が好きになったんだろう」

「だって・・・」

ヒカルちゃんは答えに迷っている。ああ、こんなふうに問い詰めちゃいけないんだ。こんなふうに問い詰められるとヒカルちゃんはパニックを起こしてしまう。

「・・・ああ、ヒカルちゃん、無理に答えなくてもいいのよ。ともかく、ヒカルちゃんが碁が好きで、好きな碁を毎日打てるんなら、それでいいの」

ヒカルちゃんは時々左を向くようなしぐさをしている。そして説明を始めた。

「碁盤に黒石と白石が並んできれいな模様ができるんだ。それを見てるのが楽しいの」

「ふーん、模様がきれいだから楽しいんだ」

「それに、勝つのもうれしいよ。みんなほめてくれるから」

「うん。それはそうだね。みんなほめてくれるよね」

「こんなふうに1時間くらいおしゃべりしていると、ヒカルちゃんがねえ、あの公園に行こう」

「あの公園？」

「うん・・・」

わたしは思い当たった。ひよつとして、ヒカルちゃんが幽霊が見えるみたいなのを言った、あの公園？ ちよつと不安を感じる。

「ヒカルちゃん、また具合が悪くなったりしない？ だいじょうぶ？」
「うん、だいじょうぶだよ」

そう言われると、断ることもできない。わたしはヒカルちゃんと手をつないで出かけた。うちから5分くらいのところにある小さな公園。ヒカルちゃんは、もうすっかり花が散ってしまった2本の梅の木のところを駆けていった。花の散った枝を見上げたり、しゃがみ込んで木の根元の地面を見たりしている。この前、この公園に遊びに来て、その次の日から急にヒカルちゃんは碁を打ち始めたんだ……。何があったんだろう……。まあいい。余計なこと考えなくてもいい。ともかく、今のヒカルちゃんは塔矢さんちで幸せそうだから、それでいいじゃない。わたしが相手してあげられない時は、一人でぼんやり時間を過ごしていた昔のヒカルちゃんより、今の方がずっと幸せなんだ。わたしはそう考えることにした。

「ヒカルちゃん、そろそろおうちに帰りましょう」
「うん」

わたしはまたヒカルちゃんと手をつないで家に戻る。何も特別なことをするわけじゃないけど、これでいいんだよね。それからまた1時間くらい部屋でおしゃべりしていたら、「今日は早めに帰ってくるから」と言ってたおかあさんが戻ってきた。

「おばさん、ただいまー」

「ああ、ヒカルちゃん、お久しぶり。元気にしてた？」

そしてわたしは塔矢さんちに電話した。すぐに明子さんが出た。

「ああ、あかりちゃん。今日はありがとうございました。ヒカルちゃんも喜んででしょう。それじゃ20分くらいして、伺います」

送り迎えはいつもおかあさんだな。おとうさんは忙しいのかな。そういえば、アキラくんが「父はタイトルホルダーだ」って言った。碁のタイトルホルダーって、よく分からないけど、きつと忙しいんだろうな。でも、だから奥さんが専業主婦でいられるんだろう。

3人でおしゃべりしているうちに、明子さんがやってきた。

「今日はほんとうにありがとうございました」

と言つて帰ろうとする明子さんをおかあさんが呼び止めた。

「塔矢様、これからも末永くヒカルちゃんをお願いします」

そう言つて、おかあさんは深々と頭を下げている。明子さんは、それで分かつたみたい。

3—5

翌日、明子はさつそく区役所に養女縁組みの手続きについて相談に出かけた。話を聞くと、意外に簡単なようだった。それで、ついでに学校のことも問い合わせた。アキラがあかりから聞いた話では、この4月からヒカルは養護学校に通うことになっている。それについて、担当者はパソコンを操作して情報呼び出し、

「ああ、進藤ヒカルさんは就学免除になってますね」

とあつさり説明した。

「就学免除？　つまり、学校に行かなくていいということですか？」

「そういうことです」

「では、養護学校に通うというのは」

「ああ、もちろん、ご希望であれば通えます。義務ではないということですよ」

明子は、力が抜けるような気がした。家に戻った明子はヒカルに尋ねた。

「ヒカルちゃん、学校に行きたい？」

「いや」

「どうして？」

「だって、あかりちゃんと同じ学校じゃないんだもん」

「確かに、あかりちゃんのいない学校に通つても寂しい思いをするだけかも」

明子はそう思つて、この話は終了にした。もちろん、行洋には伝えたが。

ほどなく、法律上の手続きが完了し、「進藤ヒカル」は「塔矢ヒカル」になった。そしていつの間にか、ヒカルは明子を「おかあさん」と呼ぶようになった。行洋を「コーヨーさん」、アキラを「アキラちゃん」

と呼ぶことは変わらなかったが。

春休み最後の日、対局のあいまの休憩時間にアキラはヒカルの隣にいるはずの佐為に話しかけた。

「ヒカルちゃんが初めてうちに来た日、佐為が自分のことを話してくれたね。最善の一手、神の一手を極めたいという佐為の気持ちは、同じ碁打ちとしてすぐ共感できるし、そのためにたくさん碁を打ちたいってこともよく分かるんだ。ただ、ボクの心に引っかけていることがあるんだ。虎次郎のことだよ。明日から学校が始まるとゆつくり時間を取れなくなるかもしれないから、今日話しておきたいんだ」
ここでアキラは気持ちを引き締めるように一息入れる。

「虎次郎はヒカルちゃんと違って、佐為が宿った時にすでに碁を打っていたんだよね。でも、佐為が宿ってからは自分の碁を打つのをやめ、佐為の碁を打つようになった。虎次郎は自分の碁を打ちたいと思わなかったのかな？ ふだんはその気持ちを抑えていても、何かのきっかけでその気持ちが抑えきれなくなるようなことはなかったのかな？ 今もしボクが虎次郎の立場に立たされたら、ボクは自分の碁を打ちたいと主張すると思う。たとえば、佐為の方がボクより圧倒的に強くて、佐為の言う通りに打つ方がボクが自分で打つより勝てると思わかっていても、それでも自分の碁を打ちたいと思う。そして、いつかは自分の碁で佐為を打ち負かしたい、佐為を乗り越えたいと願うと思う。それは碁打ちとして自然な気持ちじゃないかい？ 虎次郎はこの自然な気持ちを持っていかなかったのかな？ それとも、持っていないもそれを佐為のために死ぬまで抑え込んでいたのかな？」

佐為は意表を突かれる思いだった。佐為は、ただ碁を打ちたい、それを願っていた。そして、自分が打つことで虎次郎の碁が評判となり、ついには本因坊家の世嗣に迎えられたことを単純に喜んでいて。「虎次郎は自分の碁を打ちたいと思わなかったのか？ 虎次郎はわたしを乗り越えたいと思わなかったのか？」……思ったかもしれない。アキラの言う碁打ちとしての自然な気持ちは佐為にも分かる。

「佐為、ボクは非難とか批判するつもりじゃないんだ。佐為が碁を打ちたいという気持ちもよく分かる。ボクが佐為の立場でも、同じよう

なことをしてしまったと思う。でも、ほんとうにそれでよかったのかな、とも思うんだ」

佐為はアキラの聡明さをあらためて認識する。アキラは佐為と虎次郎と両方の立場が分かっている。分かった上で、碁打ちのごく自然な気持ちで述べている。

「虎次郎はその自然な気持ちを抑え込んでいたのか？ そうだとしたら、いくら謝っても謝りきれないほど申し訳ないことをした。あるいは、まだ幼子だった虎次郎は自分の碁を佐為の碁に比べて取るに足りないものとして捨ててしまったのか？ だとしたら、わたしは秘められた優れた才能を殺してしまったことになる。なんと、罪深い所業なのか……」

佐為は、アキラと語り合いたかった。しかしそれは叶わぬ願い。佐為はアキラの声を聞けるが、アキラは佐為の声を聞けない。そして自分の悩みをヒカルを通してアキラに伝えることもためらわれる。「この悩みはわたし一人が秘めておこう。わたしの悩みをヒカルちゃんに悟られないようにしましょう。今のヒカルちゃんの幸せに影を差すようなことはすべきでない。今は、わたしが碁を打つことがヒカルちゃんのためでもあるのだから」

ヒカルは、アキラの話を理解できず、佐為の悩みに気づくこともなく、いつものにこやかな表情で二人を見ている。

「さあ、もう一局お願いするよ。ヒカルちゃん」

アキラはヒカルに声を掛けた。

その夜、佐為は4度目となる行洋との対局に臨んだ。佐為は、昼間の悩みを吹き払うように、神の一手を極めようとするように、全力を込めて碁を打つ。そしてついに、行洋を半目差で破った。終局した石の流れを眺めて行洋は

「まさに、現代の定石を使いこなす秀策だな」

と感想を述べる。

4 : 胎動

4—1

春休みが終わり、アキラが中学に通うようになると、ヒカルは暇な時間が増えた。4人そろった夕食時、行洋はくつろいだ口調で

「アキラがいなくて、弟子たちも対局に來ない時間は、ヒカルさんはネット碁に夢中なのかな」

とつぶやいた。ヒカルの代わりに明子が

「そうでもないですよ。このところ気候も暖かくなったから、午前中はよく散歩に出かけてるわ。ねっ、ヒカルちゃん」

と答えると、ヒカルは笑顔でうなづく。

「散歩？」

「まだ子供なんだから、散歩でもして外で体を動かす時間も必要でしょう。むしろ、碁漬けのアキラさんこそ見習ってほしいくらいですよ」

アキラは、「なんで急にボクに話が振られるんだ」という思いで下を向く。

ヒカルもだが佐為も散歩が好きだった。毎日のように出かけるのは、塔矢の家から歩いて2〜3分のところにある線路脇。そこは落差2〜3メートルの崖になっていて、谷底に4路線くらいの線路があり、電車が走っている。転落防止用のフェンス越しに、斜め下を走る電車を見るのが佐為もヒカルも好きだった。

塔矢家で過ごすようになってほぼ1ヶ月、対局のあいまにアキラは現代文明のさまざまな利器について簡単に説明してくれる。それで、最初の頃の驚きや戸惑いはずいぶん減ったが、それでも佐為にとつて、触ることもできなければ見ることもできない電気という摩訶不思議なものが、何百人もの人を乗せた鉄の塊を動かすのが驚嘆の的だった。だから、目の下を電車が走るたびに佐為は歓声を上げる。ヒカルも一緒に。

電車でさえ驚くのだから、飛行機はまさに奇跡と思える。鉄の塊が何百人ものお客を乗せて空を飛ぶとは！ 線路を見る視線を時おり

上に向ける。空高く飛ぶ小さな機影を見つけるとヒカルに話しかける。

「ごらん、ヒカルちゃん、飛行機ですよ！」

ヒカルも目を輝かせて空を見上げる。

それから、線路の上を跨ぐ橋を渡る。途中で立ち止まって、橋の上から電車が走るのを見下ろすこともある。あるいは、線路の上に大きく広がる空を見上げることも。そして3〜4分歩くと、「小さな公園」がある。ヒカルはそこを、佐為と出会ったあの小さな公園と勘違いしている。佐為は、ヒカルと出会ったのは藤崎の家の近くの公園だから、ここではないことが分かっているが、敢えてヒカルの勘違いを訂正しないでいる。確かに、似ている。ここにも2本の梅の木がある。もう花は散ってしまったているけど、来年の早春にはまた咲くだろう。紅梅と白梅であればいいと佐為は期待する。たまに、近くの小学校の生徒らしき子供たちが遊んでいる。

そこからさらにしばらく歩くと霊園に着く。霊園といっても陰気くさい場所ではなく、あちこちに樹木があり、花も咲いている、緑の多い公園のような所。ヒカルはここを「大きな公園」と呼んでいる。この時季、花を開いた桜の木もあちこちにあるが、佐為がとりわけ気に入っているのは広く高く枝を伸ばした楠の原木。佐為はその樹頂を見上げながら

《神が宿りそうなみごとな楠ですね》

とヒカルに語りかける。

ヒカルにとってこの「大きな公園」は猫の楽園だ。至る所に野良猫がいる。人になれていて近寄っても逃げない猫もいる。ヒカルはそんな猫を撫でるのが楽しい。猫が寝そべる地面には、雑草が小さな花を咲かせている。佐為は、猫を撫で、小さな花を見つめるヒカルを慈しみを込めて見守る。ただ、ふと悩みが心をよぎることがある。ほんの一瞬だが、虎次郎のことを考えてしまう。たまに、ヒカルがそれに気づく。

《サイ、どうしたの？　なんだか悲しそうな顔してる》

《・・・えっ・・・いえ、そんなことありませんよ。悲しくなんか

ありませんよ。ヒカルちゃんと一緒にいて、悲しいはずがないじゃありませんか》

「だめじゃないか、ヒカルちゃんに悲しい顔を見せたりして。ヒカルちゃんの幸せにわたしが影を差して、どうする……」

散歩をする時、ヒカルはたいい佐為と手をつなぐ。手をつなぐといっても、ヒカルの手は佐為の手をすり抜け、ヒカルが自分の手を握るだけなのだが、それでもヒカルはうれしい。自分の握った手の中に佐為の手を感じる。佐為も、ヒカルの手をぬくもりを感じる。

4—2

ネット碁の世界ではs a iの名前が徐々に広まりつつあったが、リアル世界の碁の世界ではヒカルの名前はほとんど知られないままだった。行洋はとりたてて箝口令をしていたわけではないが、弟子たちは天才少女ヒカルの存在を部外者に話すことはほとんどない。小学生くらしい女の子に大敗したのが恥ずかしくて話したくないというだけではない。弟子たちはヒカルに何か神秘的なもの、神がかり的なものを感じ、気安くほかの人たちに話すのがはばかられるのだ。ヒカルの普段の生活での子供っぽい振る舞いを知らず、対局の時の様子しか知らなければ、そんな思いを抱くのも、無理からぬことではある。

アキラは電車や飛行機についてばかりでなく、棋界の状況や制度などについても佐為に説明する。佐為はちゃんと理解できているようだが、一緒に聞いているヒカルにはあまり理解できない。ふだんはよく分からないなりに、おとなしく聞いているのだが、たまに口を差し挟む。とりわけ、複数のタイトルが存在していることが、ヒカルにはよく理解できない。今日は、行洋も交えて、こんな会話になった。

「けっきよく、どれが一番強いのか？」

「いや、どれが一番強いと聞かれても、簡単には答えられないよ」

と答えるアキラにヒカルは

「だって、対局すればいいじゃない」

と疑問をぶつける。

「対局？」

「たとえば、ホンインボーと名人とか、ホンインボーとキセイとかが対

局してどっちが強いか決めればいいじゃない」

「このやりとりを聞いて行洋は思わず笑ってしまう。」

「確かに、素朴な疑問だな」

「おとうさん！」

ヒカルの非常識な発言の肩を持つような行洋の言葉にちよつとあきれながら

「そういう対局はないんだよ」

と答えるアキラにヒカルは

「どうして、ないの？」

と食い下がる。

「どうしてと言われても……」

アキラはヒカルの素朴な疑問に答えることができないが、ヒカルも、納得はできないままで、それ以上の追及はしない。アキラは素朴な疑問に答える代わりに、別の説明を加える。

「一番強いかどうかは分からないけど、一番歴史があつて権威があるのは本因坊だろうね」

「ケンイ？」

「まあ、簡単に言えば、一番えらいということ」

ヒカルは「えらい」という言葉には敏感だ。

「じゃあ、コーヨーさんはホンインボーなの？」

「いや、おとうさんは本因坊のタイトルは持っていない」

「じゃあ、一番えらいんじゃないのね、コーヨーさんは」

行洋はまた笑った。それで機嫌よくなつたのか、ヒカルは佐為に語り掛ける。佐為の存在を受け入れている塔矢家の人だけと一緒の時には、ヒカルは声を出して佐為に語り掛けることもある。

「そういえば、サイはホンインボーだったよね」

《はい、そうですよ》

「サイがまたホンインボーになればいいのに」

アキラはヒカルあまりに気安く言うので、おかしくなった。

「でも、そのためには佐為が、つまりヒカルちゃんがたくさん碁を打たないといけないよ」

「そんなの、平気だよ」

「それにまず、プロにならないといけない」

「じゃあ、わたし、プロになる」

「そのためには試験を受けないといけないよ」

「このアキラの言葉を聞いて、ヒカルの表情はとたんに暗くなった。

「試験を受けるの？ ヒカル、勉強はできないよ……」

《ヒカルちゃん、碁のプロになるための試験はお勉強ではなくて、対局なんですよ。碁を打って勝てばいいんです》

「それなら、簡単じゃない！ 対局ならぜったい受かるよ」

行洋とアキラは2つのヒカルの発言の間にあると思われる、彼らには聞こえない佐為の説明を想像できた。アキラは、ちよつと考え込み、それまでの気楽な口調からまじめな口調でヒカルに問う。

「ヒカルちゃん、本気でプロになりたいと思うの？」

「うん」

「アキラ！」

行洋はそれ以上の会話を制した。

その日の夜、アキラと二人だけの場で、行洋はアキラに聞いた。だす。

「お前は、本気でヒカルさんにプロの道を勧めるつもりか？」

「彼女が本気なら、手助けしたいと思います。今日は冗談みたいな話の流れから、あんな話題に発展しましたが、ボクは前々から、機会があれば彼女にプロの道を勧めたいと思っていました」

「それが彼女のため、彼女の幸せのためだと、信じているのか？」

アキラはちよつと考えて、返事をする。

「それは、なってみないと何とも分からないでしょう。なってみて、やはりヒカルちゃんのためにならないと分かったら、休業も廃業もできるはずです。試みもせずに『無理だ』とは言えないと思います。それと、彼女のとうか佐為の才能が埋もれたままなのが残念なんです。日本の棋界にとって残念です。そして、佐為が才能を発揮するには、やはりプロになるのが一番いいと思います。それだけじゃありません。『神の一手を極める』という佐為の念願のためにも、強い相手と打つ機会を今以上に作るべきです。ネット碁にも強者はいます。でも、

何と言ってもプロを相手にするのが、とりわけタイトル戦に参加するのが一番だと思います」

「わたしもそれは常々考えている。ただ、問題は、佐為が打つというのはヒカルさんが打つということなのだ。佐為の能力、才能を発揮させるということは、ヒカルさんを表舞台に引つ張り出すということなのだよ。彼女を周囲の人たちやメディアの好奇の目にさらすのが……」

「それは、案外だいたいじょうぶな気がします。対局の時の彼女の表情、ご存知でしょう。真剣勝負の顔ではありません。佐為は真剣な顔をしているのかもしれないけど、ヒカルちゃんは、そんな真剣勝負に臨む二人の対局者をはたでおもしろがって見ているような表情です。周りの好奇心も同じようにさらりとかわす、あっさりど流すんじゃないでしょうか。ボクたちの世代の言葉で『天然』というのがありますが、ボクはヒカルちゃんをみていると『天然』とはまさにヒカルちゃんのためにある言葉かも、と思うんです。」

「ヒカルさんはその『天然』で周囲やメディアの好奇心もさらりとかわせるということか?」

「ボクはそう思います」

「そうかもしれない。それを期待していいかもしれない。しかし、もしそうならなかったら……」

「その時は、ボクが全力で彼女を守ります……もし、ヒカルちゃんが今年プロ試験を受けるなら、ボクも受けます。一緒にプロになり、プロの世界の中で、彼女を守ります」

行洋はアキラを鋭い視線で見る。

「本気だな? 間違いないな?」

「はい」

行洋はアキラの気持ちを肯定するように深くうなづく。

「お前の気持ち、お前の意志はよく分かった。ただ、お前は、年の割に大人びているとはいえ、まだやっと中学1年生。ヒカルさんを守る上で、力不足なこともあるだろう。これから、そんな状況に立ち至ったら、隠さず、迷わず、ためらわず、わたしに相談しなさい。いいね」

こんどは、アキラが深くうなずいた。

佐為もヒカルと語り合う。

《ヒカルちゃん、本気でプロを目指すのですか?》

《だめ?》

《だめとは申しません。そもそも、わたしも今の時代のプロの世界をよく知っているわけではありません。ただ、それが、碁を打つだけでは済まない厳しい世界だろうとは想像できます》

ヒカルはうつむく。

《ヒカルはただ、サイがホンインボーになればいいのについて思うだけなんだ。サイはこんな強いんだから。コーヨーさんにも勝ったんだよ。碁で一番えらい人になれるはずじゃない》

佐為はヒカルを慈しむように見る。ヒカルの気持ちはうれしい。本因坊の座は取り返したいと思う。そして何より、神の一手を極めるために強者と対局したいと切実に思う。だけど、そのためにヒカルが苦労を背負うことになるとしたら……こんな思いを胸に秘めて佐為はまた別の問いを発する。

《ヒカルちゃん、碁を打つのが好きですか? わたしが扇で示す場所に碁石を置くだけでも、ヒカルちゃんは碁を打つのが好きですか?》
《好きだよ。だって、黒石と白石できれいな模様ができていくの、見てて楽しいもん。それにね、サイが碁を打つ時の顔を横から見てるのも好きなの》

佐為はちよつとはにかんだ。はにかむ顔を見られないようそつと横を向き、それからまたヒカルの方を向いて言葉を継ぐ。

《それは良かった。ヒカルちゃんが碁を打つのが好きなのは、何よりです》

4-3 あかり視点

わたしは地下鉄の出口を出て、地図を見ながら歩いている。今日はわたしが塔矢さんの家を訪れる。ヒカルちゃんが「セーラー服を着たあかりちゃんを見たい」と言うから、放課後、家にカバンを置いて、着替えをせずにそのまま行くことにした。あの碁会所のそばの駅から2つ目の駅で降りて歩いて10分はかからないと言われ、前もって地図を送ってもらっている。「セーラー服か、ヒカルちゃんも着たかつ

たのかな……」こんなことを考えながら歩いている。

一応話題になった時のために調べておいたけど、日本の囲碁にはタイトルが7つある。そのうち行洋さんは4つのタイトルを保有している。半分以上じゃない。そしてアキラくんは「天才少年」と呼ばれているらしい。すごい一家にヒカルちゃんはもらわれたんだな……。こんなことを考えているうちに、それらしい家の前に着いた。「塔矢」という表札がある、門構えのある立派なお屋敷。門構えの向こうに庭があつて、その先に玄関がある。さすが、4冠のタイトルホルダー……。ドアホンを押して「今日お伺いすることになっていた藤崎あかりです」と言ったら「ああ、ちよつとお待ちください」という明子さんの声がかして、すぐに玄関が開き、庭を通つて門を開けてくれた。

「アキラは中間試験でお昼前に帰つてきて、昼食を終えてすぐにヒカルちゃんと対局を始めてしまったんですよ。今、対局の真つ最中だけど、まったく、お客様を呼んでおいて……。対局を中断させて連れてきますね」

そんな話をしながら玄関に入る明子さん。

「あつ、そういうことなら、その対局を見えています。邪魔するのも悪いし、わたしもヒカルちゃんが碁を打つてるところを見たいので」

「ああ、そうしていただけるなら」

と言つて、明子さんは対局をしている部屋に行こうとして、ふと何かを思いついたように、足を止めた。

「その前に、10分くらい、あかりちゃんとわたしでお話しさせてほしいんだけど、よろしい?」

「えっ……。もちろん、かまいませんけど……」

明子さんはわたしをリビングルームに通した。そして、わたしが椅子に座るとすぐ話し始めた。

「今、ヒカルちゃんをプロにするという話が出てるの」

「ヒカルちゃんが、プロって、プロの棋士に?」

「そう。ヒカルちゃんはプロ棋士の苦労が分からないから、気楽に『わたし、プロになって本因坊になるんだ』って言ってるの。アキラは乗

り気だし、行洋さんも慎重だけど引き留めはしないという立場なの。でも、わたしは反対なの。プロの苦労はよく分かっているから、ヒカルちゃんにそんな苦労をさせたくないし、プロの世界の人間関係に巻き込むのはかわいそうなの。ただ、碁のことになる、二人とも頑固だし、ヒカルちゃん自身は気楽に考えているみたいだし・・・それで、ヒカルちゃんをあかりちゃんと言うことはよく聞くと聞くから、あかりちゃんからプロになるのはやめるよう話してほしいの」

明子さんは真剣な表情でわたしを見つめている。

「ヒカルちゃんが、プロに・・・」

わたしは考え込む。聞いた瞬間は、「そんなの無理」と思った。でも・・・わたしが勝手にそんなこと思っちゃいけない。「ヒカルちゃんには無理に決まってるじゃない。そんなことやめておきなさい」なんて言うべきじゃない・・・。

「お婆さんの心配はよく分かります。去年までの、今年の3月までの、碁に打ち込むようになる前のヒカルちゃんしか知らなかった頃のわたしなら、同じことを考えたと思います。でも、碁を打つようになって生き生きしているヒカルちゃんを見ると・・・」

明子さんは、真剣な表情になってわたしを見ている。わたしの話の続きを待っている。

「・・・これまでいつもそうだったんです。知的障害だという理由で、なにかにつけて『無理よ』、『できないわよ』、『かわいそうよ』と言って、ヒカルちゃんに何もさせないでいたんです。でも・・・」

わたしは何と言えいいのか迷った。そして、ふと思いついた言葉を語った。

「ヒカルちゃんに、チャレンジさせてください」

明子さんはじつとわたしを見つめている。

「みんな、これまでヒカルちゃんからチャレンジの機会を奪ってきたんです。『そんなの無理』って言って。確かに、ヒカルちゃんがチャレンジできることは、少ないです。でも、碁ならチャレンジできるはず。強いんでしょう？ わたしはよく分からないけど、アキラくんって天才少年って言われてるんですよね。そのアキラくんに勝つ

んです。……ヒカルちゃんにチャレンジの機会を与えてください。ひよつとしたら、それで傷つくかもしれない。でも、なにもさせてもらえず、ただ保護されるだけの人生より、その方が幸せじゃないですか？ ヒカルちゃんにとつてまたとないチャンスなんです」

明子さんは、まだわたしを驚いたように見ている。そして、ゆつくりうなずいた。

「あかりさんの気持ちはよく分かりました。子供の頃からずっと一緒だったあかりさんそう言うのなら……」

明子さん、わたしを「さん」付けした……。それから明子さんは気持ちを切り替えるように、明るい声で

「じゃあ、ヒカルちゃんとアキラの対局を観戦しましょうか」

と言つて、二人のところに連れて行つてくれた。

障子越しに

「あかりさんがいらっしやいましたよ。対局を見たいとのことですから、通しますね」

障子を開けた瞬間

「わー、あかりちゃん、セーラー服がっこいい！」

というヒカルちゃんの声でした。ヒカルちゃんと、アキラくんもわたしを見てる。ちよつと恥ずかしいけど、そのまま中に入って、碁盤のそばに座る。

「あかりちゃん、すぐに終わるから待つてて」

というヒカルちゃんにアキラくんが

「ヒカルちゃん、その言い方はひどいよ」

と言り返す。それで、4人声を合わせて笑ってしまった。わたしが一番笑い声が大きかったかも。

「ヒカルちゃん、そうよ。それでいいの。その『天然』で……。プロの世界だつてへつちやらよ」

わたしは、なんだかうれしくなった。

対局はそれから20分くらいで終わった。「すぐ」と言えるかどうか、微妙。それから、明子さんは夕食の支度。わたしたちはリヴィングループで他愛もないおしゃべり。ヒカルちゃんは「セーラー服、よ

く似合うね」といいながら、わたしが着ているセーラー服を何度も触った。やがて藤崎の両親や小学校時代の同級生の話になると、アキラくんはついて行けない。

「アキラくん、こんな話題だと退屈？」

とわたしが聞くと、アキラくんはちよつと間を置いて

「もし、差し支えなければ、ボクは棋譜の勉強でもしていたいんだけど」

と答える。「えっ、中間試験中なのに試験勉強じゃなくて棋譜の勉強？」と思っただけど、口には出さない。ほんとうに、碁のこじか頭でない人なんだ、アキラくんって。ヒカルちゃんはちよつとふくれっ面したけど、左の方に顔を向けて、それからアキラくんの方を向いて、「うん。じゃあ、アキラちゃんは勉強してて」

と言った。それから二人で他愛もない女の子どうしのおしゃべり。やがて行洋さんも帰ってきて、夕食。

・・・夕食も終わりがける頃、わたしはヒカルちゃんに話しかけた。

「ヒカルちゃん、プロになるの？」

「うーん、まだ分かんない・・・あかりちゃんは どう思う？」

「わたしは、ぜひチャレンジすればいいと思うよ」

明子さん、行洋さん、アキラくんの視線がわたしに集まるのが痛いくらいだけど、ここで話をやめるわけにはいかない。

「だって、ヒカルちゃんは強いじゃない。天才少年と言われているアキラさんより強いんでしょう。ぜったいプロになれるし、プロになってタイトルを取れるよ」

「うん。ホンインボーになりたいんだ」

「ホンインボー？」

「うん、碁で一番えらい人だよ。ヒカル、それになるんだ」

「そうよ。ヒカルちゃんは碁で一番えらい人になるのよ。みんなもヒカルちゃんを褒めるよ。わたしも、おかあさんもおとうさんも、小学校の時の同級生もみんな。『ヒカルちゃん、えらい』って褒めるよ」

「あかりちゃん、ほめてくれるの？」

「もちろん、わたしは一番最初に褒めるよ」

ヒカルちゃんはうれしそうな笑顔をわたしに見せてくれた。

3人がわたしを見つめている。それぞれの思いを胸に秘めているんだろう……。でも、これでよかったはず。

明子さんはわたしを車で送ってくれる。途中、「おばさん……。」「言いかけたけど、明子さんは「何も言わなくていい」というように首を振った。

家の前でわたしが降りる時、明子さんが声を掛けてくれた。

「あかりちゃん、ありがとう。今日は、ほんとうにありがとう」

4—4

6月になると、塔矢アキラと塔矢ヒカル、2人そろってプロ試験を出願した。院生を経ない外来受験者なので棋譜を2枚添えて出願する。

アキラの棋譜は、父行洋と緒方九段を相手に対局した棋譜。どちらもアキラが負けた棋譜だが、相手が相手であり、この2人との対局でこれだけの碁を打った棋譜は、アキラの棋力の高さを示すものと言える。

ヒカルの棋譜は、アキラと行洋を相手にした棋譜で、どちらもヒカルが勝っている。とりわけ塔矢名人を相手に半目差で勝った棋譜は棋院事務局の担当者を驚かせた。最初の反応は「その棋譜は本物か」というもの。しかし、棋譜の偽造など前代未聞だし、仮に偽造だとしても、これだけの棋譜を偽造できるとしたら、それだけでも相当の棋力はず。「ひよつとして塔矢名人自身が偽造した？」という疑問を浮かべる者もいたが、すぐに自分で否定した。名人ともあろう人が棋譜を偽造するなど、それはあり得ない。

添付された戸籍抄本によれば塔矢ヒカルは今年の3月に塔矢家の養女になったばかり。年齢はアキラと同じ。わずかに誕生日が遅いので、アキラの義理の妹になっている。こんな天才少女を塔矢名人はどこで見つけてきたのか？

窓口で願書の受付を担当した者が呼ばれ、どんな人だったのか質問されたが、その答えがまた驚きを生んだ。

「背丈は塔矢アキラさんの肩くらいしかない、見た目は小学校2年生か3年生くらいの小柄な女の子です。塔矢アキラさんの話では軽知的障害があつて、一人では迷子になりそうなので、しばらくはアキラさんが付き添つて棋院と一緒に来るらしいです」

ただ、あまりに信じがたい話なので、棋院の者たちも部外者に語ることはなく、ヒカルの存在が世間に知られることはなかった。

予備試験が始まると、少女と見まがうおかつぱ頭の美少年と、その美少年に寄り添われた小柄な女の子の二人組は人目を引いたが、どちらもあつさり3連勝して予備試験を通過した。

4—5 (間奏曲)

予備試験は7月下旬に終わり、本試験が始まるのは8月下旬。そのあいまの8月上旬、行洋は新潟でのイベントに参加する。明子が行洋に話しかける。

「新潟は海がありますよね」

「ああ。日本海側では有数の港町のはずだ」

「じゃあ、みんなと一緒に出かけませんか？ アキラとヒカルちゃんを海水浴に連れて行きます。いつも部屋にこもつて碁を打つばかりじゃ、体に良くないでしょう。成長期なんですから。たまにはお日様を浴びて海で泳ぐのもいいでしょう」

「ああ、それは良いことだ。新幹線を使えば2時間くらい。湘南や千葉方面に行くより近いくらいだ。アキラはともかく、ヒカルさんは喜ぶだろう」

イベントの前日に会場であるホテルに着いて宿泊するため、塔矢一家はお昼過ぎに新幹線に乗った。ヒカルは藤崎の家のそばから新幹線が走るのを見ていたことはあるが、乗るのは初めてなので、はしゃいでいる。明子も、

「4人だから、2人座席の向きを変えて向かい合い4人のボックスにできるから、いかにも家族旅行って感じですね。これまで新幹線に乗る時はいつも3人座席で一列にならんでいたから」

と明るい声で語る。

「お前が一番はしゃいでいるみたいだね」

と行洋にからかわれた。

実は佐為もはしゃいでいる。アキラから新潟とは昔の地名で越後だと聞いて、「江戸から越後まで2時間で行けるなんて信じられない」と思っていたが、実際に乗ってみて、その早さに驚いた。

《ヒカル、ほんとうに、外の景色が飛ぶようですね。すごい……》

この頃には佐為も電車に不思議を感じなくなっていたが、新幹線の速さにはまた不思議を感じる。ヒカルは窓に顔を押しつけるようにして外を見ている。赤羽台トンネルを抜けて、高崎を過ぎるまで、トンネルは1つもなく、関東平野の景色が広がっている。

「冬の空が澄んでいる頃なら富士山が見えるんだけどね」

とアキラが説明する。残念ながら南西の方向の地平線付近は夏空の湿気を帯びた靄がかかり、それらしい山の姿は見えなかった。

「じゃあ、今度は冬に乗ろう」

「うん、そうだね」

こんなヒカルとアキラの会話を明子と行洋はほほえましく見ている。

「ほんとうに、アキラさん、すっかりお兄さん……」

やがて群馬・新潟県境の山岳地帯に入りトンネルが続く。新潟県内でもしばらく盆地を縫うようにトンネルの多い区間だったが、新潟平野に入って視界が開け、じきに新潟駅に着いた。

翌日の朝、明子は2人を連れて海水浴に出かける。

「お父さん一人仕事させて、わたしたちだけお出かけなんて、なんだか申し訳ないですね」

「そんなことはない。子供たちにはこういうことも必要なんだから」

新潟から電車で20分ほど乗り、タクシーで5分くらい。海の家で水着に着替えて二人は波打ち際に手をつないで歩く。この頃になるとアキラも人前でヒカルと手をつなぐのに抵抗を感じなくなっている。そんな二人を海の家のレストランのロッキングチェアに座って見送る明子は、「どう見ても仲良しの兄妹だわ」と思う。

浜辺はそこそこの賑わいだけど、湘南など東京近辺の海に比べれば人が少ない。アキラとヒカルは浮き輪をもって浜辺を海に向かって

歩く。アキラは泳げるのだが、ヒカルと一緒に遊ぶのなら浮き輪がある方がいいだろうと思つて持つてきた。

波打ち際に来ると、ヒカルは、波が来ると水に浸からないよう後ろに走つて逃げ、波が引くとそれを追っかけて海に向かつて走る。そんなことを何度も繰り返し返している。アキラもそれに付き合う。そんな波との鬼ごっこに満足したら、波が引くとぎりぎり海水がかからなくなるあたりまで歩いて、そこで立ち止まっている。波が寄せるとふくらはぎくらいまで水に浸かり、砂が足の甲を薄く覆う。波が返す時、足の周りの砂が運び去られる。流され去る砂粒のくすぐったいような感触。それがヒカルにはおもしろくてたまらない。

やがて二人は、ヒカルの胸、アキラの腰まで水に浸かるくらいの所に進む。アキラはヒカルの手をしっかりと握る。万が一にも溺れるようなことがあつては悔やんでも悔やみきれないから。そんなアキラの心配など知らぬげに、手をしっかりと握ってもらつてご機嫌なヒカルは、足を海底から離し、浮き輪につかまり、プカプカ浮かぶ感じを楽しんでいる。波が押し寄せると水面が上がり、それと一緒に体も持ち上げられる。波が去ると体も下がる。それがまたヒカルにはおもしろいようで、キヤツキヤとはしゃいでいる。

「ヒカルちゃん、楽しい？」

「うん、とつても楽しい」

そんなヒカルがアキラにはいとおいしい。

〔仮に、ほんとうに仮に、佐為が、突然現れたのと同じように突然消えて、ヒカルちゃんが碁を打てなくなつても、それでも、ボクはこの子をいつくしむ。この子はボクの大切な妹なんだ。この世でただ一人の、いとしい妹〕

佐為は、水に浸かりはしないが、海の上から二人を見守っている。ヒカルの楽しげな姿は佐為の心も温める。

〔塔矢家の方々、感謝いたします。ヒカルの幸せは、わたしの力などよりはるかに、あなた方の力によるものです。これからも未永く、お願ひします。もちろん、わたしもできる限りのことはします〕

それからさらに佐為の思いは続く。

「わたしは神の一手を極めるために、虎次郎に続いてヒカルに宿つたと信じていた。今も、それは信じている。これからも、碁を打つ場面になればほかのすべてのことを忘れて碁に集中するだろう。でも、それだけではないのかもしれない。今、わたしはヒカルを幸せにするためにもヒカルに宿っているのかもしれない……そしてそれは……かつての過ちを償うためなのか……かつて、虎次郎の碁を封印し、虎次郎の才能を潰してしまった過ち。その過ちを償うために、神はわたしにももう一度この世に立ち返らせ、ヒカルに宿らせたのか？……もしそうであるのなら、わたしはヒカルの前では幸福の霊となろう。過ちを犯した身であることを偽って、幸福の霊を演じよう」

明子は海の家のレストランから海の中でじゃれ合う二人を眺めている。ヒカルちゃんは佐為の棋力なら間違いなくプロ試験に合格する。アキラの合格も間違いはない。来年も夏は巡り来るけど、プロの棋士になれば二人してあんなに無邪気に海で遊ぶことはできないだろう。二人にとって最初で最後の夏。そう思うと、何かかけがえないものが失われるような気がする。

ヒカルちゃんがプロになるという選択。あかりちゃんに背中を押されて明子も賛成した選択。それを悔いてはいない。悔いてはいないけど……

「仕方ないわ。何かを選ぶということは、それ以外の何かを捨てる、諦めるということなんだから……」

5：天然天才少女

5-1

本試験の初日、8歳くらいにしか見えないヒカルは受験者全員の注目を集めた。こんな小さな女の子が予備試験を勝ち抜いたとは……。しかも、その振る舞いは年相応というか年以下なくらい子供っぽい。そして、かねて天才少年との噂の高い塔矢アキラがそんなヒカルに付き添うように世話を焼いている。これだけでも注目の的となるのに十分すぎるほどだが、さらに加えて、ヒカルは初日の対局を午前中に終えた。打掛けの前に、相手が投了したのだ。

プロ試験には実力の伯仲した受験者が集まる。だから、一方的な勝負になることは少ない。どちらかが大きなミスをしたとしても、それでも打掛け前に終わることはほとんどない。初日の相手は決してミスをしたわけではない。むしろ、試験初日の緊張にのまれず、自分の実力を発揮できたと思っっている。それでいて、圧倒的な負け。何が何だか分からなかった。

ヒカルは控え室で棋譜集を見ながらアキラを待つ。打掛けになると、アキラと一緒に、明子がつって持たせてくれたお弁当を食べる。午後の対局が再開されると、ヒカルはまた棋譜集を見ながらアキラを待つ。もちろん、実際に棋譜集を見ているのは佐為であって、ヒカルはただその黒白模様を眺めているだけなのだ。

アキラの対局が終わると、二人で帰宅する。ヒカル一人だと迷子になることを心配する明子の指示だし、アキラも同じ心配をしている。ヒカルは対局を終えたアキラに結果を聞くことはない。勝ったと信じている。そして、アキラもヒカルの結果を聞くことはない。こうして初日から9日目まで、二人は連勝を続けた。

9日目まですべて、ヒカルは打掛け前に中押し勝ちし、棋譜集を見ながらアキラを待っていた。佐為の姿が見えない周りの人たちには、ただヒカルが熱心に棋譜集を見ているとしか映らない。知的障害のことは知られている。試験の初日にアキラが

「……こういう事情なので、しばらくボクが彼女に付き添います。

「ご了承ください」

とあいさつしていたから。知的障害を負っていないながら神業と思えるほど碁が強い少女。周りは興味深げに眺めるが、敢えて言葉を掛ける勇気のある者はいない。ただ、9回の対局でヒカルの奇妙な癖は知れ渡るようになった。対局中、時おりニコニコしながら左を見る癖。そして、対局に臨むヒカルの表情。緊迫した勝負に臨む表情ではない。楽しいことに夢中になっている子供のような生き生きした表情。

10日目。注目のアキラ・ヒカル直接対決。結果はあっけなかった。打掛けが告げられた時、中盤戦が終わる頃、アキラが投了した。思わず「まだいけると思いますが」と声を掛けた人もいるが、「もう終わってます」とアキラは涼しい顔で答えた。手をつないで対局室を出る二人。

「お弁当は家に持ち帰って食べようか。あと1時間くらい、ヒカルちゃん、がまんできる?」

「うん、できるよ」

こんな会話が聞こえる。いたいけない妹としっかり者の兄の会話としか思えない。

その日は家で明子を交えて3人で昼食を摂った。

「ヒカルちゃん、もうそろそろ、うちから試験場までの道のりを覚えたんじゃない? 明日は、ヒカルちゃんの対局が終わったら一人で帰ってこない?」

と明子が尋ねる。佐為もそれに同調する。

《そうですね。ヒカルちゃん、もう一人で帰って来れますよ。それに、わたしも行き方を覚えました。ヒカルちゃんが忘れていたら、わたしが教えてあげますよ》

「じゃあ、明日からヒカルは一人で帰ってくる」

「それじゃあ明日からお弁当はアキラだけでいいかしらね」

と明子が言うのと、ヒカルは不服そうな顔をする。それを見て明子が「ヒカルちゃんもお弁当を作ってほしいの?」

ヒカルはコクコクとうなづく。アキラは笑っている。

「まあ、一人分も二人分も作る手間はたいして変わらないから」

ということ、11日目もヒカルとアキラはそれぞれ弁当をもつて試験に出かけた。その日も午前中で対局を終えたヒカルは、打掛けまで控え室で棋譜を見て過ごし、アキラと一緒に弁当を食べ、それから佐為に案内されて帰宅した。

「ヒカルちゃん、ちゃんと一人で帰って来れたのね。えらい！」

と明子が褒める。ヒカルはとてもよろこんだ。このパターンが最終日まで続いた。

結局、プロ試験をヒカルは全勝、アキラは1敗で合格した。塔矢家の人たちや門弟たちには初めから分かっていた結果であるけど、棋界やメディアは騒がしかった。以前から天才少年と噂されていたアキラはまだしも、突然彗星のように現れたヒカルは、その圧倒的な棋力と、それに反比例というか極端なコントラストをなすような子供っぽい「天然」の振る舞いでメディアのかつこうの標的になりかけたが、「まだ未成年であり、かつ知的障害を負っているから」

という棋院の自粛要請を受け入れ、積極的な取材は手控えられていた。ただ、プロ試験終了後に合同記者会見を開くのは、棋院としても受け入れざるを得なかった。

試験の全日程が終了する前、ヒカルとアキラの合格が確定した時点で、棋院から記者会見の事前打ち合わせのため、日本棋院に来てほしいと連絡があった。その日、ちょうど自分も棋院に用事があった緒方が車で送ってくれることになった。

棋院のスタッフの中には、この日初めてヒカルを目にする者もいる。確かに、この小さな女の子が、プロ試験での対戦相手をみな午前中で投了させているとは、それどころか塔矢名人に半目差で勝ったとは、信じがたい。しかし、事実なのだった。

アキラは、「ヒカルちゃんは問い詰められるとパニックを起こすので、記者との応答は基本的にボクが引き受けます」と強力に主張した。「パニックを起こしたら、その責任を取ってくれますか」と迫られると、棋院としてもアキラの主張を受け入れざるを得ない。先に自分の用事が済んだ緒方もその席に加わってアキラを援護した。

こうして事前の打ち合わせが終わり、棋院を出ようとしていると、

入ってくる桑原本因坊にばったり出くわした。

「これはこれは、緒方先生に塔矢のお坊ちゃん、それに、この子は例の塔矢家の秘蔵っ子かな？」

緒方は「いやなヤツと顔を合わせてしまった」というような表情になり、アキラは緊張した面持ちになったが、ヒカルは至って平気。

「おじいちゃん、だれ？」

こう素直に問いかけられると、桑原も笑顔で対応せざるを得ない。「ん？・・・わしは桑原というものじゃ。これでも本因坊をやっておる。お嬢ちゃん、覚えておいておくれ」

「わー、おじいちゃん、ホンインボーなんだ。一番えらい人なんだね。こんど、わたしがホンインボーになるんだ」

このせりふには、さすがの桑原も目を丸くした。現役本因坊に向かってここまであつげらんことこんなことを言つてのけるとは。緒方とアキラは笑いたくなるのを懸命でこらえ、

「では失礼します」

とあいさつし、ヒカルの手を引いて急いで棋院を出て、そのまましばらく早足で歩き、もう大丈夫と思われるところで、緒方は大声で笑い出した。アキラも一緒に笑う。ヒカルはそんな二人を不思議そうに見ている。

《サイ、どうして二人はあんなに笑ってるの？》

《それは・・・》

佐為も説明に困った。

笑いが収まりかけたところで、緒方は近くに駐車してあつた車に乗り、二人を後部座席に乗せたが、それからまたハンドルにうつ伏して笑い出した。

「ごめん、ちよつと待ってくれ。笑いながら運転して事故を起こしてはたいへんだから、笑いが収まるのを待ってくれ」

ヒカルは、こんな緒方の様子を首をかしげながら見ている。そのヒカルを見てアキラは、

「大丈夫だ。きつと大丈夫だよ。ヒカルちゃんの周りには振り回されるかもしれないけど、ヒカルちゃん自身はこの「天然」でプロの世界を

すいすい泳いでいく。きつと、そうだよ」
と安心する。

そして記者会見当日。記者の質問はヒカルの碁歴に集中する。たった13歳、いや、まだ誕生日前だから12歳の少女がどうやってそれほど棋力を養ったのか？

あらかじめ棋院の担当者が、「塔矢ヒカルさんは問い詰められるとパニックを起こすので、基本的に応答は塔矢アキラくんが代行します」と案内したとおり、アキラが答える。

「今年の3月、ボクが小学校を卒業する間際、彼女が父の碁会所にやって来て対局したのが始まりです。ボクとの対局の始まりというだけでなく、そもそも彼女が碁を打つのが、その時が最初だったんです。その時から、彼女は圧倒的に強かった。その後、彼女が話してくれたところでは、その前の晩に碁を打つ夢を見て、とても楽しかったから、碁を打ちたいと思ったとのこと。彼女の家族に聞いても、彼女がそれまで碁を打っているのは見たことがないとのこと。そんな彼女がなぜこれほど強いのか、ボクたちにとっても謎です。ただ、サヴァン症候群という、知的障害を負いながら特定の分野に天才的な才能を発揮する例があるとのこと、ボクたちは彼女がそうなのだろうと思っっています」

メディアの中には、アキラの説明でなく本人の説明を聞きたいと食いつかるところもあるが、あらかじめ「佐為のことは話さないように」と言われているヒカルの説明も似たようなもの。

「夢を見たの。わたしがきれいな男の人と碁を打ってるの。碁盤に黒石と白石が並ぶのがきれいで、それを見てるのが楽しかったの。それで、次の日にあかりちゃんに碁会所に連れて行ってもらって、そこでアキラちゃんに会ったんです」

「その、『きれいな男の人』というのは、塔矢アキラさんですか？」

ヒカルは首を振る。

「ううん、違う」

「では、どんな人でしたか？ たとえば、タレントにたどえるなら、どんな人？」

「うーん……」

ヒカルは答えられない。ここでアキラが割って入る。

「これ以上問い詰めないでください」

仕方ないから記者は質問を変える。

「どうして、初めからそんなに強かったんですか」

ヒカルはちよつと左を向き、

「わたしも分からない」

と答える。これ以上の答えは出てこない。

結局、ヒカルの棋力は謎のままだった。ただ、月日が過ぎるうちに謎が謎のまま当たり前になっていき、不思議なこともいつも目の前にあると慣れてしまう。たとえば、佐為が電車や飛行機という不思議な存在に慣れたように。そんなふうには棋界もメデイアもヒカルの存在に慣れていく。もちろん、周りが「天然」の振る舞いに振り回されることは変わりないにせよ。いつしかヒカルに「天然天才少女」というあだ名が奉たてまつられることになる。

5—2

そんな記者会見の騒動も収まった11月の半ば、明子はヒカルに問いかける。

「来年春の新人段免状授与式、ヒカルちゃんは何を着ようか？」

一緒にいるアキラが

「今からそんな心配しなくても」

と言うと、

「あら、今から分かっていることだから、手配してもいいでしょう」

と反論された。ヒカルはうつむいて小さな声で

「セーラー服」

とつぶやいた。明子は聞き逃さない。

「ヒカルちゃん、セーラー服がいいの？」

「うん……あかりちゃんと同じセーラー服が着たいの」

明子とアキラはそれぞれにヒカルの気持ちを思いやった。

「そうね。ヒカルちゃんはほんとうなら中学生だからね。セーラー服を着て、何もおかしくないわ。今から採寸して注文すれば、年内には

できあがるでしょう。新初段戦にも着れるわね」

ヒカルの顔がぱつと明るくなったが、アキラはあわてて会話に割り込む。

「お母さん、いくらなんでも新初段戦にセーラー服は・・・」

「あら、悪くないでしょう。中学生の制服なのよ。いうなればフォーマル・ウェアじゃない。男の人のスーツと一緒によ。公式の場で着ても不都合はないはずじゃない」

そう言われると、アキラは反論できない。せいぜい

「でも、真冬なんだからセーラー服の上にコートを着ますよね」

と言うのが精いっぱい。

「そうね。コートも必要ね。ヒカルちゃんにお似合いの素敵なコートも作らないと」

明子はなおさら気合いが入る。

「明日にでも、採寸に出かけましょうね。ヒカルちゃん」

ヒカルはよろこんでうなずいた。

ヒカルは明子とアキラに挟まれて歩いている。両手をつないでうれしそう。その日は冬の前触れのような冷たい風が吹く寒い日。コートを着込み、マフラーを巻いている人も多い。ちようどすれ違ったカップルが長いマフラーを2人で巻いていた。ヒカルは振り返ってそのカップルを見送る。

「いいなあ・・・ねえ、おかあさん、あんな長いマフラーを買って。

アキラちゃんと一緒に巻くの」

アキラは

「えっ?・・・」

と引くが、明子はよろこんだ。

「それはグッドアイデア。うん、マフラーも買いましょう」

という話の流れで、セーラー服とコートの採寸の後、3人で冬物衣料の売り場に行き、ロングマフラーを買った。外に出てヒカルは

「ここに巻いていい?」

と尋ねる。

「もちろん、いいわよ」

アキラは観念したように、マフラーを巻かれるままになっている。それから明子は、アキラの身長くらい残っているマフラーをヒカルに渡す。ヒカルは自分の首に巻き付け、残った部分を垂らしている。そして、アキラをうれしそうに見上げる。その笑顔を見ると、アキラも「まあ、これくらいはいいか」という気になる。わきで明子が「とてもお似合いよ。仲良しの兄と妹」

と声を掛けた。それを聞いてうれしくなったヒカルは「キャッ」と言いつて駆けだそうとした。アキラは引つ張られてしまう。

「ヒカルちゃん、ちよつと待って」

12月に入って、ヒカルのセーラー服とコートが出来上がってきた。セーラー服はあかりが通う葉瀬中学の制服と同じスタイルに仕上がっている。コートはふくらはぎまでかかる長さの濃緑の厚手のコート。これなら、下がセーラー服とスカートでも寒くない。小柄なヒカルが着るとお人形のような。ヒカルは部屋の中で何度もセーラー服を着てはしゃいでいる。そんなヒカルを明子はうれしそうに見守っている。

こうやって、疾風怒濤のようなさまざまな出来事があった年も暮れていき、新しい年が明けた。

年が明けるとすぐに、新初段戦。初戦はヒカル対森下九段、次がアキラ対座間王座という対局が組まれている。

ヒカルの新初段戦の朝。ヒカルはセーラー服を着て、その上からコートを着る。ボタンを一番上まできちんと留めれば、下に着ているセーラー服はぜんぜん見えなくなる。そんなヒカルの手を引いてアキラは棋院に向かう。自分の新初段戦は来週だが、その前にヒカルの付き添いとして出かける。新品のセーラー服とコートを着てうれしそうに歩くヒカルの姿を見ながら、

「棋院でコートを脱いで、ヒカルちゃんのセーラー服姿が見えた時の、棋院の人たちの反応が楽しみな。みんなびっくりするだろうな。一番びっくりするのは対局相手の森下九段だろうな」

と内心ほくそえんでいる。明子が新初段戦にセーラー服を着せると言った時は猛反対したけど、その日が現実にやってくると、むしろ

ワクワクしている自分がいる。

棋院の前で記念撮影。外だから当然、ヒカルはコートを着ている。森下と並んで何枚か写真を撮られ、

「じゃあ、中に入ってください」

と言われた時、ヒカルは

「ここでコートを脱いで写真を撮りたい」

と言いつ出した。カメラマンが

「寒いですよ。大丈夫ですか？」

と当然の心配をするが、ヒカルは

「だいじょうぶ、がまんする」

と言いつ張る。アキラは、驚きながらも、期待に胸を弾ませる。

「さあ、どんな反応が見られるか。特に森下先生の反応は……」

カメラマンが

「じゃあ、すぐに済ませますから、コートをとってください」

と言うと、ヒカルはいそいそとコートを脱いだ。森下は度肝を抜かれたような顔をした。カメラマンも一瞬唖然とした。それから、「こんなまたとないシャッターチャンスを逃すものか」という表情になった。

「じゃあ、もう一度並んでください。森下先生、お願いします」

ヒカルは満面の笑顔を浮かべて立っている。その横で森下は無理に笑顔を作る。アキラは笑いをこらえるのに苦労した。

「ヒカルちゃん、やってくれるね！」

カメラマンはパチパチとシャッターを切る。

「ありがとうございます。いい写真が撮れました。じゃあ、寒いから急いで中に入ってください」

ヒカルが中に入ると、当然のことながら、棋院にいるすべての人の視線がヒカルに集まった。

アキラが検討室に入ると先客が二人いる。緒方は予想の範囲内として、もう一人は桑原本因坊。

「おや塔矢のセガレ。お主は来週じゃろう」

「今日は、ヒカルちゃん……ヒカルさんの付き添いです。彼女は世

慣れないところがあるので」

「それは親切な兄貴分じゃ」

「桑原先生はどうして？」

「ワシに向かつて『ホンインボーになる』とぬかしおった小娘の初舞台じゃ。見に来ないわけにはいくまい」

と言いなからアキラと緒方を見渡した桑原は

「どうじゃ、一つ、賭けをせんか？ 小娘と森下九段、どっちが勝つか」と持ちかけたが、

「ボクはもちろんヒカルさんに賭けます」

「わたしも、ヒカルさんに賭けますよ」

というアキラと緒方のせりふを聞いて

「それじゃあ、賭けにならんかう」と笑った。

新初段戦が行なわれる幽玄の間に入ったヒカルに佐為が話しかける。

《ヒカルちゃん、今日はぜひ、森下九段に本気で打ってほしいんです。だから、対局が始まる前に、こう言ってください「逆コミじゃなくて、ふつうのコミで勝つ気で打ちます」》

《うん、分かった》

碁盤をはさんで森下と向き合ったヒカルは

「わたし、逆コミじゃなくて、ふつうのコミで勝つ気で打ちます」

と言いつ放った。森下は怒るよりあきれた。いくらプロ試験全胜合格とはいえ、無鉄砲すぎる。そして、

「オレはプロ試験の受験者じゃないんだぞ。プロの力を見せつけてやる」

と闘志をかき立てた。佐為の作戦は、対局の前からの中した。

「お願いします」

「お願いします」

二人は礼をする。

《さあ、ヒカル、行きますよ》

《うん》

黒を持つ佐為はヒカルは最初から積極的に攻める。5目半のコミを跳ね返すには、積極的に攻めるべきなのだ。森下の棋譜は研究済み。確かに強いが塔矢名人ほどではない。負ける気はしなかった。実際、押してくるヒカルを森下は手堅く守るが、反転攻勢に出る機会をつかめないまま対局が進んでいく。森下に大きな失着はないものの、じりじり押されていき、結果は黒69目、白60目。逆コミ5目半を入れて、黒が14目半の勝ち。

「ふつうのコミでも、3目半の負けだ」

森下が苦虫をかみつぶしたような顔でつぶやいた。

ふだんは囲碁のことなどほとんど報じない一般メディアにも「セーラー服、九段を破る」という見出しが踊った。

以来、森下の研究会では「塔矢をなんとかせい！」という掛け声に「ヒカルをなんとかせい！」という掛け声加わることになる。

5-3

その掛け声を聞かされる森下の門弟に、師とヒカルの棋譜を見て考え込んでいる者がいる。その門弟、まだプロになる手前の院生である和谷は思い切つて師に尋ねた。

「師匠、saiというネット碁の打ち手をご存知ですか？」

「いや、オレはネット碁はしないから」

「そうですか・・・」

「そのsaiがどうかしたのか？」

「塔矢ヒカルにそっくりなんです」

「・・・？」

「つまり、この新初段戦の塔矢ヒカルの手筋とネット碁のsaiの手筋がそっくりなんです。ひよつとしてsaiは塔矢ヒカルなんじゃないかと思えるくらい」

「ほんとうかい？」

と、もう一人の門弟が話に加わる。そして、新初段戦の棋譜をあらためてたんねんに見ながら、

「確かに、言われてみれば・・・」

「オレ、saiとはこれまで3回対局してます。どれも完敗、ボロ負け

です。s a iはオレより強い相手にも圧倒的な強さで勝ってます。これまで、オレの知る限り負け無しです。去年の3月頃ネット碁に現れてから、何百回もいろんな相手と対局しているけど、1敗もしてません。しかも、チャットもメッセージもせず、対局するだけだから正体が分からないんです。ネット碁ではすでに生きた伝説になってます……オレ、去年のプロ試験で塔矢ヒカルとも対局しています。その時、どっか見覚えのある打ち方だとぼんやり感じたんだけど、中盤で中押し負けしたから、はつきりしなかった。師匠の最後まで打ち切った棋譜を見て、はつきり分かりました。これ、s a iの打ち方ですよ……ということは、ネット碁のs a iは塔矢ヒカルなのかな？……」

「そんなこと、本人に直接聞けばいいじゃないか」

と、ネット碁の世界で流布している伝説の重みが分からない森下は気軽に言っただけのける。和谷の方がたじろいだ。

「そんなこと、していいのかな……聞いたとして、本人は正直に答えるのかな……相手はなんだって天然天才少女なんだ」

それともう一つ。塔矢の家を訪れるのが、気が重い。和谷は塔矢アキラに対して複雑な思いを抱いている。自分より1歳年下。それでいて碁はめっっぽう強い。天才少年の噂は否応なく和谷の耳にも入った。そして、プロ試験で見せつけられたその実力。もちろん、和谷も完敗を喫した。碁が強いだけなら、まだいい。試験場で対局が始まる前、ほかの受験生は緊張しているのに、アキラは悠然と棋譜集などを読んでいた。あの態度が癪に障った。それでいて、中学1年生なのに礼儀作法は完璧で付け入る隙がない。妹の方はまだしも「天然」で可愛げがあるけど、兄の方は……。もともと森下門下は塔矢門下にライバル意識を持っているけど、単純なライバル意識だけではない、もつと屈折した思いを和谷は塔矢アキラに抱いている。そして、ヒカルに会うとなれば、その保護者のように振る舞っているアキラにも会わざるを得ない。

それでも結局、その週の土曜日、和谷は塔矢邸を訪れた。アキラへの反発も、ネット碁の伝説の重みへのたじろぎも、好奇心、探究心に

逆らえなかった。恐る恐るドアホンを押しして来意を伝えると、通された。

「ヒカルちゃんは今アキラと対局中です。対局中は、よほど緊急の用事でないと、途中で席を立つことはありません。今の対局が終わるまで、待つていただけますか？」

とていねいに対応する明子。和谷は、

「もちろん、待たせてもらえるなら、待ちます」

と緊張して答えた。明子は和谷をリヴィングルームに案内してから、二人が対局している居間に行き、障子越しに声をかけた。

「ヒカルちゃん、院生の和谷という人が尋ねておいでです。その対局が終わったら、ちよつとりヴィングルームに顔を出して」

「うん、分かった」

と元気なヒカルの声が返ってきた。

和谷が塔矢家のリヴィングルームで緊張して待っていると、30分ほどしてヒカルとアキラが入ってきた。和谷は思わず立ち上がった

「院生の和谷義高です。本日は、ヒカルさんにお尋ねしたいことがあつて、伺いました」

としやちこぼったあいさつをした。アキラは

「そんなに緊張しないでください。どうぞ、掛けてください」

と言つてから和谷に尋ねる。

「それで、ヒカルちゃんに尋ねたいことつて、なんででしょうか？」

「はい、それは……」

和谷はちよつとためらい、思い切つて正面から質問した。

「ヒカルさん、ネット碁の s a i ですか？」

「うん」

ヒカルは屈託ない口調で答えた。アキラも佐為も止める暇がなかった。

和谷は、あまりに簡単に返事をされて、逆に戸惑っている。そんな和谷を見ながらアキラは、

「ボクが止める間もなくヒカルちゃんが答えてしまった。今日、明日のうちにネット碁の世界に知れ渡るだろう。でも、考えてみると、ヒ

カルちゃんがs a iだということが知れ渡ったとしても、ヒカルちゃんに不都合はないんだ。いずれ、プロ棋士として手合が始まればヒカルちゃんの圧倒的な強さは周知のことになるのだし、ネット碁ではs a iの名前で打っていることが分かったとしても、佐為の存在がばれるわけではないのだから、別にかまわないのか……」
と考えている。

和谷は落ち着きを取り戻し、

「なんで、これまで隠していたの？　そしてなんでこの場で、こんなに簡単に認めたの？」

と尋ねる。和谷としては当然な疑問なのだが、ヒカルは和谷がなぜこのようなことを聞くのか、理解できない。その様子を見てアキラが代わりに答える。

「別に隠してたわけじゃないんだ。これまで誰からもそんな質問されたことがなかったから、話さなかったただだよ。ボクたち、ボクや父や、父の門下の人たちは知っているけど、敢えて言いふらすことでもないからね」

和谷は、あまりにあっさり謎が解けたので、脱力した。そんな和谷にアキラが逆に質問する。

「それにしても、なんでヒカルちゃんがs a iじゃないかと思ったの？」

「それは……オレ、これまで3回s a iと対局してる。もちろん3回とも完敗だけど、s a iの完璧な手筋が好きで、ほかの対局も見ると棋譜を集めてもいて、それなりにs a iの打ち方の癖は分かっているんだ。それで……あつ、そうだ、オレは森下先生の門下なんだ。それで先生の新初段戦の棋譜を見て、塔矢ヒカルの打ち方がs a iにそっくりだなと思って……」

「ああ、そういうことだね。ヒカルちゃんは確かに、これまで塔矢門下以外の人と対局したことがほとんどないんだ。プロ試験とこないだの新初段戦くらいかな。だからヒカルちゃんの手筋はあまり知られていないから、s a iとの関係も分からなかったんだろうね」

ヒカルは、アキラと和谷の対話を、いつものように屈託ない笑みを

見せながら眺めている。そんなヒカルに佐為がささやく。

《ヒカルちゃん、この和谷という人、そんなにs a iのファンなら、これからヒカルちゃんが対局してあげれば?》

《うん。サイもこの人と対局したい?》

《それはもちろん》

「ねえ、これから対局しない?」

「えっ?・・・」

突然そんな話を切り出されて和谷はあわてた。

「アキラちゃん、いいでしょう?」

アキラも、一瞬驚いたが、異存はない。

「もちろん、ヒカルちゃんが対局したいんなら」

そうやって始まった佐為Ⅱヒカルと和谷の対局はもちろん和谷の完敗に終わったが、和谷は生きた伝説であったs a iと直接対局できた満足感の方が大きかった。それだけでなく、s a iとの対局は負けても気分がいいのだった。言い換えればs a iは勝ち方が美しい。

「どうも、突然押しかけてきて、対局までしてもらって、ほんとうにありがとう」

ぎこちなく礼を言う和谷。帰り際に、ダメもとでヒカルとアキラに尋ねる。

「オレ、さつきも言ったように森下先生の門下で、森下先生と塔矢先生はライバル同士で、と言うか、オレたちが勝手にライバル意識燃やしてるだけかもしれないけど・・・ともかく、そういうことなんだけど、オレ、これからもたまに対局させてもらえないかな?」

「うん、いいよ」

ヒカルはいつもの屈託ない口ぶりで答える。

「ありがとう」

和谷としては、まさに感謝感激という気持ちだった。それから和谷は、毎週とは言わないまでも、2週に1回くらい塔矢邸を訪れヒカルと対局するようになる。

何度か塔矢邸を訪れるうちに和谷のアキラへの感情が変化していった。障害を負った妹、それも去年の3月から縁が生まれたばかり

の妹を純粹に氣遣う兄としてのアキラ、そして碁へのひたむきな情熱と向上心を抱く棋士としてのアキラ、そんなアキラを見ていて反発が薄れていった。「冷たい」とか「傲慢」とか言われるのは、碁に没頭するあまり人付き合いに関心が向かないアキラの態度が誤解された結果だろうと思える。

「なんだ、オレたち、勝手にアキラのイメージをでっち上げて、それを嫌ってただけなのか・・・」

ネット碁の生きた伝説saiが塔矢ヒカルであることは、「今日、明日のうち」とは言わないまでも、1週間足らずのうちにネット碁の世界に広まった。日本の事情に疎い外国の参加者が「Who is Hikaru?」と質問を発すると、英語のできる日本人の参加者が英語で説明する。「天然」という日本語の説明には手こずるようだが(「natural」はもちろん、「innocent」とか「naive」といった単語も使われた)、要するに知的障害を負っているながら碁だけは神がかり的に強いまだ13歳の天才少女という説明が行き渡る。

「Is it possible?」 (そんなの、あり?)

という当然の問いかけには

「But, it's real.」 (だって、あるんだもん)

という返信が寄せられる。

チャットをしないsaiとヒカルは何も知らないままだが、このころ外国、とりわけ中国、韓国の強者からの対局申込みが増えたとは感じるようになった。そして、それらの挑戦をことごとく退け、saiの不敗神話は続く。

インターネット情報に敏感なメディアにもその状況は伝わり、ヒカルへの注目度が増した。

5 | 4

3月の初め頃、「小さな公園」の梅の花が咲き始めた。佐為とヒカルは毎日散歩にやって来る。来るたびに、つぼみが膨らみ、開く花が増えていく。佐為の願ったとおり、紅梅と白梅の1対。ただ、ヒカルにとって残念なことに、手の届く高さに花がないから、去年のように花

を髪に挿すことができない。佐為は、自分の身がないのがじれったかったが、「そうだ、アキラと一緒に来ればいい」と思いついた。それで、さっそくアキラを誘って散歩に出かける。アキラはちよつと渋つたが、明子から「たまには散歩くらいしなさい」と言つて出された。

ヒカルは右手をアキラと、左手を佐為とつないで、いつも以上にご機嫌に歩く。入り口に着くと、何人かが公園の清掃をしているのが見える。アキラが

「入つてもいいですか？」

と声を掛けると、リーダーらしき人が

「ええ、どうぞ」

と言つてくれた。それで3人で梅の木のそばまで歩いた。

「アキラちゃん、花をわたしの髪に挿して」

とヒカルがねだる。アキラは「ほんとうは、公園の花を折つてはいけないだよ」と思いながら、周りを見渡して、誰も見ていない時を見計らつて紅梅の花を1輪折つてヒカルの髪に挿してあげた。ヒカルはうれしそうにアキラを見上げ、そして佐為の方も見上げる。その顔が可愛くて、アキラはヒカルの頭を撫でた。

「ひよつとして、佐為も一緒に撫でているのかな？」

その通り、佐為も一緒にヒカルの頭を撫でている。そして、初めて出会つた時のことを思い出している。

「ちようど1年くらいですね。1年前、ヒカルが自分で手折つた紅梅を挿した髪を、こうやって撫でてたんです。この1年、いろんなことがありました。これからもいろんなことがあるでしょう。でも、これからわたしはずつとヒカルのために幸福の霊を演じましょう。わたし自身、そうすることで自分の魂が浄められるような気がします」そんな佐為の物思いに気づくすべのないアキラは、「そろそろ帰ろう」と声をかける。

来た時と同じように、ヒカルは佐為とアキラに挟まれ、両方の手をつないで公園を通り抜ける。ちようど、清掃している人の前を通りかかったのでヒカルは

「きれいにしてくれて、ありがとう」

と声を掛けた。声を掛けられた側は、そのようなことに慣れていないのかちよつとびっくりしたような顔でヒカルを見る。そばにいたリーダーが代わりに軽く頭を下げてあいさつしてくれた。その時、ヒカルの髪の毛の紅梅の花が目に入ったはずだけど、特に見とがめられることはなかった。

そして、新入段免許授与式。ヒカルはもちろんセーラー服を着て出席する。ほかの2人の新入段者の肩ほどの背丈しかないセーラー服姿は否応なく人目を引くが、ヒカル自身はそんな演出効果などまるで意識していない。式の後、何人かの記者に取り囲まれた。この頃になると、ヒカルがどうやって棋力を身につけたのかという質問は出されなくなっていた。その代わり、新初段としての抱負を聞かれた。

「ホーフ？」

ヒカルは理解できない言葉を聞き返す。アキラはほかの記者にかまって手助けできないので、佐為が説明する。

《つまり、これからプロとして何をしたいか、ということですよ》

ヒカルはうなずいて

「ホンインボーになる」

と答えた。それを聞いた記者は

「率直なお答えをいただき、ありがとうございます」

とお礼を言った。翌日の紙面に

「セーラー服新初段、夢は本因坊」

という見出しが躍ったのは言うまでもない。

そして4月。いよいよ正式にプロ棋士としての活動が始まる。

6：変わるもの、変わらぬもの

6-1

公式の初手合、ヒカルもアキラも順当に勝った。次の手合は5月なのだが、その前にゴールデンウィーク。この時期、囲碁関連のイベントもいくつか催されるが、ヒカルはあちこちから出演依頼が殺到していた。アキラは、

「知的障害があるので大盤解説は無理です。ほかのお仕事も難しいのですが」

と説明するが、判で押したように

「出ていただくだけでいいんです。ステージに座っていてくれればそれでけっこうです」

と返事される。

「つまり、人寄せパンダってことですか？」

といささかムツとして反論するが、

「囲碁人気低迷している折、塔矢ヒカルさんの抜群の話題性と人気を活用させていただきたいんです」

と頼まれると、むげに断れない。仕方ないと思って引き受けると、

「ヒカルさんはぜひセーラー服を着てきてください」

と要求を上乗せされる。もちろん、ヒカル自身もこの点は何の異存もないのだが。

結局、この期間中3カ所のイベントに出演することになった。依頼する側としては、ヒカルを呼べば必ず付き添いとしてアキラも来るから、一石二鳥の思惑もある。そしてどのイベントもふだんの倍以上の人数が出た。

ヒカルは、出演した初めてのイベントで失敗を演じた。いや、ヒカルの失敗というより司会者の失敗と言うべきなのだが。イベントでのエグジビジョン対局。ヒカルが対局するわけではない。ヒカルはゲストとしてステージに座っている。イベントなので対局者も長考は避けてスピーディーに打ち合うのだが、それでもたまにちよつと考え込むことがある。そこで司会者が気を利かせたつもりでヒカルに

「ここで、黒はどこに打ち込みましょうか？」と質問を振った。ヒカルは佐為もアキラも止める間もなく席を立ち、大盤の前に行く。こうなると佐為も黒が打つべき場所を示さざるを得ない。

「……」

とヒカルが指さす。確かに、それは大盤解説者をうならせる妙手だったが、まだ対局者が差す前にうかつなことは言えない。ただ、観衆は思わず「へー」とか「ほー」という声を漏らし、それが対局者に聞こえる。それだけでも気が散ることは確かだ。やがて黒が打ち込んだのは、佐為もヒカルが示したのとは別の場所。見る人が見れば、失着とは言わないまでも、けつして最善の手ではない。大盤解説者は決まり悪そうな表情になり、その大盤解説者の反応を見て観衆の間には白けたような空気が広がった。そしてその雰囲気は、対局者にも伝わる。

以後、ヒカルに意見を求めてはいけないという申し送りがされることになった。当然、指導碁などもつての外。ヒカルに指導碁を打たせたら、その実力を遠慮なく発揮して、相手を蹴散らしてしまう……。と誰もが信じた。結局、ヒカルはまさに人寄せパンダとしてステージに座って顔を見せるだけになった。

そんなゴールデンウィークの最後の休日。イベント出演の依頼はあったが、断った。この日は、あかりが塔矢の家を訪ねてきてくれることになっている。これは、どんなイベントよりも優先される。ヒカルはあかりを大歓迎した。もちろん、明子もアキラも。

あかりも喜んでいいる。ヒカルたちがこんなに自分を歓迎してくれることを。塔矢家の養女になって一年以上が過ぎても、ヒカルが自分を「あかりちゃん」と慕ってくれることを。1年前の今頃、ヒカルがプロに挑戦するのを後押しした。そしてヒカルはプロになり、メディアの注目の的になっている。それでも、ヒカルはあかりの前では少しも変わらない。会えば「あかりちゃん」と言ってまとわりつく。それが、あかりにはうれしい。

「ヒカルちゃん、わたしの前ではぜんぜん変わらないな。わたしの知らない部分では変わってるのかもしれない……。きつと変わってる

よね。成長してるよね。そうでなきゃ、プロにチャレンジした意味がないから。でも、わたしの前では変わってないのが、わたしにはうれしい。自分勝手かもしれないけど、これからもずっと、わたしの前では以前のままのヒカルちゃんであってほしい……」

こんなことを考えながら、あかりはヒカルと他愛もないおしゃべりをしている。その中で中学の囲碁部のこと話題になった。

「ヒカルちゃん、わたしが囲碁部に入ってるって話、したっけ？」

「うん、知ってるよ」

「こんど、中学囲碁大会に出るんだ」

「わー、すごい」

「すごくはないの。去年は部員が足りなくて出れなかったの。今年は新入部員がいて、男女とも3人ずつのチームを組めるから出場できることになったの」

それを聞いた佐為がヒカルに話しかける。

《それなら、あかりちゃんたちに指導碁に行つてあげましょう》

《シドーゴ?》

《はい。碁が強くなるよう指導する対局です》

《ふーん》

《あかりちゃんに話してごらんなさい》

「あかりちゃん、わたしシドーゴに行くよ」

「えっ!……ヒカルちゃんが指導碁に来てくれるの?……それはうれしいけど、わたしたち、ど下手よ。下手すぎて指導碁にならないんじゃない?」

ヒカルは左を見る。佐為は自信たつぷりにうなずいている。

「大丈夫だよ」

「そう、それなら……あつ、そうだ、それと、プロが指導してくれていいの?アマチュアの大会よ」

ヒカルはまた左を見るが、この手のことについては佐為もよく分からない。アキラが助け船を出した。

「それは問題ないよ。プロが出場してはいけないけど、指導するだけならかまわないんだ」

「それはよかった……でも、ヒカルちゃん、プロになって忙しいんでしょ?」

「もちろん、毎日というわけにはいかないけど、週1回くらいなら大丈夫だよ」

と、これもアキラが代わって答えた。

「あかりちゃん、わたし、セーラー服着ていっていい?」

「うん、もちろん」

というわけで、さっそく翌日にヒカルは葉瀬中囲碁部に指導碁に出かけた。

3時半に校門で待ち合わせ。明子が車で送ってくれた。

「お婆さん、いつもありがとうございます」

「いいのよ、お礼なんか。あかりちゃんはヒカルちゃんのたった一人のお姉さんのような人なんだから。帰りは電話してちょうだい。迎えに来るから」

「いえ、いくらなんでもそこまでは。帰りはわたしが送っていきます」

こんなやりとりの後、あかりはヒカルを部室に案内する。部室と言っても、理科の先生の好意で理科実験室を使わせてもらっているのだが、ヒカルが入ると部員たちが口々に

「かわいいーっ」

と言った。自分たちと同じデザインのセーラー服なのだが、小学校3年生くらいの背丈しかないヒカルなので可愛く見える。ヒカルはうれしそうに笑顔を見せた。

《ヒカルちゃん、あかりちゃんたちは3人ずつ2チームならあわせて6人ですね。では6面打ちしましょう》

《6面打ち?》

《6人、同時に対局するんです》

《そんなこと、できるの?》

《できますとも。あかりちゃんに言ってください》

「あかりちゃん、6面打ちしよう」

「6面打ち?」

「うん、6人同時に対局するの」

部員たちは驚いた。ただ、6人分の碁盤がない。

「いくつあるの?」

「3つ」

ヒカルはちらりと左を見る。

《じゃあ、3面打ちですね》

「じゃあ、3面打ち」

結局、男子チーム、女子チームごとに3人ずつ指導碁を受けることになった。

《ヒカルちゃん、指導碁といっても初心者相手だから、碁を打つだけでなく、多少は説明もしないといけません。なるべく易しい言葉を使いますから、ヒカルちゃんが伝えてくださいね》

《うん、分かった》

こうして、簡単な説明を交えつつ、佐為Ⅱヒカルの指導碁は2時間ほど続いた。この日の後、6月の大会までほぼ週に1回ヒカルは葉瀬中囲碁部に指導碁に出かけることになる。

6月の大会で葉瀬中囲碁部は男女とも2回戦で敗退した。それ聞いてヒカルは残念がったけど、あかりは、「初出場で1回戦に勝てたのはすごいよ。ヒカルちゃんの指導碁のおかげだよ」と言う。それを聞いてヒカルもうれしくなった。

6—2

梅雨が明けて夏になり、またプロ試験の季節がやってきた。

和谷にとって4度目の挑戦。今年は手応えを感じている。この半年くらい院生でトップ争いを演じている。去年に比べ明らかに力が上がっていると実感できる。その理由の一つは、s a iⅡヒカルとの対局であることは自分でも分かる。アキラも和谷を激励する。

「和谷くん、今年こそ受かってくれ」

「うん、もちろんそのつもりさ」

「ボクの率直な気持ちを言えば、これだけヒカルちゃんに鍛えてもらっていて、受からなかったらタダじゃあおかない」

アキラは冗談めかしているけど、目は真剣だ。和谷も真剣に答える。

「もちろんさ。オレの方がもつと感じているよ。こんだけ鍛えてもらっついて受からないようじゃ……」

この頃には、和谷のアキラに対するわだかまりはすっかり消えていた。

「アキラ、今だから言うんだけど、オレ、昔はオマエが嫌いだった。昔というのは、ヒカルちゃんがs a iかどうか確かめにここにやって来た日より前ってこと。碁が強いと鼻に掛けて、傲慢な奴だと思ってた。だけど、ここにヒカルちゃんと対局しに来るようになって、ふだんのオマエを見ていて、オレが誤解してたって分かったんだ。オマエ、ほんとうはいい奴だな。ただ、碁に夢中になって人付き合いに気が回らなかつただけなんだな。そんなオマエから『受からなかつたらタダじゃあおかない』って言われるなんて、うれしいぜ。その期待、ぜったい裏切らない」

「ありがとう」

と言つて、アキラはさらに言葉を継ぐ。

「誤解じゃないよ。ボクは、昔はキミたちが思っているような人間だったんだ。昔というのは、ヒカルちゃんがうちに来る前のこと。それまで、ボクは父や父の門弟たち、つまり年上の人たちに混じって生きてきた。碁の力はともかくとして、そのほかのことでは大人に守られる立場だった。そして、ただ上だけを見て、強くなることだけを考えていた。対局で勝つことだけがボクの人生だった。ヒカルちゃんが来て、ボクは否応なく彼女を守る立場になったんだ。もちろん碁は彼女の方がはるかに強いけど、そのほかのことでは、ボクが助けてあげないといけないんだ。ボクもほんとうの妹のように思つて接してきた。自分より弱い人間のためにできるだけのことをする。そんな中で、ボクも変わってきた。ボクもそれなりに学習したんだよ」

明子はこの夏も二人を海水浴に連れていくことを考えている。去年の夏には「最初で最後の夏」と思っていた。でも、2度目があつてもいいのではないか？ 8月になると本因坊戦の予選が始まるから、行くなら7月のうち。そう思つて行洋に相談した。

「わたしは仕事で行けないが、子供たちを連れて行ってくれ。新潟で

なくてもいいのだが、お前は新潟が気に入っているのか？」

「ええ、去年の思い出があるので」

というわけで去年と同じように新幹線に乗るのだが、何から何まで去年と同じとはいかない。まず、人数が3人なので、3人掛けのシートになる。そして何よりの違いは、ヒカルが有名人になっていること。さらに、ヒカルと一緒にメディアに露出せざるを得ないアキラもそれなりに有名になっている。さすがに、アイドルタレントのような騒ぎにはならないが、好奇のまなざしで見られたり、サインをねだられたりする。ヒカルはあまり気にしていないようだが、明子は気が休まらなかった。

海に着いてからも事情は同じ。

「ねえ、あの二人。塔矢ヒカルとアキラでしょう……」というささやきが、たまに耳をかすめるし、はつきり聞き取れなくても、そんな噂をしあっている雰囲気を感じ取られてしまう。ヒカルはぜんぜん気にしていないけど、アキラは気にしている。そして明子はもつと気にしている。

「ヒカルちゃんは去年と変わらないけど、ヒカルちゃんの周りは変わってしまった。そして、わたしも去年と同じではられない……いや、わたしがそんなこと思っているのはだめ。周りが変わってしまったのなら、わたしだけでも、わたしたちだけでも、変わらないでいなければ。これまでどおりヒカルちゃんに接してあげなければ……」

6—3

8月に本因坊戦の予選が始まる。ヒカルはもちろん参加する。本因坊になるためにプロになったようなものだから。その後、9月に名人戦、11月に棋聖戦の予選が始まる。さらにその他のタイトル戦の予選も順次始まる。ヒカルをどのタイトル戦に参加させるか、塔矢親子はいろいろ考えている。7つのタイトル戦全部に参加させるのは負担が大きいだろう。タイトル戦の負担だけではない。その後の負担もある。

佐為Ⅱヒカルの実力をもってすれば、7つのタイトル戦の挑戦者となり、挑戦手合も勝利して、7冠を達成する可能性もある。ただ、タ

イトルホルダーにはさまざまな雑事、負担が伴う。4冠のタイトルホルダーである行洋は切実にそれを感じる。ヒカルにそれがこなせるかどうか。さらに、タイトルを独占した時の棋界の反応も心配の種だ。単純に7冠達成を祝福してくれるかどうか。かと言って、予選、本戦を勝ち上がって挑戦手合を辞退するというのも、それはそれでタイトルへの侮辱となりかねない。そんなことをするよりは、最初から参加するタイトル戦を絞り込む方が得策だろう。

「本因坊に加えて、3大タイトルのうちの棋聖戦だけに参加するのは、どうでしょう？」

とアキラが提案する。

「3大タイトルなら、もう1つ、名人もあるが、わたしに遠慮するのはね」

と言いながら行洋は笑みを浮かべる。

「ボクとしては、佐為とヒカルとお父さんの名人戦を見たい気持ちがあります。メディアも盛り上がるでしょう。ただ、ヒカルちゃんというか佐為の気持ちとして、お互い切磋琢磨するためのうちの対局ではなく、タイトルを賭けて世間の注目の中で対局するのは、気が引けるのではないですか」

「そうかもしれないな……ただ、参加するタイトル戦を絞るとなると、神の一手を極めるためにできるだけ多くの強者と対局したいという佐為の願いを叶えるのが……」

「ネット碁はどうでしょう？」

「ネット碁？」

「はい。ボクも以前はネット碁を馬鹿にしていたことがあります。ネット碁だけではだめだからプロになりなさいとヒカルちゃんに勧めもしました。ただ、和谷くんの話を知ると、最近ネット碁にもかなり強い打ち手がいるようです。しかも全世界を相手にできます。むしろ、中国や韓国では、日本以上にタイトルホルダー級のプロがネット碁に参加していて、そういう人たちとも対局の機会があります。s a iが『天然天才少女』ヒカルちゃんだと分かってからはなおさらで、プロ、アマを問わず、腕に覚えのあるトップレベルの棋士た

ちが続々とネット碁に参入し、saiとヒカルちゃんと対局しているようです」

行洋はアキラの話をうなずきながら聞いている。

「・・・そうか・・・その話を聞いて思いついたが、中国や韓国の棋士と対局するのなら、国際棋戦に参加するという手もある。春蘭杯とかLG杯とか三星火災杯とか」

「ああ、それもありますね。国際棋戦に参加するのなら、日本の棋界もこぞって応援してくれるでしょうし」

「参加資格を得るためにそれなりの実績が必要だが、それは、ヒカルさんならすぐだろう」

行洋の言葉は本人の予想よりはるかに早く実現した。アキラの語るとおり、日本の棋界よりむしろ中国や韓国の棋界においてネット碁のsaiは注目されており、その「正体」である塔矢ヒカルの、セーラー服姿ではなく、棋力にも熱い関心が寄せられていた。このような背景があつて、棋聖戦の予選が始まる直前の10月下旬、行洋と交流のある韓国棋界のトップ徐彰元ソ・チャンウォンから、翌年2月に予定されているLG杯決勝戦に関連するイベント「エグジビジョン対局へのヒカルの出演を打診された。具体的には、決勝5番勝負の1局目の前日と中日（なかび「1局目と2局目の間の日」）に、韓国の中堅と若手を代表する棋士と対局する。

ヒカルは、

「韓国に行くの？　じゃあ、飛行機に乗るんだね」

と気楽に答える。佐為とヒカルにとつて対局を断るといふ選択肢はない。行洋は提案を受諾すると返事した。

《本因坊戦といい、今日、行洋殿からお話のあつた韓国での対局といい、これから日本の、世界の最強の棋士たちと打ち合えるのですね。いよいよ神の一手への本格的な探求が始まりますね》

「かみの一手？」

ヒカルは問い返す。

「佐為が神の一手の話をしてるの？」

アキラはヒカルに問う。

「うん……かみの一手って、なに？」

「それは……」

アキラは佐為の代わりに説明してよいものかと迷ったが、佐為がヒカルに話している様子はないので、自分の言葉で説明する。

「まるで神様が打つような、最善の一手、その場面でこれ以上の手はあり得ないという一手だよ……もちろん、たとえ話だよ。人間は決して神になれないのだから、ほんとうの意味で神の一手を人間が極めることはできない。ただ、それを目指して努力を続けるということだよ。無限の彼方にある目標……ヒカルちゃんは北極星って、知ってる？」

ヒカルは首を振る。

「真北の空にある星だよ。その星を目指して行けば間違いなく北に向かえる。だけど、いくら進んでも北極星に届くことはないんだ。神の一手も同じようなものだよ。それを目指すことはできる。でも届くことはない」

アキラは、いつの間にかヒカルに説明するというより、自分に語りかけるような口調になっていた。そんなアキラの説明を佐為も静かに聞いている。

「確かにそのとおりです。アキラの言う通りです。でも……人の身で神の境地に届くはずはないと分かっているけど、それでもわたしは「神の一手」という言い方にこだわるのです」

それからほどなく、和谷がプロ試験合格を知らせに来た。ヒカルもアキラもよろこんだ。その時居合わせた明子も。和谷は思いのたけを語る。

「これでやっと、オレもスタートラインに立てた。これからやっと、アキラを追いかけられる……ほんとうはs a i l ヒカルちゃんを追いかけると言いたいんだけど、それは自分でも言い過ぎだと分かっている。オレはまず、アキラを追いかける。オレはアキラをライバルと思っているよ。今のところ、オレが勝手に思っただけだけど、いつかきつと、アキラに『和谷はボクのライバルです』と言わせるんだ」「うん、待ってるよ」

アキラは明るく励ますような口調で答える。

「ボクは、ヒカルちゃんを必死で追いかけてるんだ。いつか追いつき、追い越したい。いつなるか分からないけど、いつかはきつと、と思ってる。そんなボクを、和谷くんは必死で追いかけてるんだね」

このアキラの言葉を聞いて、和谷はつぶやいた。

「・・・ということは、いつの日か、ヒカルちゃんに追いついたアキラにオレが追いついたら、オレはヒカルちゃんつまりsaiに追いついたことになるのか・・・」

こんな若い二人のやりとりを、佐為は優しい眼差しで眺めている。ヒカルは、二人の会話の深い意味は分からないまま、自分に親しい二人が仲よさそうに語り合うのをうれしそうに眺めている。和谷は、声に出さず心の中でつぶやきを続ける。

「オレから見ると、ヒカルちゃんだけじゃくアキラだってまぶしいほど才能に恵まれている。そんな二人をオレが努力でどこまで追えるか・・・追えるだけ、追ってみせるさ」

もちろん、大手合でもタイトル戦予選でも連勝を続けるヒカルとアキラを追いかけるのが容易でないことは和谷も分かっている。アキラは年内最後の公式手合となった名人戦予選で倉田六段に敗れ、連勝記録が途絶えたが、ヒカルは連勝のまま年を越し、1月も負け無しで連勝記録を伸ばしている。新人がどこまで連勝記録を伸ばすのか、棋界の誰もが期待と一抹の恐れを抱きながら見守っている。そして2月になった。

6 | 4

L G杯決勝戦のエグジビション、アキラも行洋も手合の日程にぶつかり、明子が付き添うことになった。ヒカルは去年の新初段戦の時と同じセーラー服にコート姿。生まれて初めて飛行機に乗るのでうきうきしている。佐為も、これまで地上から見上げるだけだった飛行機に初めて乗ることになり、好奇心がそそられる反面、不安でもある。《ほんとうに、あんな大きな鉄の塊が空に浮くんですか？ 落ちないんですか？》

《だって、これまで何度も空を飛んできるところを見てるじゃない》

《それはそうなのですが、実際に自分が乗るとなると、やっぱり心配で……》

「おかあさん、サイが飛行機に乗るのを怖がってるよ」

《いや、怖いんじゃないやありませんよ。そんな、怖くはありませんけど……》

そんなヒカルの話にみんなが和んだ。やがて出かける時間。

「じゃあ、行ってきますね。家政婦を派遣してもらおうよう手配してありますから、男二人でも飢え死にする心配はないでしょう」

「ボクだってトーストと目玉焼きくらい作れます。以前、ヒカルちゃんに作ってあげたし」

「うん、アキラちゃんの目玉焼き、おいしかった」

とヒカルがアキラの肩を持つが、

「しかし、そればかり1週間も食べさせられたら、わたしが音を上げるね」

と行洋がつぶやいた。もちろん、家政婦はすでに手配済みだから、それは余計な心配なのだが。

ヒカルと明子は日暮里でスカイライナーに乗り換え、成田に向かう。新幹線ほどではないが、かなり速い。佐為は、飛行機への不安を忘れてヒカルと一緒にしゃいんでいる。飛行機に乗ってみると、乗る前の不安を忘れて佐為は空の旅を楽しんでいるようだった。

《いつもは下から見上げる雲を上から見下ろすとは、夢にも思いませんでした》

とか

《もともと囲碁は唐土もろこしから渡来したものだ。彼の地でも盛んなのでしようね。どんな者たちと対局するのか、楽しみです》

などとヒカルに話しかける。佐為が機嫌がいいと、ヒカルも上機嫌だ。

成田からほぼ2時間半で金浦空港に到着。「塔矢ヒカル様」というカードを掲げて待っていた通訳係に出迎えられ、すぐにソウル市内のホテルに向かう。LG杯決勝戦が行なわれるホテルであり、関係者の宿泊先になっている。ホテルに着いて1時間ほどしたら、LG杯関係

者がスケジュールの確認にやって来た。翌日10時から韓国棋界の中堅クラスを代表する安大善アン・テソンと対局。翌々日は決勝戦第1局を検討室で観戦。その次の日は10時から若手の代表である高永夏コ・ヨンハと対局。その次の日は決勝戦第2局を検討室で観戦。翌日のお昼頃、日本に帰る。

エグジビジョン対局の会場は満員だった。壇上にセーラー服姿のsai||ヒカルが現われると、拍手と歓声がやまなかった。いつまでも鳴りやまないので、拍手と歓声を浴びながら対局が始まった。

安大善は、行洋なみとは言わないまでも、森下や緒方くらいの棋力があると佐為は実感した。もちろん、負けはしない。観衆は、小柄なセーラー服姿の女の子がネット碁の不敗伝説を背負うsaiその人であることを知ってはいるが、それでも韓国でもトップレベルの棋士をみごとな石の流れで追い詰め、投了させるプロセスを信じられないことのように見守った。

翌日の検討室にもその余韻は残っていて、検討室で決勝戦を観戦している人たちは時おり、対局者が長考している時など、次の一手はどこに打つのが良いと思うかヒカルに尋ねることもある。ヒカルの指摘は的確で、その場面での最善の一手と思える。対局者がそこに打ち込むと、「やはり」というような反応であり、別の所に打ち込むと、どっちの方が適切な手なのか観戦者の間で議論になることもある。

その翌日に対局した高永夏は、安大善には及ばないが、佐為は若さ特有の伸び盛りの気迫を感じる。アキラと同じくらいか、ひよつとしたらアキラを少し上回るか……1年もしたら大善を追い抜くかもしれない。投了した時、永夏は前々日の大善と違い、悔しさをストレートに態度で表現した。そして通訳を介して、悔しさを伝える。

「eternal summerというネット碁のアカウント名を覚えていますか？ それがわたしです。これまでsaiと3回対局している。もちろん、3回とも負けているけど、差は徐々に縮まっていたと信じていた。今日こそはと思っていた。だけど、及ばなかった。いつかはきつと、君を倒す。これからは、それを目標の1つにする」ヒカルはただニコニコしながら聞いている。佐為は真剣に受け止

めた。そうしてもう一人、明子は “eternal summer” という言葉に反応した。

「……ああ、「永遠の夏」永夏」ということね」

そして、「永遠の夏」という言葉から、あの新潟の海が連想された。去年ではなく、おととしの新潟の海、「最初で最後」と思った夏の日。「ほんの一年半前のことなのに、ずっと昔のように感じてしまう。あの夏の日がわたしにとっては永遠の夏なのかしら……ヒカルちゃんにとっても、アキラにとっても……」

L G 杯決勝戦 2 局目。ヒカルは検討室で観戦するのだが、永夏もやって来た。永夏は関係者として検討室への出入りを認められているのだが、今日は観戦ではなくヒカルに対局を申し出るのが目的だった。検討室での対局とは異例のことだが、ヒカルはまったく気にする様子もなく、受け入れた。

碁盤を出して打ち始めた二人を、周りの者たちは、決勝戦の石の配置を碁盤の上に再現しているのだろうと思っていたが、本人たちの対局だと分かって驚いた。ちゃんと観戦すると、決勝戦よりむしろ興味深いほどで、一人、二人とギャラリーができた。ギャラリーたちも、決勝戦の観戦もおろそかにはできないので、モニター画面を見ながら、盤面も見るといいう忙しいことになった。形勢は明らかにヒカルが優位。ギャラリーたちの中にはエグジビション対局を見た者もいたし、見てなくてもネット碁の sai は知っていたが、実際に目の前でその対局を見ると、強さを再認識した。

決勝戦は打掛けになったが、二人はそのまま対局を続けている。ギャラリーたちは食事に出るのをためらっている。結局、ルームサービスを頼むことになった。運ばれてきた食事の皿を手に持ち、立って食べながらヒカルと永夏の対局を見ているギャラリーたちを見て明子は「まったく、どの国にも碁バカはいるものだわ」と思う。

打掛けが終わり決勝戦の午後の部が始まる頃、永夏が投了した。永夏は腕を組み、唇をかみながら、自分が投了した盤面を見ている。そんな永夏にヒカルは気軽に声を掛けた。

「ヨンハさん、きれいだね」

通訳係が敢えて通訳しようとしないうるヒカルのせりふを、「彼女は何と言ってるんだ」とせつついて通訳させた永夏はちよつとあきれたように苦笑いした。

「こんな場面で言うせりふではないだろう」

見ると、明子を含めほかのみんなも苦笑いしている。その場を繕うような明子のせりふ

「ヨンハさんもヒカルちゃんもお腹がすいたでしょう。決勝戦を見ていたいのなら、あなたたちもルームサービスを頼む？」

これは、確かにこの場面にふさわしい。

その日の夕方、ヒカルと明子は、夕食をともしたLG杯事務局の担当者から

「まだ正式に決まってるはないが、今年5月末から始まる予定の来期LG杯に塔矢ヒカルをシード棋士として招待する話が出ている。それが日程的に難しいなら、今年と同じようにエグジビジョン対局に招待してもいいという話もある。正式に招待したら、受けてもらえるか？」

と打診された。佐為は大喜びで

《ぜひ、ぜひ、受けましょう。ヒカルちゃん。すばらしいことじゃありませんか。日本に戻ったら、アキラくんにも行洋殿にも、この話ぜひ受けるよう頼みましょう》

《うん》

ヒカルは佐為の喜ぶ姿を見て、そう答える。もちろん、この会話は相手にも明子にも聞こえない。明子は、帰国して行洋たちと相談しないと答えられないと常識的な返事をした。

帰国した明子から話を聞いた行洋もアキラも、佐為とヒカルから頼まれるまでもなく、招待を受けたいとは思いますが、本戦に出るとなると、予選と準々決勝・準決勝そして決勝、1年のうちに3回、1週間ほど韓国に滞在することになる。日本での手合やタイトル戦の日程との調整が難しいので、今回と同様、エグジビジョン対局だけにする方が無難だろうということになった。

3月には、LG杯エグジビジョン対局の評判を聞きつけたらしい中

国の春蘭杯の事務局から同様の提案があつたが、時期が翌年5く6月とのこと。本因坊戦と重なりそうなので、アキラは行洋とも相談して残念ながら辞退した。それにしても、s a i i i ヒカルの名前は韓国、中国にも広まっていることを実感させられた。

春蘭杯のことを知らされていないヒカルと佐為は、3月になれば「小さな公園」の梅の花の方に関心が向く。今年も、紅梅と白梅がきれいな花を咲かせた。去年と同じようにヒカルはアキラに花を髪に挿してもらう。ヒカルの笑顔は佐為の心もほころばせるけど、それと同じ時に佐為は我が身のない悲しさを感じ、アキラをうらやましく思った。「実体を持たぬわたしでは、ヒカルのためにしてあげられることにも限りがある。アキラにとってはたやすいことでも……」

7：兆（きざし）

7-1

4月4日、和谷の初手合。相手は、いつかはライバルと目指している塔矢アキラ。「今のところ、オレが勝手にライバル意識を燃やしてただけだけど、いつかきつとアキラにオレをライバルと認めさせてやる」と思いながら、和谷は家を出る。

アキラも元気に出かけていく。それを見送る行洋と明子とヒカル。その直後、行洋とヒカルはリビングルームのソファでくつろぎ、明子がキッチンでお茶をいれている時、行洋がゆっくりとヒカルの方に倒れてきた。最初、ヒカルはコーヨーがふざけているのだと思っただけだ。

「コーヨーさん、コーヨーさん」

ヒカルは遊びの相手をしてもらうように話しかける。だけど返事はない。さすがにヒカルも何か変だと思って明子を呼んだ。明子は行洋の様子を見て顔から血の気が引く思いがしたが、すぐに119番に電話した。

それからは、慌ただしかった。救急隊の到着。その場での気道確保、自発呼吸と脈拍の確認、ルート（静脈）確保、受け入れ先の病院を確保するための無線のやりとり。やがて、搬送先が決まり救急車は出発する。少なくとも数日は入院するはず。明子は入院に必要な最小限の物品を用意してタクシーで向かうことにする。その時になって、ヒカルをほったらかしていたことに気づいた。

「ヒカルちゃん……」

ヒカルは、詳しいことは分からないまま、何か重大なことが起きたと感づいている。

「コーヨーさん、どうしたの?」

「行洋さんはね……疲れて、ちよつとお休みすることになったの」「どこに行ったの?」

「病院よ」

「コーヨーさん、病院なの? 注射とかされるの?」

「うん、注射されるかもしれないね。でも、心配しないで。行洋さんは強い人だから」

「うん」

そんなヒカルの手を明子はしっかりと握りしめる。そして二人してタクシーで搬送先の病院に向かった。

病院に着き行洋の容態を確認してから、明子は棋院に連絡した。アキラはもちろん対局中。

「・・・はい、命に別状はないとのことですよ。アキラには対局が終わるまでは知らせないでください。あの子の気持ちを動揺させてはいけませんから。それに対局を中断してこちらに来て、行洋の容態が変わることはありませんから。先ほどもお伝えしたとおり、命に別状はありません。それより、和谷さんの初手合をきちんと終わらせてやってください」

初手合は午後の早い時間に終わった。棋院の職員から事情を聞かされたアキラは取るものも取りあえず病院に向かう。

息を切らせて駆けつけたアキラに明子が状況を説明する。

「心筋梗塞の初期だったんだけど、もともと重大な状態ではなかったのと、対応が早かったので、命に別状はないの。もうじき、エマージエーション・ルームから一般病室に移されることになってます」

明子は、これから棋院関係者などの見舞いが殺到することを考え、一般病室だと同室者に迷惑がかかるだろうということで、個室を手配していた。

エマージエーション・ルームから病室に移される時、行洋はまだ麻酔が残っていてうつらうつらしていた。そんな行洋を載せた搬送用ベッドの後ろに主治医と看護師その他の医療スタッフ。その後ろに、明子とアキラ、その二人に挟まれ二人の手をしっかりと握っているヒカル。

病室に移ってしばらくして行洋は麻酔から覚めたが、まだぼんやりしている。最初に視界に入ったのは、自分を注意深く見下ろしている見知らぬ顔。その向こうに明子、アキラ、そしてかろうじて顔だけ見えるヒカル。

見知らぬ顔が

「塔矢さん、目が覚めましたか？」

と問う。行洋はうなずく。それから、その見知らぬ顔が状況を説明し始めた。どうやら、それが主治医らしい。主治医の説明を聞いているうちに、行洋は意識がすっかり回復した。行洋の意識が戻り、特別な異常のないことを確認して、主治医はベッド脇から離れる。明子とアキラは医師について行き、スイートルームのような個室病室の病室に隣接する控え室に行き、そこでさらに主治医から説明を聞き、いくつかの質問に答えてもらった。それも終わると棋院などの関係者に連絡を取り始める。

ヒカルは一人、病室に残った。病室のソファアではなく、ベッド脇に小さな椅子をもつてきてそこに腰掛け、心配げに行洋を見ている。

「コーヨーさん」

と呼びかける。

「ヒカルは何をすればいいの？」

真剣な眼差しで自分を見つめるヒカル。その視線を行洋は受け止める。その一途な真剣さが行洋の心に響く。

「ヒカルさんは何もなくていい。ただ、ここに、わたしのそばにいてくれるだけでいい」

それは行洋の実感だった。ただ、彼女が自分のそばにいてくれる、それだけで心が温まり、回復の気力が増すように思える。

「うん、じゃあヒカルはずっとここにいろよ」

その言葉どおり、ヒカルは夕食もベッド脇の椅子に座って摂った。そして夜も更けていく。

「ヒカルさん、もう夜も遅い。これまでずっとそばにいてくれて、わたしもだいぶ具合が良くなった。ヒカルさんもお休みなさい」

「うん、分かった。明日の朝また来るね」

ヒカルは控え室のベッドに明子と一緒に寝る。アキラは家に帰り、翌朝戻ってくることにする。

翌朝、起きてすぐにヒカルはコーヨーさんのそばに来て、見守り続けた。小さな無力な女の子。その子が行洋を何かから守れるわけで

はない。それでも、行洋はヒカルがそばにしていることがうれしかった。「この子は純粹にわたしのことを心配してくれている。わたしが5冠のタイトルホルダーだからとか、日本の棋界を担う重要人物だからということではなく、ただただ彼女の大事なコーヨーさんだからという、それだけの理由でこんなに心配してくれている」

「ヒカルさんはいい子だね」

ヒカルはうれしそうに笑みを見せ、それからちよつと恥じらうようにうつぶむいた。主治医の診察の時も明子と一緒に付き添う。付き添っても説明が分かるわけではないが、それでも一緒にいたい。

お昼ご飯時、明子はアキラとヒカルに声をかける。ヒカルは珍しく明子に逆らう。

「わたしはずつとここにいます」

「ヒカルさん、キミの気持ちはうれしいけど、ご飯も食べないとキミの体に良くないよ」

行洋に優しく諭され、ヒカルは下を向く。そんなヒカルにアキラが声をかけた。

「じゃあ、ボクたちが食事の後に病院の売店で何か買ってきてあげよう。サンドイッチとか牛乳くらいはあるだろう。その間、お父さんを見守ってあげてね」

「うん！」

ヒカルはうれしそうに答える。

明子とアキラは出て行く。行洋はベッドから手を伸ばした。掛け布団の外に出た行洋の手をヒカルは握る。コーヨーさんと手をつなぐのは、初めてかもしれない。ヒカルは明るい笑顔で行洋を見る。行洋は慈愛を込めた眼差しで見返す。

この日は家族以外の面会は謝絶にもらった。おかげで、時おり看護師が容態を見に来ることはあるが、弟子たちや来客に邪魔されない親子水入らずの時間を持てた。ヒカルがお昼のサンドイッチを食べ終わったのを見計らって、行洋は病室のソファに腰掛けている明子とアキラそしてベッド脇に座っているヒカルに話しかけた。

「今朝の主治医の説明を聞いていたから分かっていると思うが、心臓

の状態そのものは心配ないようだ。ただ、今後同じようなことが起きないよう仕事を減らすことを勧められた。自分でも、昨年暮れに得た王座を含め5冠のタイトルホルダーというのは荷が重いと実感している。碁を打つことそのものは、少しも負担とは思わないが、それにまつわる雑事が面倒だ。防衛戦は基本的に地方での対局で、1局ごとに移動に丸2日がつぶれてしまう。前日のレセプションにも顔を出さないわけにはいかない。それは、今のわたしにとって、碁を極めるための足かせと覚えてしかたない」

明子とアキラはこれから何が語られるのか、興味と不安を込めたような視線を行洋に向ける。ヒカルも、そんな二人に感応されたのか心配げな表情になった。

「それと、最近のヒカルさんあるいは佐為のことからも痛感したのだが、碁は日本だけのものではない。中国や韓国でも盛んだ。むしろ日本より盛んなくらいだ。それらの国の棋士たちとも碁を打ちたいと思っている。そのための時間がほしい……実を言えば、韓国の徐彰元先生からは、ヒカルさんでなくわたしが来年のLG杯本戦に参加しないかと打診もされている。まだ回答は留保しているが……これらもろもろのことを考えて、いくつかタイトルを返上しようと思っている。最初はすべてのタイトルを返上することも考えたが、日本の棋界から一切身を引くのも心残りだ。それで、名人位は今のままとして、ほかの4つのタイトルを返上しようと思っている」

しばらく、沈黙が続いた。それを明子が破った。

「わたしたちにお話になるといふことは、あなたの中で十分に考え抜いた末のことでしょう。それであなたが決めたことなら、反対はしませんよ」

この明子の言葉で、場の緊張が解けた。ヒカルはそれを敏感に感じ取る。

「コーヨーさん、よかったね」

その言葉を聞いて行洋の顔が和んだ。行洋は、黙ったままのアキラに語りかける。

「わたしも佐為にならって神の一手を極めたい。そのために、今より

少しばかり自由になりたいということだ」

「もちろん、ボクもお父さんの選択に反対はしません」

そう答えながらも、アキラは「神の一手」についての自分の考えも述べた。それは人間には到達できない無限に遠い目標であること。行洋は静かに耳を傾ける。

「もちろん、それは分かっている。人間の分際で神の領域に手が届くなどとうぬぼれてはいない。お前の言う通り、北極星を目指して進むということだ」

その会話を佐為は静かに聞いている。

「確かに、わたしも、行洋殿も、アキラも、神の一手に到達はできないのだろう。あくまで、それを目指して努力を続けること、それが神ならぬ人にできること。しかしそれなら、わたしはいつまでこの地上に留まるのだろうか。無限に居続けることはできないはず。霊はいつかは成仏すべきもの。わたしは、いつ、どのような機会に成仏するのだろうか?・・・」

翌日から、見舞客が続々とやって来た。その中でも、棋界の関係者、自分の後援会の関係者などに、行洋は内々のこととしてタイトル返上の決意を伝える。聞かされた者は誰もが驚き、行洋を翻意させようとする。そんな時、ヒカルは相手を見つめる。その視線は、相手に威圧感や圧迫感を与えるものではない。ただ素朴な澄んだ眼差し。そして

「コーヨーさんが決めたんだよ」

とだけ語る。ほかのことは言えない。ヒカルにとって、相手を説得する理路整然とした議論を組み立てることは不可能だから。しかしヒカルの素朴な澄んだ視線と単純な言葉は奇妙な説得力を發揮する。それを聞く者は、なぜか行洋に翻意を迫る気持ちが鈍る。そんな場面に何度か立ち会ってアキラは思う。

「ボクはヒカルちゃんを守っている。少なくとも自分ではそう思っている。そんなボクを父はより大きな力で守ってくれる。そしてそんな父を、ヒカルちゃんは必死で守ろうとしている。そして実際、守っている」

そして明子も思う。

「ヒカルちゃん、あなたは佐為の力で碁を打っただけではない、それと同じくらい素晴らしいものを持っているのね。ただ守られるだけの存在ではないのね」

7—2

行洋が明日退院するという日曜日。ヒカルは折り畳み式のマグネット碁盤を膝の上に置き、黒石と白石を並べて遊んでいる。もともと、見舞いに来た弟子の一人が、ベッドで身を起こして退屈しのぎに棋譜でも並べられるようにと持ってきたもの。それを借りてヒカルが遊んでいる。脇で見ている行洋は、ヒカルが棋譜を並べているのではないことは分かる。黒と白を交互に打ってはいるが、とても意味をなした打ち方ではない。ただ、黒石と白石を交互に、思いつくままに盤面に置いていくだけ。それでも、黒白あわせて100個くらいの石が並んだところで、ヒカルは手を止め、碁盤を眺めている。

「ヒカルさん、何をしてるのだね？」

「碁石を並べてるの。きれいだよ。黒と白の模様。コーヨーさん、見たい？」

「うん、見せてもらおうか」

その返事を聞いてヒカルは碁盤を行洋の方に差し出す。意外なことに、ちゃんとした棋譜になっている。白の52手目まで。行洋は「黒の初手はここで、それに白が応じてここに打って・・・」というふうに、その棋譜ができあがる筋道をたどることができるとは。しかし、ヒカルがそのような順番で石を置いていったわけではないことは、先ほどから見ていて分かっている。ヒカルは、行洋の目にはまったく適当にでたらめに黒石と白石を並べたに過ぎない。だけど、104個の石が配置された時点では、打ち手の筋道が分かるちゃんとした棋譜になっている。ただ、相手に囲われた石が剥がされていなくてそのまま残されているのがふつうの棋譜と違っている。

「ヒカルさん、この続きはあるのかね？」

「うん」

そう言っただけヒカルはまたさっきのように、行洋の目にはでたらめに

見えるやり方で黒石と白石を並べる。石の数が200をいくつか越えたあたりで、ヒカルの手が止まり、できあがった黒白模様を眺めている。行洋が数えてみると、黒の124手目。そしてまた、ちゃんとした棋譜になっっているが、明らかに白が優勢。行洋は黒の53手目からの筋道をたどる。しかし、途中の白の86手目で行き詰まった。「行き詰まった」という言い方は適切でないかもしれない。行洋として、「白の86手目はここ」と思える場所はある。ただ、そこには黒石が置かれている。そこ以外に白を打ち込むべき場所が見つからない。この局面でどこに白を打ち込めば、黒の124手目にできあがったような白に優勢な棋譜ができあがるのか？

「佐為、君には分かるかね？ 白の86手目」

しばらくして、

「サイも考えてる」

とヒカルが答え、それからさらに5分ほどして、ヒカルが碁盤の1点を指した。

「そこか？・・・」

行洋は驚いた。それまでの攻防とはまったく無関係に思える場所。なぜ、この時点でそこに白が打ち込む必要があるのか？

「では、黒の87手目は？」

ヒカルがまた別の場所を指す。行洋は腕組みする。

「その次の白の87手目は」

ヒカルが指した場所を見て、行洋は納得した。

「そういう筋道か！」

そこから先は黒の124手までほぼ必然の一本道。

「しかしそれにしても、あの白の86手目は？・・・佐為も分かっていたはずだ。分かっていれば、わたしの問いに即答したはずだから。そして、ヒカルさんも分かっているはずだ。打ち手の順に石を並べてはいなかった。まったく思いつくままのように黒石と白石を交互に並べていたのだから。しかし、できあがった棋譜は驚くような意外の手を含みながらもきちんとした棋譜になっている・・・」

行洋はヒカルを見つめる。

「ひよつとして、ヒカルさんはほんとうにサヴァン症候群なのか？
これがサヴァン症候群の特殊能力なのか？ それとも、ヒカルさんは
ほんとうに天才なのか？・・・佐為、君も同じことを考えているの
か？」

そのとおり。行洋の心の中のつぶやきは聞こえないまま、佐為も同
じようなことを考えている。

「ヒカルちゃん、あなたはひよつとして、ほんとうに天才？・・・た
だ、あのような石の並べ方では、実際の対局にはその天才を活かせな
いのですが・・・」

こんな二人の思いなどまったく頓着せず、ヒカルは
「続きを並べていい？」

と行洋に聞く。行洋はできれば、ここで終わらせて、この盤面を夕
方にやってくるはずのアキラに見せたかった。だが、これほど楽しそ
うに遊んでいるヒカルの邪魔をするのは忍びなかった。

「ヒカルさん、あと1分待ってくれ。それと、佐為に尋ねてほしい。
いったいどうやって白の86手目を思いついたのか」

行洋は盤面を1分間凝視して棋譜を記憶した。その間にヒカルは
佐為と話をしている。

《ヒカルちゃん、それは、黒の124手目の棋譜が分かっていたからで
す。黒の124手目にそのような棋譜ができるためには、白の86手
目はどこに打たなければいけないか、さかのぼって考えたのです》

ヒカルにとって、この佐為の説明はそのまま伝えるには長すぎる。

「サイがね、『黒の124手目のきふが分かっていたから』って言うつ
て。さかのぼって考えたって」

行洋にはこれだけで十分だった。

「確かに、黒の124手目にこうなると分かっていたらこそ、そこから
さかのぼって見つけることはできるかもしれない。分かっているだけ
れば、単純に黒の86手目までの棋譜を示されて、次の白の手を問わ
れたら、佐為といえども先ほどの手は思いつけなかったというわけ
か」

「ヒカルさん、ありがとう。その先を続けていいよ」

それからヒカルは最後まで盤面を黒石と白石で埋め尽くし、自分で作った黒と白の模様を満足げに眺めている。それもまた立派な棋譜になっているが、今回は行洋も最後まで打ち手の順を追うことができた。

夕方になってやってきたアキラに行洋は黒の124手まで石を並べておいた棋譜を見せた。

「初手から追っていけるかね?」

アキラは追ってみせたが、途中で行き詰まった。

「白の86手目で止まってるのだろうか?」

「そうです」

「……だよ」

と行洋が示す。アキラは「まさか!」という顔をしている。その反応に笑みを浮かべて行洋はそれに続く黒の87手目、白の87手目を示す。ここまで示されてアキラも納得した。それから先の展開は読める。

「この棋譜は誰のいつの棋譜ですか?」

と問うアキラに行洋は昼間のできごとを語った。

翌日、行洋は退院したその足で日本棋院を訪れ、4タイトル返上を正式に通知した。

メディアには行洋のニュースが溢れた。おかげでしばらくヒカルは霞んだ。そして、行洋の話題が過ぎた後も、ヒカルへの注目は以前ほどには戻らなかった。プロになって丸1年が経過し、世間もヒカルの存在に慣れてきた。慣れてしまったもの、当たり前前のものはニュースにならない。

ニュースのネタにならない、それはヒカルにとってはどうでもいいことだった。そして塔矢家の人たちにとってはむしろありがたいことだった。

塔矢家の人たち、とりわけアキラにとって、メディアでの父やヒカルの露出度よりはるかに気になることがある。退院の前日にヒカルが並べたという棋譜。その翌日からアキラはヒカルに時おり

「ヒカルちゃん、例の碁石を並べる遊びはしないの?」

と聞くが、ヒカルはそっけなく首を振り、

「対局しよう」

と答える。もちろん、それも悪くはないのだが……。
そんなことが10日ほど続いた後、ヒカルが

「うん、じゃあそうする」

と言つて碁盤に石を並べ始めた。見てみると、確かに行洋が説明したとおり、めちやくちやとしか思えない並べ方をしているが、途中でヒカルが手を止めて碁盤を眺めているので、それを見ると、その時点ではちゃんとした棋譜になっている。アキラも初手からの手順を復元できる。それからまたヒカルが石をランダムとして思えないやり方で置き始め、そして2度目の小休止。ここまでも、アキラは手順を追えた。3度目の小休止。白の148手目まで。この段階で黒が明らかに優勢になっている。その棋譜を復元しようとして、アキラは黒の113手目で止まってしまった。

「アキラちゃん、黒の113手目を考えてるの？」

「うん、そうだよ。よく分かったね」

「サイがそう言ってるの。サイも考えてるんだって」

そうやってアキラと佐為が考えている最中にヒカルが

「ねえ、続きをやっちゃだめ？」

と問う。

「えっ……いや、あとちよつと待って。ねっ、あとちよつと」

「うん。いいよ」

ヒカルは別に機嫌を損ねたふうもなく気楽に答える。

アキラは考える。行洋の「その場の攻防とは何の関係もないと思える突拍子もない場所への意想外の手」という言葉がよみがえる。

「あつ、分かった。ここだー」

アキラは、盤上の黒石を示し、続いて、別の場所の白石、そして黒石を示す。

「佐為、こうでしょう？」

アキラはヒカルの左にいるはずの佐為に問いかける。

佐為は驚いた。

《そうです。確かに、そのとおりです。アキラさん、わたしより先に見つけましたね》

「アキラちゃん、サイがびっくりしてるよ。サイより先に見つけたっ
て」

アキラは喜びを素直に笑顔で表した。そんなアキラにヒカルが問う。

「じゃあ、続きやっていい？」

「うん、いいよ」

佐為は心の中でつぶやく。

「アキラさん、あなたはヒカルちゃんの心をわたしよりもよく分かっているのですか？ わたしよりもよく分かるようになったのですか？ ヒカルちゃんの天才をわたしよりもよく理解できるのですか？」
心の中にアキラへのかすかな嫉妬が芽生えたことを、佐為は自覚していない。

アキラは今日の体験を行洋に語る。

「間違いなく、佐為ではなくてヒカルちゃんが並べてるんです」

「確かにそうなのだが、ヒカルさんも分かって並べているわけではない。それは見ていて分かるだろう」

「そうなんです。どうも、ヒカルちゃんの頭にはいくつかの段階ごとの棋譜が思い浮かんでいて、その棋譜になるよう黒と白を交互にランダムに並べているようです。それが惜しいというか。あれでは実戦に使えません」

「ヒカルさんが何も分からないままに作った棋譜から我々が学んで、我々が実戦に活用する、ということだな」

「そうですね。それにしても、あのように攻防の局面にとらわれず19路の盤面全体を見渡して、対局の流れが全体として一番有利になる場所に自分の石を打ち込むとは、これこそ神の一手かとさえ思います」

こう答えながら、アキラはヒカルとの対局でも、他の相手との対局でも、あんな突拍子もない意想外の手を試す勇氣はまだ持ち合わせていなかった。

それから1週間ほどして、またヒカルは一見むちゃくちゃな順序で黒石と白石を並べて棋譜を作った。できあがった棋譜はみごとなものだった。それを見てアキラは思わず、

「きちんとした手順で並べられるなら、ヒカルちゃんも自分の碁を打てるようになるかもしれないに」

とヒカルに語りかける。ヒカルはアキラの言葉の意味を理解できないが、横で聞いている佐為は理解できた。

「ヒカルちゃんも自分の碁を打ちたいと思ってるのだろうか？」

虎次郎のことが佐為の心をよぎる。

ヒカルが一人になった時、佐為は問いかけた

《ヒカルちゃん、自分の碁を打ちたいと思わないのですか？ 自分で碁を打ちたいとは思わないのですか？》

ヒカルは不思議そうな表情で答える。

《だって、わたし、自分で碁を打ってるんだよ。自分で石を置いてるんだよ》

「あつ、いや、そういう意味ではないのですが……」

「自分の碁を打つ」という言葉の意味をヒカルに分かるよう説明できないまま、佐為は質問を変える。

《ヒカルちゃん、今のままで満足ですか？》

ヒカルは、げげんそうな顔をする。

《わたし、楽しいよ。黒石と白石を並べるときれいな模様になるんだもん。それを見るのは楽しいよ。それに、サイは碁を打ってる時が一番きれいだもん。きれいなサイを見るのも楽しい》

そう答えられると、佐為はそれ以上の質問ができない。

「ヒカルちゃんは、「碁を打つ」、「自分の碁を打つ」ということの意味が分からないのだろう。そんなヒカルちゃんに甘えて、わたしは自分の打ちたい碁を打っている。ヒカルちゃんはそれを「楽しい」と言ってくれる。それなら、それでよいのか？……」

自問への自答は出ない。

7—3

プロ入り2年目。ヒカルは大手合でも本因坊戦と棋聖戦の予選で

も勝ち続けている。もはやヒカルの連勝はさほどニュースにならない。「どこまで連勝を伸ばすか」は確かに関心の的ではあったが、勝つて当たり前という気持ちにメディア関係者に行き渡っている。もしもヒカルが負けたらビッグニュースだが、勝ってもニュースにはならない。それでも、ヒカルへのイベント出演の依頼は相変わらず多い。アキラと行洋の配慮で参加するタイトル戦を本因坊戦と棋聖戦に絞っているため、ほかの若手棋士に比べスケジュールに余裕があるのも、イベントを開催する側としてはありがたい。そして会場にヒカルが姿を見せれば、以前と同じように歓声が起こる。ただ、7つのタイトル戦すべての予選に参加しているアキラの都合が付けにくくなり、明子が同行することが増えた。こうして、この年も暮れていった。

ヒカルとアキラにとつてのプロ3年目の年が明けるとすぐに棋聖戦の挑戦手合が始まる。7番勝負。先に4勝した方が勝ち。相手はこの3年間タイトルを守り続けている一柳。彼は日本のタイトルホルダーにしては珍しくネット碁を打っているもので、これまで何度かsaiと対局し、すべてsaiが勝っている。佐為はヒカルは負ける気はしない。ただ、やはりネット碁とタイトル戦の挑戦手合では雰囲気の違い、相手の意気込みも違う。ピリピリした緊張感。しかし、佐為はそれも好きだった。そんな中で対局する時の佐為はいつも以上にきれいなので、ヒカルもこの緊張感が好き。もちろんヒカル自身はぜんぜん緊張せず、いつものようにニコニコしながら石を置く。

一柳としては、この笑顔がやりにくくて仕方がないが、笑顔にケチを付けるわけにもいかない。結果は、ネット碁の戦績どおり、佐為はヒカルが4連勝で棋聖位を獲得した。

プロ入り3年目、15歳でタイトル獲得、それも3大タイトルの獲得は史上最年少。しかも女性棋士のタイトル獲得はそれ自体が史上初の快挙。久しぶりにメディアにヒカルの名前が溢れたが、ヒカルはそんな騒ぎをよそに、棋聖位を得た翌週には韓国に飛び、LG杯エグジビジョン対局に臨んだ。この週は奇跡的にアキラのスケジュールが空いていたので、アキラが同行した。

2回の対局のうち、1回目は去年と同じ高永夏が相手、2回目は

洪秀英^{ホ・スヨン}というヒカルやアキラよりも年下のプロになりたての棋士だった。LG杯の主権者は、去年の成功を見て、エグジビション対局を若手の登竜門あるいはお披露目の機会にするつもりかもしれない。どちらも順当に佐為Ⅱヒカルが勝ったが、アキラは自分も対局したいと思い、それぞれのエグジビションの後にホテルで自分と対局してほしいと申し出た。通訳係はあきれたが、強くなる機会に貪欲な若い棋士たちはよろこんで応じた。アキラとの対局で、永夏は勝ち、秀英はここでも負けてしまい、激しく悔しがった。アキラを含め、こんな若い棋士たちの熱意を見るのは、佐為にとっても心地よい。ただ、そんな姿を見るにつけ、自分の代理人として碁を打ち続けた虎次郎のことがふと心をよぎり、悲しみの影が差した。

ともあれ、こうして多忙な1月、2月が終わり、3月は平穩に過ぎて、4月になった。

ヒカルはセーラー服を着なくなった。

「だって、中学卒業したんだもん」

というのがヒカルの言い分。確かに、ふつうに中学に通っていたのなら、この3月で卒業のはず。周りは、ヒカルのトレードマークというべきセーラー服を着させようとするが、ヒカルは一度決めたら頑として撤回しない。アキラや明子に手を回す者もいるが、二人とも「ヒカルちゃんの気持ちを尊重します」と言うだけ。

こうしてヒカルのセールスポイントの1つが消えることになり、メディア関係者は気を揉むが、本人や塔矢家の人たちはぜんぜん気にしている様子はない。

この年のゴールデンウィーク、ヒカルにはそれまでどおりイベント出演の依頼が舞い込むが、決まって「この時だけセーラー服を着てほしい」という要望が付いている。ヒカルは「いやだ」と拒み続け、アキラや明子もそれを応援する。そのためいくつかの出演依頼は撤回されたが、それでも結果として3カ所回ることになった。行く先々で観衆から「ヒカルちゃん、セーラー服着ないの?」と問われるが、ヒカルは「もう中学は卒業したんだよ」と答える。

ゴールデンウィークが終わると、本因坊戦の挑戦手合が始まる。3

大タイトルの中でも本因坊は知名度があり、メディアの関心も高い。弱冠15歳の女の子の本因坊が誕生するのか？　メディアの注目が集まった。

相手は桑原。ほかのタイトル戦にはあまり参加せず、本因坊位を守ることに力を集中している老人。そして、3年前に日本棋院で出会い、ヒカルがあっけらかんと「こんど、わたしがホンインボーになるんだ」と言つてのけた当の相手。桑原も、もちろんこの日のことは覚えてる。

「あの小娘、ほんとうに挑戦手合に出てきおつた」

と苦笑いしている。一柳とは対照的にネット碁などには手を出さないし、公式手合でも顔を合わせたことがない、佐為Ⅱヒカルにとって初めて対局する相手であり、初戦は慎重に進めたが、結果は3目半の勝ち。2局目以後も無難に勝ち進み、終わってみれば4連勝で本因坊位を手にした。ヒカルは心からよろこんだ。このためにプロになったようなものだから。

タイトル戦終了後の記者会見でヒカルは素直によろこびを表した。

「あかりちゃんにほめられるのがうれしい」

「あかりちゃんとは、誰のことですか？」

と問われて、

「あかりちゃんをあかりちゃんだよ」

と答える。それを見てアキラが割って入る。

「あかりちゃんはヒカルちゃんのいとこです。塔矢家の養女になる前、一緒に暮らしていた、ヒカルちゃんにとって姉代わりとも言える人です。そして、プロになるかどうか考えていた時、背中を押し、励ましてくれた人です」

あかりは翌日の新聞に自分の名前が出ているのを見て驚いた。いや、その前にヒカルが本因坊になったことに驚いた。

「あの日、わたしがヒカルちゃんを励ました日、ヒカルちゃんは確かに「ホンインボーになる」と言った。いつかは実現するかもしれないと思っていたけど、こんなに早く実現するとは。そしてわたしの言ったことを覚えていてくれた……」

あかりはもちろん、すぐに塔矢家を訪れた。ヒカルが駆け寄ってくる。あかりにまといついて、

「あかりちゃん、ホンインボーになったよ」

とあかりを見上げる。

「うん。ヒカルちゃん、えらい。日本一えらいよ」

8：迷いの中から

8—1

「史上最年少の本因坊」、「史上初の女性本因坊」といったメディアの喧噪が一段落した頃、そして、このところ中国や韓国で対局が増え家を空けることが多くなった行洋が久しぶりに帰国して家でのんびりしている頃、そしてアキラも手合やイベントの仕事のない日、塔矢家でささやかな祝勝会が持たれた。といっても参加者は家族の4人だけ。主賓は佐為だから、ほかの人を加えるわけにはいかない。発起人はヒカル。

「サイがホンインボーになったんだよ。碁で一番えらい人になったんだよ。お祝いしようよ」

佐為はこのヒカルの言葉だけで報われた気がする。

《祝勝会なんて、そんな・・・ヒカルちゃんのおかげです。ヒカルちゃんがわたしの示すとおりに石を置いてくれるから、わたしは碁を打てるんです。アキラとも行洋殿とも対局できるんです。ヒカルちゃんがプロになってくれたから、わたしは本因坊に挑戦できました。メディアの好奇心をヒカルちゃんに任せて、わたしはただ碁を打っていられます。ヒカルちゃんがいなければ、わたしは・・・》

これから先は言葉にならない。
そんな佐為をヒカルはうれしそうに見上げる。

《ヒカルちゃん、その笑顔がわたしにとって最高の報酬ですよ》

ヒカルの明るい笑顔を見て、アキラ、明子、行洋は、自分たちには聞き取れない情感のこもった言葉が二人の間で交わされているのだろうと想像する。そしてアキラが語る。

「本因坊秀策だった佐為に本因坊位を取り戻させるのが、そもそもヒカルちゃんがプロになった理由なんだからね。念願叶ったね。あらためて、おめでとう」

「ただ、佐為はヒカルさんの真価が定まるのは来年の挑戦者を退けて本因坊位を防衛できた時だろう。万が一にも来年防衛に失敗したら、今年の勝利はまぐれで片付けられるから。もちろん、万が一にもそん

なことはないと信じているけどね」

と行洋が言葉を継ぐ。佐為は自信を込めてうなづく。

「サイがうなずいてるよ」

ヒカルの言葉に3人の表情がなごむ。アキラがまた語る。

「来年も、再来年もその次の年も、ずっと本因坊位を防衛し続けるんだよ。佐為にはそれができる。そして、ヒカルちゃんが『秀策の再来』と呼ばれるようになるんだよ」

「アキラ、ありがとう。でも、わたしはずっとこの地上に留まることは、たぶんできないのです。霊はいつかは成仏すべきものですから」
佐為はこの思いを言葉にはせず、胸に秘める。

《塔矢のみなさま、ほんとうにありがとうございます。そして、ヒカルちゃん、ほんとうにありがとうございます》

「サイが、『塔矢のみなさま、ほんとうにありがとうございます』って言うてるよ」

《ヒカルちゃん、その後のわたしの言葉もきちんと伝えてください》

ヒカルは恥じらうように下を向く。ほかの3人は、どうしたんだろう？というような表情でヒカルを見る。

「サイがね、わたしにもお礼を言ってくれたの」

ささやかな祝勝会も含めて、塔矢家では何事もなく月日が過ぎる。いや、ヒカルが巻き起こす小さな出来事はいろいろあるのだが、塔矢家の人たちにとっては、それは「何事」の範囲には含まれない。

ヒカルは手合のあいまに、1〜2週間に1回くらい、アキラが「棋譜遊び」と名付けた遊びをする。黒石と白石をでたらめに並べながら、ちゃんとした棋譜ができあがる、あの遊び。アキラが見ていると、1局がだいたい3段階か4段階くらいで作られる。それぞれの段階ごとに棋譜らしい石の配置になっているのだが、その途中はまったくランダムとしか思えない石の並べ方をする。これは、行洋の病室での最初の時からずっと変わらない。アキラは各段階をデジカメで撮影して記録する。各段階に分解すれば、石が打たれたはずの順序、実際にヒカルが石を置いた順序ではなく、その段階でその棋譜が作られるためにはこう打たれたはずだと推測される順序を復元できる。常に

ではないが、たいてい1局に1つ、例の「意想外の手」が含まれている。

アキラがいない時にヒカルが一人で「棋譜遊び」をすることもある。そのような時は、アキラが家に戻っていつも碁を打っている居間に入ると、碁盤にきれいに碁石が並んでいる。ただ、終局まで至った棋譜だけを見て、その初手から復元するのは、とりわけ途中に意想外の手が含まれている場合は、さすがに難しかった。

しかし、1年もしないうちにアキラは、碁盤に残された終局の棋譜だけを見て、初手からのプロセスを復元できるようになった。その途中に含まれる意想外の手も含めて。それはアキラにとって興味深い作業だった。単に、ヒカルが無造作に並べた石の配置から意想外の好手を発見するのがおもしろいだけでなく、ヒカルの中に秘められたヒカル自身が気づいていない才能をアキラが探り当てるとような興味もあった。

そんなアキラを見て佐為は「アキラ、恐るべし」と感嘆する。この感嘆に嫉妬がまじっていることを、佐為はまだ気づかない。

こうして、棋聖と本因坊の2冠となったヒカルのプロ入り3年目は暮れ、プロ入り4年目の年が明けた。アキラは7段に昇段している。ヒカルにとってはタイトルホルダーとして棋聖位と本因坊位を守る最初の年。2月に難なく棋聖位を防衛し、3回目となるLG杯エグジビジョン対局に出かけた。

韓国から帰国する頃、「小さな公園」の梅がほころび始める。しよつちゆう訪れている場所ではあるが、この時季はとりわけ佐為にとつて感慨深い。ヒカルとの出会いの時を思い起こし、それから今までの出来事、自分がヒカルのために為したことを振り返る。アキラが紅梅の花を折ってヒカルの髪に挿す時、佐為はふと思いついて、アキラの手に自分の手を重ねた。アキラは何も気づかないが、ヒカルには二人の手が重なっているのが見える。まるで二人が手を重ね合わせてヒカルの髪に花を挿しているように見える。ヒカルは交互に佐為とアキラに笑顔を向ける。佐為は、この時、自分が実体を持たない存在、散る花びらが体を通り抜ける存在であることを忘れた。

5月、和谷がよろこび勇んで塔矢家にやって来た。和谷にとってはプロ入り3年目だが、若獅子戦で優勝したことを報告に来たのだった。アキラもヒカルも心から祝福してくれた。二人はその時すでに高段者ないしタイトルホルダーだから若獅子戦への出場資格がない、レベルが高すぎて若獅子戦には出場できない。それは和谷にとつて悔しいことではあるが、それでも自分もまた一步一步進んでいると思うようにした。

それにしても……

6月、ヒカルは本因坊位を防衛。そして、同じ6月、アキラは16歳で碁聖位を奪取してのけた。アキラにとつて初タイトル。もともと才能に恵まれ、佐為Ⅱヒカルに出会った時点で初段程度かそれ以上の実力を持っていた少年が、それから4年間、ほぼ毎日佐為Ⅱヒカルと対局して鍛えられたのだから、当然のことかもしれないが、和谷にとつては、追えば追うほど二人がさらに先に進むことを見せつけられるようで、落胆しかけた。それでも、「こんなこと、初めから分かっているじゃないか」と自分を励まし、慰めた。

佐為もまた、アキラの成長に感嘆する。まだ、対局で負けはしない。しかし力の差は着実に縮まっている。碁会所で初めて出会った時は中盤過ぎた頃に投了させた。翌日の対局では15目半の大差を付けて勝った。今では、3目半、2目半、時には1目半というきわどい勝利がほとんど。いずれ負けることも覚悟しておかないといけない。アキラの成長、それは佐為の願いであった。佐為は願いが叶ってよろこぶ。佐為は、アキラが強くなり自分に迫っていることにはぜんぜん嫉妬など感じない。むしろ、アキラの成長を喜んでいいる。ただ、この感嘆とよろこびには悔いも伴っている。アキラの成長を見るにつけ、虎次郎のことが思い出されるから。

「わたしは、幼かった虎次郎に宿り、虎次郎にわたしの碁を打たせてきた。でも、アキラの成長を見てきた今にして思えば、虎次郎にわたしの碁を打たせるのではなく、虎次郎自身の碁を打たせるよう虎次郎を導いていれば、虎次郎も自分の力で本因坊家の世嗣に迎えられることができたはず。さらには、わたしを越えることもできたはず……」

《ヒカルちゃん、アキラに頼んでほしいことがあります》

《なあに？》

《巢鴨に本妙寺というお寺があります。そこに本因坊家の墓があるのですが、虎次郎の墓参りをしたいので、本妙寺に連れて行ってほしいと、お願いしてください》

《うん、いいよ》

ヒカルはアキラに話しかける。

「アキラちゃん、サイが巢鴨のホンミョウジというお寺に連れて行ってほしいんだって」

「ホンミョウジ？」

「うん、そこにホンインボーのお墓があるから、虎次郎の墓参りをしたいんだって」

「ふーん」

アキラは、今この時に佐為がなぜ虎次郎の墓参りを思いついたのか不思議に思ったが、問いただしはしない。地図で見ると、本妙寺は塔矢の家から霊園を通り抜けた先にある。歩いて20分くらい、ヒカルをつれてのんびり歩いても30分くらいの場所。

梅雨の晴れ間の、アキラも手合のない日、アキラはヒカル（と佐為）をつれて散歩がてら出かけた。

佐為は墓を前で頭を垂れ虎次郎に語りかけるように祈っている。かすかに涙がにじんでいる。

「虎次郎、ほんとうは、今すぐあなたのもとに行って詫びをのべるべきかもしれません。だけど、今少し時をください。もうしばらく神の一手を探求するための時を。そして、ヒカルをもっと幸せにするための時間を」

こんな祈りを捧げながら、

「神の一手はしよせん人間には到達できないものであるのなら、その探求のためにこの世に留まりたいというのは、永遠にこの世に留まりたいというワガママではないのか？ しかし、霊は成仏できないままこの世に留まっているといつかは悪霊、怨霊に化けると言うではないか……」

とも思い、悩みに沈む。そんな佐為の様子を見てヒカルが問いかける。

《サイ、悲しいの?》

《えっ?・・・ええ、そうですね。若くして死んだ虎次郎のことを思うと、悲しくなります》

「わたしのほんとうの悲しみ、悩みを悟られないようにしよう。わたしは虎次郎への過ち償うためにヒカルを幸せにするのだから。4年前、新潟の海で、ヒカルのために幸福の霊を演じると誓ったではないか」

8—2

年が明けて、ヒカルが棋聖位を守り、LG杯も終わり、佐為とアキラが紅梅の花をヒカルの髪に挿してあげた頃、アキラにとって待ちに待ったことが起きた。ついに佐為に勝った。出会って5年目。

この対局の中盤、形勢は互角。じつと盤面を見つめているアキラに思いがけないアイデアが浮かんだ。今この時点で攻防の焦点となっている場所からかけ離れた1点、「ここにボクが白を打ち込めば・・・これまで、ヒカルの「棋譜遊び」の手順を復元する中で何度も出くわした意想外の一手、それを今まさに、この対局のこの場面で自分が打てるかもしれない。アキラは慎重にその後の展開を読んだ。読み切った。「うん、いける!」

こうしてアキラが打ってきた石を見て、佐為は驚いた。そして打たれた瞬間にヒカルの「棋譜遊び」を連想した。佐為も先を読む。確かに、この対局の帰趨を決するような好手に違いない。「だが、アキラはヨセで間違うこともある。ここで早まって投了することはない」そう思って佐為は対局を続ける。しかし、アキラはヨセを間違わなかった。記念すべきアキラの1勝。

対局の後、佐為はあらためてアキラが放った意想外の手を検討する。「みごとだ」と思いながら心の片隅でアキラへの嫉妬をこの時はつきりと自覚した「アキラはわたしより先にヒカルの秘められた天才を活用した。ヒカルのごとはわたしが一番よく分かっていると信じていたのに」。佐為にとって、対局に負けたことではなく、ヒカルの

隠れた天才を理解し活用する点でアキラに後れを取ったことが悔しい。悔しさが嫉妬をかき立てる。その時、

《サイ、どうしたの？ アキラちゃんに負けてくやしいの？》

と呼びかけられた。佐為の様子が変なのに気づいたヒカルの声。

《いえ．．．あつ、そうかもかもしれません．．．でも、悔しがらなくてもいいんです。アキラはほんとうに強くなりました。これほど強くなったアキラに負けたからといって、悔しがらなくてもいいんです。そもそも、わたしもアキラが強くなることを願い、そのためにも毎日のように対局したのだから。アキラがわたしを負かしたのは、わたしの願いが叶ったということです。それなのにこんな顔をして、わたし、ちよつと変ですね．．．》

佐為は自らを恥じた。「どういうつもりなのだ。わたしはヒカルを幸せにするに誓ったではないか。つい先日、あの小さな公園で、去年は虎次郎の墓前で．．．そしてあの新潟の海で、ヒカルのために幸福の霊を演じると誓ったではないか。ヒカルの幸せはわたしよりもはるかに多く、塔矢家の人たちのおかげ、とりわけアキラのおかげなのだ。よりによって、そんなアキラに嫉妬するとは．．．」

佐為は、自分の心の闇を自覚した。辛かった。佐為自身としては、ヒカルと出会ってからずっと、ヒカルの幸せを念じてきたつもりだった。それなのに、ヒカルにとってかけがえのないアキラに嫉妬の炎を燃やすとは。

「．．．わたしはもう立ち去るべきなのか？ わたしは、アキラにそしてヒカルに害を為してしまう前に立ち去るべきなのか？ 成仏できなままの霊はいつか悪霊、怨霊に化けるといふのはほんとうなのか？．．．だけど、まだヒカルのもとにいたい．．．これもまた醜い煩惱なのか、妄執なのか．．．」

次の対局では、佐為が順当に勝った。それから1〜2ヶ月、アキラの勝率は1勝4〜5敗くらいで安定したが、それから徐々に上がり始めた。佐為はアキラの実力が自分に接近しているのを実感する。いずれ追い越されるかも。「その時こそ、わたしが立ち去る時なのだ。アキラがわたしを追い越したら、後事をアキラに託して、わたしは立

ち去るべきなのだ……そもそもアキラが折りにつけて語るように、「神の一手は人間が極められるものではない。人間が極められないからこそ神の一手」なのだろう。今、この言葉が以前よりはるかに深く心に刺さる。わたしはそれにこだわるあまり、虎次郎の碁を殺してしまった。人の手に届かぬものをあくまで追い求めるのはむしろ煩惱、我執、悪しき執念なのか。命に限りある人の身にあつては、自分の手で神の一手を極めるなどという不可能な夢を無限に追い求めたりせず、新しい世代に探求の道を譲るべきなのだろう。そして譲るとしたら、それは行洋殿よりも、年若いアキラ……であれば、わたしが心安らかに後事を託せるよう、アキラにはもつともつと強くなつてもらわねば」

しかし、佐為にはもう一つの煩惱があつた。ヒカルの幸せ。自分が消えてもヒカルは幸せでいられるのか？ 碁を打てなくなつても、ヒカルは塔矢家で今と同じように大切にされるのか？

ヒカルはこの年も当たり前のように本因坊位を守り、夏休み期間には子供向けイベントにいくつか出演した。やがて季節は移り、秋も深まる頃、一家4人そろつた夕食の場、佐為は意を決してヒカルに語りかける。

《ヒカルちゃん、ぜひ塔矢のみなさまに尋ねてほしいことがあります。もし万が一、ヒカルちゃんが碁を打てなくなつても、これまでどおりヒカルちゃんを大切に慈しんでくれますか？ こう、尋ねてほしいんです》

《もし、まんがいちゅ？……》

ヒカルには長すぎる文章かもしれない。

《では、少しずつ区切りましょう。いいですか、ヒカルちゃん、わたしのまねをしてください》

《うん、分かった》

ヒカルは声を出して語り始める。

「サイがみんなに聞きたいことがあるって」

3人の視線がヒカルに集中する。

「もし、まんがいちゅ……ヒカルが碁を打てなくなつても……こ

れまでどおり……ヒカルを大切に……いつくしんでくれますか？」

3人はなおヒカルに視線を集中し、それから互いに顔を見合わせる。なぜ、佐為は突然、こんなことを自分たちに尋ねるのか？

沈黙を破ったのはアキラ。

「もちろんだよ。そんなこと、当たり前じゃない。ヒカルは大切な、この世でたった一人のボクの妹なんだよ。何があっても、いつくしむよ」

こう語りながら、アキラの心に新潟の海の思い出がよみがえった。

『プロ試験の年、予備試験が終わって、本試験が始まる前、お父さんが仕事で新潟に行くのについて行って、海水浴をした。その時、浮き輪をつけて無邪気に楽しそうにしているヒカルちゃんの手をしっかりと握って、ヒカルちゃんの明るい笑顔を見ながら、ボクは思ったんだよ『仮に、ほんとうに仮に、佐為が、突然現れたのと同じように突然消えて、ヒカルちゃんが碁を打てなくなっても、それでも、ボクはこの子をいつくしむ。この子はボクの大切な妹なんだ。この世でただ一人の、いとしい妹』そう思ったんだ。今もこの思いは変わらない。今はもっと強くそう思っている。だって、もう5年以上も一緒に暮らしているんだよ』

アキラの語りを聴きながら、佐為も思い出した。あの新潟の海に浮かんで、自分は塔矢の人びとへの感謝を述べ、ヒカルのために幸福の霊になると誓ったのだった。佐為はアキラを熱い眼差しで見つめる。ただ見つめる。ほかに何もできない、どんな言葉も思いつかない。

続いて、明子が語る。

「わたしはアキラさんほど熱い思いではないけれど……ここに来るようになった2日目かしらね、ヒカルちゃんがいるだけで我が家の雰囲気や和むからありがたいと思っただわ。できればずっといてくれればいいのにつて。今も、そうよ」

そして、行洋も思いの丈を述べる。

「どうも、自分の気持ちや素直に語るのは、わたしのような古風な男には苦手なんだが……何と言つても……3年前の4月、わたし

が心臓発作で病院に運ばれたその夜から、ただ、わたしのそばにいてくれた。一途にわたしのことを思って、この世の一切の邪悪なものからわたしを守るように、ただただそばに座っていてくれた。あの時のヒカルさん。わたしにとっぴかかけがえのない存在だと思つたよ。……確かに、ヒカルさんがうちに来るようになったきっかけは碁だ。碁会所でアキラと対局したのがきっかけだ。それがなければ、わたしたちはヒカルさんと出会えなかった。その点で、佐為には心から感謝している。ただ、今となっては、何らかの事情で仮にヒカルさんが碁を打てなくなつたとしても、わたしの、わたしたちの彼女への愛情が薄れるとか消えるとか、そんなことは絶対ない。それこそ神に誓つても言えるよ」

ヒカルは3人それぞれの言葉を聞いている。ちゃんとは理解できていないにしても、みんなが自分のことを思い、いつくしんでいることは分かる。自然に笑顔になる。笑顔を佐為に向ける。佐為はその笑顔に癒やされた。塔矢の人たちの言葉に励まされ、ヒカルの笑顔に癒やされた。そして、梅の花の咲く公園で出会った時のような優しい笑顔をヒカルに向ける。

「そうです。わたしは、ヒカルを塔矢の人たちに出会わせるという一番大切な仕事を果たしたのです。ヒカルを幸せにするために欠かせない絶対必要な任務を果たしたのです。それは誇つていい……」

8-3 アキラ視点

佐為が突然なぜあんなことを聞いたのか、ボクには分からない。佐為は自分が消えることを予感しているのだろうか。ヒカルちゃんの前に突然現れたように、突然消えるのだろうか？ ひよつとしたらそうかもしれないとも思う。あの日以来、ボクへの指導が厳しくなつた。まるで、自分に残された時間が少ないと自覚しているみたい。ボクが好手と思う手、客観的に見ても好手であるはずの手についても、

「これは99点の打ち方です。こっちの方が100点です」

というようなコメントをヒカルちゃんを通して語る。確かに、指摘されればその通りだし、ボクだって99点で満足せず100点を目指

すことに異存はないけど、佐為の熱意は度を超えているようにも感じる……もちろん、そのおかげで、佐為に対する勝率が上がっている。この分だと、年が明ける頃には互角になるかも。佐為は、ボクが佐為を乗り越えることを望んでいるのだろうか……。

12月、ボクとヒカルちゃんの18歳の誕生日。ほんとうはヒカルちゃんが5日遅いのだけど、ヒカルちゃんがうちの養女になった年、「わたしもアキラちゃんと一緒にいい」と言い張って、それ以来まとめて祝うのが我が家の習慣になっている。ついでにクリスマスパーティーも済ませてしまう。忙しい父にあわせていつの間にかできあがった習慣だけど、4冠を返上した父よりもボクやヒカルちゃんが忙しくなった現状にもマツチしている。

あかりちゃんはなるべく都合を付けて参加してくれる。素直にうれい。ヒカルちゃんにとってかけがえのない人だから。昔のように月1〜2回という頻度ではないけど、2〜3ヶ月に1回くらいは遊びに来てくれる。ヒカルちゃんが本因坊になった時は翌日に駆けつけてくれた。彼女が来ると、ヒカルちゃんは彼女にまといつくけど、彼女はぜんぜんいやな顔を見せない。姉と妹のように暮らしていた昔のままの関係が一瞬のうちに復活するみたい。ボクには果たせない何かを、彼女はヒカルちゃんのために果たしてくれる。これからも、そうであってほしい。

出会った時は中学に入学する直前だったけど、今もう高校3年生。来年は大学生になるんだな。すっかり大人びて、ほんとうはあかり「ちゃん」と呼ぶのは失礼なんだけど、でも、ヒカルちゃんがそう呼ぶからボクも一緒にそう呼んでしまうし、あかりちゃんもその方がいいようだ。いつか、無理して「あかりさん」と呼びかけたら、「やめてよ。なんだか、おかしい」と言われてしまった。時々やって来る親戚のお嬢さんみたい、かな？……

年が明けると、佐為Ⅱヒカルちゃんは棋聖位を難なく防衛し、2月には5度目になるLG杯エグジビジョン対局のため韓国に出かけた。今年も、ボクの都合が付かないので母がついて行く。ボクは、ちょうどその頃、和谷くんと本因坊リーグ戦で対局した。和谷くんは

「やつと、リーグ入りできた」

とよろこんでいた。確かに、リーグ入りするだけでも勲章なんだ。ただ、強者ぞろいのリーグで負けが込んでいるらしい。ボクも遠慮はしない。中押し勝ちで退けた。ボクは、これまで以上に本因坊リーグに気合いを入れている。挑戦者になり、佐為に挑戦したい。そして、本因坊位を奪いたい。ふだんの対局での力を発揮できるなら決して不可能ではないはずだ。年が明けてから、ボクは佐為とほぼ互角の勝負を続けているから。

最近佐為もボクとの対局ではあの意外の手をたまに打つようになった。もちろん、ボクもそれにふさわしい場面だと確信すれば、打ち返す。だけど、不思議とどちらも、ほかの人を相手にする対局ではこの手を打たない。佐為はどういうつもりなのか分からないけど、ボクは、ほかの人との対局ではなぜかこの手を思いつかない、この手を思いつく場面に出会わない。佐為と打ち合う時だけ、思いつく。

そして、ボクは挑戦者になった。棋界やメディアは「兄妹対決」で盛り上がっている。

「血のつながりはないとはいえ、妹さんにタイトルを挑む気持ちはいかがですか？」

などと質問されることもあるけど、ボクとしてはもう何年も毎日のように対局を続けてきた相手。今さらどうということはない。そう答えると、記者はちよつと不満そうな顔をする。気持ちは分かるけど、ボクも記者を満足させるためにウソをつく気はないんだ。実際、ボクが挑戦者と決まってからも、それまでと少しも変わらず、ボクは佐為と対局している。

そして始まった本因坊挑戦手合第1局。始まって気づいたことがある。タイトル戦の挑戦手合はたいがい地方対局になる。これまでボクか母がヒカルちゃんに付き添っていた。ボクが挑戦者なら、ある意味、手間が省けるわけだ。どうせボクも同じ場所に移動しないといけないのだから。しかも、対局者控え室も1つだけで澄む。ヒカルちゃんが「アキラちゃんと一緒になきゃいやだ」と言い張るから。棋院にとっても経費削減になるのかな。

1局目、ボクは白。その108手目、例の手を打った。後から聞いた話では、観戦者はその瞬間「狐につままれた」ような気持ちになり、その後の展開でその手の意味が分かるにつれ、賞賛が巻き起こったらしい。対局後のインタビュアーでも聞かれた。ボクとしては「佐為が相手なら、ありふれた手です」とは答えられないから、「インスピレーションです」と答えた。そして「次の対局では、ヒカルちゃんが同じような手を打ってくるかもしれません」と付け加えた。

そのとおり、2局目の中盤で佐為Ⅱヒカルちゃんが打ってきた。観戦者はどよめいたけど、ボクは今さら動じない。いつもの対局の時と同じように対応して、2局目も勝った。

ただ、このまますんなり勝ち続けられるような相手ではない。3局目、4局目は連敗し、2勝2敗となった。この頃、ボクにとって誤算というほどではないけど、予想しなかったことが生じた。対局の後にとっても疲れる。ふだんの対局ではあり得ないこと。やはり、1局2日がかりのタイトル戦の手合はふだんの対局とは精神的な疲れ方が違うのかもしれない。対局が終わって、15分、20分くらい休ませてもらった。

5局目はボクが勝ち、6局目は佐為Ⅱヒカルちゃんが勝ち、7局目までもつれ込んだ。これまで、桑原先生をヒカルちゃんが倒した年から、連続してヒカルちゃんの4連勝でけりが付いていたから、これもまた話題の種になった。7局目はいやおうなしに盛り上がる。さすがに、ボクも多少のプレッシャーを感じた。

7局目は神戸近郊、有馬温泉のホテルで行なわれる。確かに、1つのタイトル戦で7回あるいは5回も地方に出かけないといけないのは、負担だ。父が5冠を返上した理由の1つに挙げていたけど、その気持ちも分かる・・・まあ、今さらこんなことを言っても仕方ないんだけど。

7局目だからといって、特別なことはないはず。いつものように打っただけ。そうではあるけど、やはりピリピリする緊張感がいつもと違う。佐為は同じようなことを感じているのだろうか。ヒカルちゃんには、そんなことぜんぜん感じていないように見える。対局は最後まで

もつれたけど、ボクの160手を過ぎるあたりで、勝ちを確信した。佐為も分かっているはずではないかと思うけど、まだ投了しない。かすかな不安がよぎる。まさか、ボクが見落としている手筋はないはずだけど……結局、最後まで打ち切りボクが1目半差で勝ちを収めた。

ボクは疲れ果てて、記者会見を延期し休憩させてもらう。控え室でぐったりしているボクにヒカルちゃんが

「アキラちゃん、だいじょうぶ？」

と声をかけてくれる。新チャンピオンに気を配る元チャンピオンではなく、単純に兄を気遣う妹のよう。

「うん、大丈夫だよ。心配しないでいいよ。ちよつと疲れてるだけ。佐為と真剣勝負したんだ。疲れるのは当たり前だよ」

それでも心配そうな顔でヒカルちゃんがボクを見つめているから、ボクは抱き寄せて頬ずりした。

「心配しないで、ヒカルちゃん。おにいさんはそんなヤワな人間じゃないから」

そんなボクに、佐為がヒカルちゃんを通して「お疲れ様でした。ついにわたしを乗り越えましたね」と言葉を掛けてくれた。

ボクは、うれしかった。そして気がついた。この本因坊戦でこれほど疲れた理由。ボクは、実力の100%どころか、120%、150%の力を出していたんだ。ふだん以上の力を発揮していたんだ。それができたのは、相手が佐為だから。佐為がボクに実力を越える力を発揮させてくれた。佐為への感謝の気持ちかわき上がる。それで、ボクは素直に佐為に尋ねた。

「今日の対局、ボクは160手を過ぎたあたりで勝ちを確信したんだけど、読みではボクより優れているはずの佐為が投了しないで続けるから、『自分が読み違ってないか』と不安になったんだ。あの時点で、佐為は逆転の策が見えていたの？」

佐為は、詳しく説明してくれているのかもしれない。ただ、ヒカルちゃんが伝えたのは「不安を乗り越えさせるために続けたんです」という簡単な言葉。でも、それで十分だ。ボクに不安を与え、それを乗

り越えさせるために、負けが分かっている対局を続けてくれたんだ。

「佐為、ありがとう。ほんとうに、佐為には感謝しかないよ」

30分ほどしてボクは記者会見に臨んだ。

「ついに本因坊奪取。まず一言」

「疲れました」

会場がどつと沸く。

「今はただ、休みたいだけです。疲れが取れたら、感激が湧いてくると
思います」

今のボクの正直な気持ち。ほんとうは、佐為への感謝の気持ちを述べたい。でもそれはできないことなんだ。それから、いろいろな質問が出されたが、それなりに対応できたはず。ボクへの質問が終わって、ヒカルちゃんにマイクが向けられた。

「最後に、タイトルを兄に譲られる塔矢ヒカルさん、一言お願いします」

ヒカルちゃんは

「こんどはアキラちゃんが一番えらい人になるんだよ」

と答えた。

翌日からしばらく、「入神の碁」、「神業の連発」、「神々しいほどの対局」など「神」の字を冠する対局解説があちこちのメディアに現われたけど、それら諸々（もろもろ）の讃辞よりボクは対局直後のヒカルちゃんの言葉が一番うれしい。

9：別れと永遠

9-1 佐為視点

7局を終えて疲れ切ったアキラがわたしに感謝の言葉をかけてくれる。アキラ、わたしはそんな言葉にふさわしくありません。わたしはあなたへの嫉妬に身を焦がし、悪霊になりかけたのです。そんなわたしを救ってくれたのはヒカルです。わたしを素朴に気遣うヒカルの顔を見て、わたしは自分の使命を思い出したのです……そしてアキラ、あなたも……この7番勝負、お互いに全力を出し切りしました。神の一手を探求するのにふさわしい対局でした。わたしの1000年の碁歴の中でもおそらく最高の対局です。満足しています。おかげで、わたしは今、これまでになく心安らかです。

アキラは、ホテルで熟睡した後は疲れもすっかり解消しているようだ。ヒカルと仲良く新幹線で帰る。わたしも一緒に乗っている。初めて乗った時のようにはしやぎはしないが、ヒカルたちと一緒に新幹線に乗るのは楽しい。ヒカルは時おり、わたしに話しかける。わたしもそれに答える。アキラとヒカルも楽しそうにおしゃべりしている。そして、アキラがわたしに話しかけた。

「佐為は、考えてみると、自分のライバルというか自分から本因坊位を奪う強敵を一生懸命育てたんだね。自分が育て上げた棋士が自分からタイトルを奪うのは、教える側としてうれしいかもしれないけど、それでも心の片隅にはくやしさとか怨みとかもありそうなものだけど、佐為はそんなそぶりはまったく見せないね。まあ、もともと姿が見えないんだけど、そんな気配も感じないよ。佐為は人を怨むことなんて、あるのかな」

いつものような、わたし相手の一人語り。わたしの返事は聞こえないから、アキラも返事を期待しているわけではない。でも、この語りかけには返事をしてしまう。もちろんアキラには聞こえないけど。

「囲碁の勝負で怨みはしませんよ。アキラが強くなり、わたしを乗り越えることこそ、わたしの願いだったのだから。ほかのことで、アキ

ラに嫉妬しましたけど、今はそれも静められました。ヒカルちゃんのおかげです・・・わたしが怨むとしたら、1000年も前にわたしに濡れ衣を着せた対局相手、そして、彼の言葉を真に受けてわたしを追放した帝（みかど）です。確かに、怨みはしました。ただ、その時のわたしは、彼らへの怨みよりも、碁を打てないことの悲しみの方が強かった。「もつと碁を打ちたい」とは思ったけど、「彼らに復讐したい」とは思わなかった。それは良いことだった、と今も思います。人を怨み、呪っても、自分も含め誰も幸せにはしない。自分も含め皆を不幸にするだけだから。源氏の君の愛を得た夕顔を呪い殺しても、六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）は少しも幸せにはならなかった。雷神となって、自分を陥れた藤原時平を殺したとしても、そして祟りを恐れた人たちによって天神様に祭り上げられても、菅原道真公の霊は幸せではなかったでしょう。

怨みに身を任せずに神の一手を目指したのは、間違っていないから。ただ、それに熱中するあまり、虎次郎の才能を摘み取るという別の過ちを犯してしまっただけ・・・この過ちを償うことが、いやその前に、そもそもこの過ちに気づくことが、ヒカルちゃんに宿ってこの世に立ち戻った理由の1つだと、今にして身にしみるようによく分かります。そしてもう1つ、そもそも神の一手は一人の人間が極められるものではないということ、人間にできるのはこの探求を受け継ぐ者を見つけ、育てることだということに気づくのが、もう1つの理由だったと今にして分かります。

受け継ぐ者はちゃんと育てましたよ。アキラ、あなたです。囲碁を愛する才能と努力を惜しまない才能では誰にも引けを取らないアキラ。あなたこそ秀策の再来と呼ばれるようになるでしょう。だって、秀策その人が6年以上にわたって毎日のように対局して鍛えたんですからね」

ここに思い至って、わたしはふと笑みを浮かべた。アキラは、こんなわたしの気持ちなど知るよしもなく、ヒカルちゃんと窓の外の景色を見ている。ほほえましい兄妹の図ですね。

過ちの償いにヒカルを幸せにするという目的も果たしたはず。こ

れからは塔矢の人たちがヒカルの幸せを守り、ヒカルを愛し、慈しんでくれる。何の心配も要りません。そして、塔矢の人たちにヒカルを出会わせたのがわたしの碁であることを、誇りに思います。

残された仕事は、ここを立ち去り、天に昇り、虎次郎に詫びること。ただ……わたしの別離の悲しみはわたしが耐えるしかないとして、ヒカルの心に生じる別離の悲しみは、どうすれば……いや、余計な策を弄することはない。ありのままを告げれば良い。「わたしはヒカルちゃんのおかげで成仏できます」と。まさにその通りなのだから。わたしの魂はヒカルの無垢な心によって浄められたのだから。そして何より、悪霊になりかけたわたしを救ってくれたのは、わたしを氣遣うヒカルちゃん言葉と表情だったのだから。

ヒカルはアキラに身をもたせてうとうととしている。安らかでかわい寝顔。ヒカルも疲れたんですね。この7番勝負だけではない。これまで6年間、わたしの代わりに碁を打ってくれた。疲れもしますよね。ヒカル、お疲れ様。そして、ほんとうにありがとうございます。

その夜、布団に入ったヒカルにわたしは語りかける。

《ヒカルちゃん、わたしはもうすぐいなくなります。》

ヒカルは何のことか分からず、わたしを見つめている。

《ヒカルちゃんがいやだからじゃありません、ヒカルちゃんが嫌いになっただんじやありません。今でも大好きですよ。でも、もうここに留まれないのです。霊はいつまでもここに留まってはいられないのです……不幸ではないんですよ。わたしの魂が浄められて、天に昇るのです。ヒカルちゃんの無垢な心がわたしの魂を浄めてくれたんです。ほんとうに、ありがとうございます》

《サイ、いなくなるの？ ヒカルはもうサイに会えなくなるの？》

ヒカルはわたしを見つめる。そんなヒカルをわたしも見つめる。

《そんなことはありません。わたしはヒカルちゃんの思い出の中に永遠に留まりますよ。そして、いろんな機会にヒカルちゃんわたしはわたしの気配を感じることができましょう。たとえば……たとえば、碁盤に碁石を並べる時とか、公園を散歩する時とか……》

《碁石を並べたり、公園を散歩したりすると、サイに会えるの？》

「会える……それを「会う」と言うのはウソになるでしょう。でも……」

《会える……のではなくて、わたしを思い出す、わたしの気配を感じてくるのですよ》

「そう、「気配を感じる」のなら、ウソにならないでしょう……」
ヒカルはわたしを見つめる。わたしもヒカルを見つめる。不覚にも涙が流れそうになるけど、涙を見せるわけにはいかない。ここは、一番美しい笑顔を見せないといけない場面なのだから。

《……そうそう、夢の中で会えますよ。あの梅の花の咲く公園で初めて会った日の夜、夢に現われたように、それから後も何度もヒカルちゃんの夢に現れたように、これからも夢の中で会えますよ》

ヒカルはわたしを見つめる。

《サイは、天に昇るのがうれしいの？》

「うれしい？ 本心を言えば辛い部分もあります。ヒカルと別れるのが辛いです。でも、それを告げるべきではない」

《はい、天に昇るのは幸せなことなんですよ》

《サイが幸せなら、いいよ。ヒカルもうれしいよ》

《ヒカルちゃん！……》

「ヒカルちゃん、ありがとう。ヒカルちゃんがうれしいのなら、わたしも幸せです」

わたしは、なお流れそうになる涙をこらえる。そして笑顔を作る。

《ほら、わたしを見てごらん。笑っているでしょう。幸せですよ》

《うん》

《だからヒカルちゃんも、いつもの明るい笑顔を見せて》

《……サイ、夢なら会えるんだね？ 夢ならいつでも会えるんだね

？》

《そうですよ。もちろん、そうですよ》

《碁石を並べたり、公園を散歩しても、佐為と会えるんだね？》

《……そうです……ただ、これまでのように碁石を置く場所を示すことはできません。こうやってお話しすることもないかもしれません。ただ、ヒカルちゃんのそばにそっといるだけです。その気配

を感じてもらえるだけです》

《でも、いるんだね?》

「そうですね、気配を感じるのには「いる」と感じるのと同じかもしれないね」

《・・・はい。何もできませんけど、何も話せませんが、そばにいますよ》

《うん、それなら、いいんだ・・・》

ヒカルはいつもの明るい笑顔を見せた。

「ヒカルちゃん、あなたこそ、神だったのですね。わたしはあなたによつて浄められたのです。神様は不幸になんかなりません。そうですね。不幸になんかなるはずはないんです」

《わたしは天に昇つて幸せになります。ヒカルちゃんは、これからここで塔矢の人たちと一緒に幸せですよ。アキラさんも、明子さんも、行洋殿も、みなヒカルちゃんを愛し、いつくしんでくれますから。ヒカルちゃんはずっと幸せですよ》

《うん、アキラちゃんも、おかあさんも、コーヨーさんも、みんな優しいよ》

《そうですね。そして、ヒカルちゃんはこれから、碁を打たなくても、いろんな人たちの魂を浄めてあげるので。わたしにしてくれたように》

わたしは精一杯の笑顔を見せる。ヒカルはわたしの笑顔を見て安らかに寝入る。

安らかにお眠り、ヒカル。わたしは今夜、必ずヒカルの夢に現れよう。そして、ヒカルと楽しく碁を打とう。そしてヒカルに告げよう。「明日の朝起きたら、塔矢の人たちに教えてあげてください」『碁を打つ佐為はいなくなった』と」

9—2

翌朝、ヒカルは目が覚めて左を見る。いつもそこに佐為がいたのに、見つからない。不思議に思つてヒカルは目をこらす。すると、おぼろげに佐為の姿が浮かんでくる。ヒカルは安心する。「幻覚」という観念は思いつかない。ヒカルにとっては、笑っている佐為がそこに

いる。

朝食の場で、ヒカルは夢の中で佐為に告げられたことを塔矢家の人たちに話す。

「碁を打つ佐為はいなくなったよ」

明子と行洋は驚いた。アキラは、驚きながらも心の片隅に「やつぱり」という思いを抱いている。そしてヒカルに問う。

「じゃあ、碁を打たない佐為はいるの？」

「うん、このへんに」

ヒカルは自分の左隣を指す。

「このへんにいるの。もう、何もしないし、何も話さないけど、笑ってわたしを見てるの」

明子と行洋は相変わらず呆然としているが、アキラはなんとか事態を理解しようとする。

「つまり、佐為は消えた。どんな事情か分からないけど、突然現れた時と同じように突然消えたということ？　そしてヒカルちゃんは、佐為の幻覚を見ている。何もしない、何も話さない、もちろん碁を打つこともない、ただ笑ってヒカルちゃんを見る佐為の幻覚を見ている、ということ？　あるいは佐為の気配を感じている、ということ？」

アキラは、とりあえず現実的に一番大事なことを確認する。

「つまり、ヒカルちゃんはもう碁は打たないの？」

「分かんない」

「分かんない？」

アキラはヒカルの答えの意味を理解できない。ヒカルは、そのまま話を続ける。

「うん。碁盤に黒石と白石を並べるのは楽しいんだ」

アキラは話が見えてきた。

「ああ、それは楽しいよね。対局はもうしないんだね？」

「うん、対局はしないの。碁を打つ佐為はいなくなったから……でも、夢の中では打つんだよ。佐為はわたしと碁を打つんだよ」

アキラはヒカルがそばにいない時を見計らって、自分の推測を明子と行洋に説明した。そして、去年の秋頃から、ひよつとして佐為が消

えるかもしれないと疑問を抱いていたことも。

「お父さんもお母さんも覚えていてでしょう、去年の秋、佐為がヒカルちゃんを通して『万が一、ヒカルちゃんが碁を打てなくなっても、これまでどおりヒカルちゃんを大切に慈しんでくれますか？』と尋ねたこと。あれから、ボクとの対局でそれまで以上に熱心にボクを鍛えるようになったんです。まるで、ボクができるだけ早く佐為のレベルに到達し、佐為のレベルを越えることを望んでいるように。その頃からボクは、ひよっとしたら佐為はもうじき消えることを予感してるんじゃないかと思っていたんです」

アキラの話聞いて、しばらく明子も行洋も黙っていたが、
「確かに、わたしもあの時佐為がなんで急にそんなことを尋ねるのか、不思議に思ったわ。まさか、消えることを予感しているとは思わなかったけど……でも、それなら……」

と明子が疑問を述べる。

「アキラの言う通りだとしたら、今もまだヒカルちゃんのそばにいる、何もしないでヒカルちゃんを見ている佐為は？」

「ヒカルちゃんの幻覚だと思います。あるいは、もつと穏やかな言い方をすれば、ヒカルちゃんは佐為の気配を感じている。気配だから、何もせず、何も話さず、ただそばにいるのを感じるだけ」

明子と行洋は黙ってアキラの説明をかみしめる。アキラはさらに話を続ける。

「ともかく、はっきりしていることは、もうヒカルちゃんは碁を打たない、対局しないということです。去年の秋、ボクたちが佐為に誓ったことを守りましょう。ヒカルちゃんが碁を打たなくても、ボクたちはヒカルちゃんを愛し、慈しみ、幸せにすると」

「もちろん、そんなこと、誰に言われなくても分かっているわ」

明子が答え、行洋は深くうなずく。

ヒカルはそれから毎日、碁盤に黒石と白石を並べて遊ぶ。時おり、左隣に笑顔を見せる。また時おり、碁盤にできた黒白模様を眺めてニコニコしている。アキラや行洋を見ると、それは棋譜らしい。アキラには見覚えのあるものが多い。アキラと佐為はヒカルが対局した棋

譜。どうやら、ヒカルはかつて佐為の言うとおりに石を置いた、その碁の棋譜を記憶していて、それを碁盤に再現しているようだ。ただし、手順は違っている。これまでの「棋譜遊び」と同じように、1局で何段階かの棋譜、たぶんヒカルが「きれい」と思う棋譜が記憶されていて、黒石と白石を交互にランダムに置いてそれを再現しているらしい。週に1〜2回くらい、アキラが見覚えのない黒白模様ができあがっている。その多くは、アキラ以外の相手と対局した時の棋譜らしいが、たまに例の「意想外の手」を含むような棋譜がある。その時、アキラはそれをデジタルカメラで記録し、後になって父と検討する。

碁盤に碁石を並べるのに疲れたら、ヒカルは散歩に出かける。初めのうちは、佐為がいなくなつてヒカル一人で散歩するのを心配した明子が付き添つた。散歩コースはほぼ決まっている。家のそばの線路脇、かつて佐為と一緒に電車を眺めたように、明子と手をつないで立ち、ヒカルはあの頃のように電車が通るのを目を輝かせて眺めている。それから橋を渡つてヒカルが「小さな公園」と呼ぶ公園に寄る。そこでは必ず1対の梅の木のをそばに駆けていく。

「おかあさん、花が咲くと、サイが花をわたしの髪に挿してくれるの」「佐為が、挿してくれるの?」

「うん。佐為がアキラちゃんと手をあわせて挿してくれるの」「そう、じゃあ、こんど梅の花が咲いたら、わたしが挿してあげましょう」

こんな話をした後は、ヒカルが「大きな公園」と呼ぶ霊園まで足を延ばす。大きな楠を見上げ、地面に寝そべる猫を撫でる。

こうして、佐為が消えて1ヶ月が過ぎ、2ヶ月が過ぎた。本因坊戦が終わり、棋聖戦は来年の1月。タイトルホルダーのヒカルは昇段のための大手合に出ることはない。だから、公式の手合はしばらくないのだが、プロ棋士、タイトルホルダーとしてのイベント出演などの依頼はいくつかあったのを、体調不良を理由に断っている。いつまでもそうしていられないことは、アキラも行洋も分かっている。

「いずれ、きちんと記者会見でも開いて、事情を説明すべきだな」と行洋が語る。

「どのように説明しましょうか？」

「碁を打つ佐為が消えたと語らせてもいい」

アキラは驚いた。

「お父さん、本気ですか？」

「本気だよ。ヒカルさんにとっては、そう話すのが一番自然だろう。その後、わたしたちが『ヒカルさんは自分の天才的な棋力をサイと呼んでいました。彼女はそれを、自分の能力というより自分に宿った霊のように感じていたようです』とでもフォローするといいだろう。変に取り繕うより、このような説明の方が、むしろ説得力がありそうじゃないか？」

アキラは腕組みして、父の提案を検討した。

本因坊戦から3ヶ月後、塔矢ヒカルの引退が日本棋院で発表された。あらかじめ内容が告知されていたので、100人を越える記者が棋院のホールに集まった。その壇上にヒカルが現われると一斉にフラッシュがたかれシャッターが切られた。ヒカルは

「碁を打つサイがいなくなったから、もう碁は打たないよ」

と簡潔に語った。当然、質問が出された。

「saiというのは、ヒカルさんのネット碁のアカウント名ですね。saiがいなくなったというのは、どういうことなのでしょうか？」

「碁を打つサイが消えたの。消えていなくなったの」

記者たちはざわめいた。ここでアキラが説明を引き継いだ。

「ヒカルちゃんは、わたしたちという時は、自分が持つ碁の超能力、敢えて『超能力』という言葉を使わせていただきますが、その超能力をふだんから『サイ』と呼んでいました。自分の能力というより、自分に宿った霊のように感じていたようです。そのサイ、碁の超能力を担う霊が3ヶ月前、突然消えたらしいんです。それ以来、ヒカルちゃんには碁を打ちません。碁盤に碁石を並べて遊ぶことはありません。それはただ、黒白模様が美しいからです。対局、つまり相手の打ち手に応じて自分も適切な場所に石を打つという行為は、まったくできなくなっています」

「とても信じがたいことですが」

という記者からの問いかけにアキラは

「ボクたちにとつても信じがたいことです。ただ、信じがたいと言うなら、そもそも彼女の棋力そのものが信じがたかったのではないのでしょうか。思い起こしてください。彼女はご存知のとおり知的障害を負っています。そんな彼女が、12歳でプロ試験に合格しました。それも、27勝無敗。しかもすべての対局を午前中に中押し勝ちしたのです。翌年の1月の新初段戦では、森下九段にふつうの5目半のコミで勝ちました。15歳で棋聖と本因坊のタイトルホルダーになりました。この棋力こそ、信じがたいものではないでしょうか？」

記者たちは一瞬静まりかえった。そして、一人の記者が

「信じがたい出来事は信じがたい終わり方をする、ということですか？」

と問う。

「ボクは、そのように納得しました」

とアキラは答える。それから後もいくつか質問は出されたが、いずれもアキラが答えて、記者会見は終わった。ヒカルは自分の代わりに質問に答えるアキラをいつものものにこやかな笑顔で眺めていた。そして、

「終わったの？」

とアキラに問う。

「うん、終わったよ」

「もう、帰っていいの？」

「うん、もう帰っていいんだよ」

ヒカルはアキラに手を差し出す。いつものように手をつないでほしいと。アキラはにっこり笑ってヒカルの手を握る。ヒカルも笑顔を返す。ヒカルはアキラに手を引かれて記者会見の壇上から去る。それは、いたいけない幼子が年の離れた兄に手を引かれて歩いているようだった。

その記事は、あかりも読んだ。

「信じがたい出来事は信じがたい終わり方をする」

あかりにとつても納得できる説明だった。確かに、始まりも信じが

たい始まり方だった。終わりが信じがたい終わり方なのも当然と思える。次の日曜日、あかりは塔矢家を訪れた。ヒカルは

「あかりちゃん！」

と言つて駆け寄り、あかりにまといつく。

「ほんとうに、ヒカルちゃんは何も変わらないのね。碁を打つ前も、碁を打つた時も、碁を打たなくなつてからも、何も変わらないね。わたしと一緒に時は」

9—3

記者会見から1ヶ月が過ぎ、2ヶ月が過ぎ、3ヶ月が過ぎ、年が暮れ、新しい年が明けた。メディアからヒカルの名前は消えていく。棋界ではヒカル伝説が生まれつつあったが、世間は天然天才少女と呼ばれた小柄な女の子のことを忘れ始めた。

アキラと行洋はヒカルが時おり作る独創的な打ち手を含む棋譜について語りあう。その棋譜に含まれる驚くべき打ち手は囲碁の定石を変えるかもしれない。そのような発見を隠しておくべきではないという点では親子は一致している。では、どうやって棋界に知らせるか？

棋譜を公開すれば、当然のことながら誰と誰がいつどこで対局した棋譜かという疑問が提出されるだろう。ありもしない対局をでっち上げるわけにはいかない。では、ヒカルが一人で思いついた棋譜だと真実を語るか？

「そうすれば、ヒカルさんがまた注目を集めることになる。確かに、お前が言っていたように、彼女が佐為の代理人として碁を打ち『天然天才少女』と呼ばれていた頃、その『天然』で世間の好奇心をうまくすり抜けていた。だが、また同じことをさせるのは、わたしには忍びないのだ。彼女は、そつとしておいてあげたい。このまま忘れられてほしい」

アキラもその点は父に反対しない。ただ、

「それでも、あれらの棋譜を隠しておくのは、棋界に対して後ろめたい気がします。革命的とさえ言える打ち手を誰にも教えないでおくのは」

行洋は、ちよつと考え込む。

「・・・そうであるなら、お前が・・・わたしたちが、その手を使つてみせれば良いことだ。実際、本因坊戦ではお前も佐為Ⅱヒカルさんも何度かあの手を見せた。それで『入神の碁』とか『神業』という言葉がメディアを賑わせた。あの数回の打ち手だけでも、かなり研究されているだろう。これからもっと多くの機会に、わたしたちが打てばいいのだよ・・・そういえば、お前は本因坊戦から以後はあれらの手を封印しているね。なぜだ？ なぜ使わないのだ？」

「なぜか、ほかの人との対局では思いつかないんです。佐為に触発されて・・・ひよつとしたらヒカルちゃんに触発されて、あの手を思いついたのかもしれませんが。でも、これからはもっと積極的にあの神業を使う場面を見つけるようにしましょう。今年はボクが本因坊位を守るのだから、神業を使いこなせるようにならないといけない・・・これから、今年も来年も再来年も、その次の年も、ずっと守り続けます。いつかボクが『秀策の再来』と呼ばれるように。だって、秀策その人と6年にわたって毎日のように対局し、鍛えられていたんです。それで秀策の再来になれないようなら、ボクは自分で自分を許しません」

アキラはいつのまにか行洋ではなく自分に語りかけていた。

この話をアキラは明子にも伝えた。ヒカルに係わることだから、明子にも知らせるべきだと思ったから。

明子も、ヒカルをまたメディアに晒すようなことはしたくないと思う。ただ、だからといって、プロとして、「天然天才少女」として碁を打っていた5年の歳月がヒカルにとって無駄だったとも思わない。メディアとの対応はアキラが代行していたにせよ、この歳月、ヒカルはヒカルなりに世間と係わり、得るものもあつたと思う。

「たとえば・・・5年くらい前のことになつたけど、行洋さんが心臓発作で入院した時、ヒカルちゃんは行洋さんを必死で守ろうとした。ただわたしたちに守られるだけの存在から脱皮した。ヒカルちゃんは何も変わらないようだけど、でも何かが変わっている。それはきつとプラスの方向への変化、成長のはず・・・今、塔矢家に保護され

て棋譜遊びと散歩だけに日を過ごすヒカルちゃんも、もちろん幸せだとは信じているけど……」

明子の心にあかりの言葉がよみがえる。プロへの道を後押ししたあかりの言葉

「チャレンジさせてください……なにもさせてもらえず、ただ保護されるだけの人生より、その方が幸せじゃないですか？」

明子は、知恵を借りたい気持ちで、かつて「サヴァン症候群」という言葉を教えてくれた友人を再訪した。友人も「天然天才少女」塔矢ヒカルのごときは知っていた。明子は、それに加えて、行洋が入院した時のヒカルの振る舞いについても話し、ヒカルが持っている「何か」を役立てる方法がないものかと問いかける。

「焦らなくてもいいと思うわ」

「焦らなくてもいい？」

明子は問い返す。

「そう。焦らなくてもいい。ヒカルさんの美質はきつといつかどこかで誰かの役に立つと思う。というか今も役に立っているのよ。塔矢家の3人を幸せにしているじゃない。ひよつとしたら、いとこのあかりさんも幸せにしているかもしれない。それだけでも、すばらしいことよ。世の中には誰一人として幸せにできない人間、周りを不幸にしかできない人間もたくさんいるんだから」

友人は苦笑をまじえて語る。

「そんな連中に比べれば、ヒカルさんはずっと立派よ。それだけで、この世に存在している意義がある」

明子は一瞬あつげにとられ、それから友人の毒と優しさが奇妙に入り交じった励ましに苦笑いを浮かべた。

「そんな連中なんかと比べないでくれ、って言いたいなの？」

「まあ、そう言いたい気持ちはあるけど……それはそれとして、ヒカルちゃんはいまでも十分に周りを幸せにしているというのは、納得できる」

「それなら、焦らないで。いつかヒカルちゃん的美質をより多くの人のために発揮できる機会が訪れるかもしれない、ヒカルちゃんが何事

かにチャレンジする機会に出会うかもしれない。その時、チャレンジすればいいのよ。その時までゆっくり待っていていればいいの。まだ19歳なんでしょう・・・仮にそんな機会がなかったとしても、今のままでも、ヒカルちゃん存在は無意味ではないはずよ」

「うん、分かったわ」

明子はうなずいた。

やがて冬の寒さも緩み始め、「小さな公園」の梅の花が咲く頃になった。明子は「こんど梅の花が咲いたら、わたしが挿してあげましょう」という約束を果たすつもりでいたが、折悪しくインフルエンザで寝込んでしまった。気を揉む明子に行洋が語りかける

「無理しないで、ゆっくり休んでなさい。花は来年も咲くのだから。たまにはわたしがヒカルさんを散歩に連れて行ってあげるよ」

行洋は、ヒカルの手を握って歩きながら、15年ほども前のことを思い出した。まだ小学校に入学する前のアキラとこうやって手をつないで歩いていた時、アキラが「お父さん、ボク囲碁の才能あるのかな」と尋ねた。あれからもう15年あまりが過ぎた。そのうちの7年くらいはヒカルと一緒に。15年・・・過ぎてしまえばあつという間と思える。ひよつとして、死ぬ間際には一生さえもあつという間と思えるのか？

「そうかもしれないな」

行洋はつぶやく。ヒカルは行洋を見上げる。

「いや、なんでもない。つい独り言を言ってしまった」

ほどなく、「小さな公園」に着いた。行洋は紅梅を1輪手折り、ヒカルの髪に挿す。ヒカルは笑顔で行洋を見上げる。行洋は思わずヒカルの頭を撫でた。ヒカルはふと左を向く。

「佐為がいるのかい？」

「うん」

その夜、ヒカルは何百度目かの佐為の夢を見た。

夢の中で、ヒカルは佐為と碁盤をはさんで向かい合っているけど、石を打ち合うことはない。そばの満開の紅梅と白梅の木から時おり花びらが舞い落ちる。碁盤に落ちた紅梅の花びらは黒石に、白梅の花

びらは白石になる。そうやって碁盤に石が並んでいくけど、消えてもいくから、碁盤にはいつまでも余地があり、そこに花びらが落ち続ける。二人の碁は碁盤に散る花びらを、碁盤に並ぶ黒石と白石を、いつまでも明るい笑みを浮かべて眺めている。まるで終わることのない永遠の遊戯のように。

H i k a r u a n d S a i , E t e r n a l

おわり

F I N